

国文学研究資料館

二〇〇六年度秋季特別展

ROBUN

假名垣魯文

百覽会

展示

目録

会期

自十月十七日(火)

至十一月二日(木)

目次

一 仮名垣魯文 ^{ROBUN} の肖像	1
1 はじめに	1
二 江戸の残照	5
2 切附本	6
3 幕末時事もの	6
4 合巻	8
5 道中記	11
三 開化の寵児	13
6 西洋人もの	13
7 説教もの、滑稽本	15
四 報道する戯作者	18
8 報道もの、新聞雑誌	18
9 高橋お伝	21
五 魯文の交友圏	23
10 交遊と売文	23
六 毎日新聞社新屋文庫蔵 魯文関連資料の紹介	28
11 新屋文庫	28
七 その他	38
12 錦絵・自筆資料等	38
13 デジタル展示	42
附録・猫杵（二種）	43
国文学研究資料館蔵 仮名垣魯文著作リスト（暫定版）	（45）
執筆者等一覧	49

凡例

- 一 本リーフレットは、国文学研究資料館二〇〇六年度秋季特別展「仮名垣魯文百覽会」の展示目録として作成したものである。
 - 一 展示は、目次に掲げたように、一〜七のブロック・1〜13のセクションによって構成される。全体的なコンセプトは、以下の通り。

魯文の生涯をほぼ年代順に辿る形で、「二 江戸の残照」「三 開化の寵児」「四 報道する戯作者」のブロックを設け、さらにテーマごとのまとまりで「2 切附本」以下「9 高橋お伝」のセクションに分けた。加うるに、「一 仮名垣魯文の肖像」「五 魯文の交友圏」「六 毎日新聞社新屋文庫蔵 魯文関連資料の紹介」等を以てし、魯文および同時代に生きた戯作者たちの群像を、その文業と共に通覧した。
 - 一 本リーフレットでは、原則として、各展示セクションの概要を示した後、展示物個別の説明をおこなった。後者は、書誌事項と簡単な解説からなる。書誌は以下の如く記述した。

展示番号 書名^{よみがな}

書型および冊数。刊年等。作者、画工等。刊行地 版元。所蔵 請求番号

一 角書きは、空白一文字で区別した。本文引用に際して、ルビは適宜省略し、仮名遣いは原文のままとした。新聞・雑誌名は『』で括った。

一 展示セクションの概要および展示物個別の説明について、それぞれの末尾の（ ）内に執筆者の姓を記し、リーフレット巻末に執筆者等一覧として掲出した。
- * *
- ※ 展示資料の中には、種々の歴史的制約に根ざす、いわれなき差別と偏見に囚われた表現が含まれています。本展示はそうした歴史的事実と向き合いつつ、日本の文学と文化について考えてゆくために、あえて当時のまま翻刻等をおこなうものです。
- ※ 本展示および展示目録は、国文学研究資料館複合領域研究系「開化期戯作の社会史研究」プロジェクトによる研究成果です。
- ※ 今回の展覧にあたり、貴重な資料をお借し下さった各機関、個人の方々に心より御礼申し上げます。

一 仮名垣魯文の肖像

1 はじめに

文政十二年（一八二九）一月六日、江戸の京橋鎗屋町で棒手振の魚屋を営んでいた野崎佐吉の家に男児が生れた。兼吉と名付けられたその子は、九歳で新橋の鳥羽屋という商家に年季奉公に出される。兼吉は十返舎一九の膝栗毛ものを初めとした戯作を愛読するようになっていったが、その俗文芸の嗜好は、放蕩のため勘当されて折から継母の里方である鳥羽屋に身を寄せていた通人の細木藤次郎（後の香以）の手ほどきで熱度を増し、弘化四年（一八四七）には、和堂珍海の戯号で処女作『清談青砥刃味』を刊行した。その後、狂言作者で戯作もよくする花笠魯介（文京）に入門、師の名にちなみ英魯文と名を改めた。『名聞面赤本』は、戯号を披露するためにさまざま先輩から貰った狂句・狂歌を集めて嘉永二年（一八四九）に魯文が出版した本である。

次第に遊蕩にふけり始めたのを鳥羽屋の主人に咎められたのを機に店を飛び出した魯文は、怪しげな安宿で戯作を書いて本屋に持ち込んだものの相手にされず、相模国高座郡萩園村（現在の茅ヶ崎市）の野崎の本家を頼っていくが、そこで紹介された寺も長続きせず、再び江戸に戻り藤岡屋慶次郎という書肆で店番として勤めることになる。そこで扱っていた合巻物に読み耽っていた魯文だったが、かねて知り合っていた柳下亭種員に店で出会ったことから、店番である我が身を恥じてそこを逐電、旅人宿であった男とともにその故郷である上総の新堀に流れていく。將軍の参詣で賑わう日光で花簪を売って一もうけしようとして出掛けた魯文は、一文無しで泊った宿屋で狂歌師を騙ったりしたあげく、香具師の虎屋倉吉と出会い、江戸に戻って倉吉の出す瓦版の原稿を書いたり、佐倉宗吾をあつかった粗末な本を執筆したりしていたが、それが番付や絵草紙などを出していた品川屋久助という書肆の目にとまって、合巻物の執筆を頼まれることになった。それらにより思いの外の利益を得た品川屋と虎屋により、嘉永六年（一八五三）夏に湯島妻恋町に一軒の家を買い与えられた魯文は、その家を野狐庵と名付け、「御詠案文認所」と書いた売文の招牌を掲げ、品川屋などの需に応じて切附本などを精力的に制作しはじめることで、ようやく一人前の戯作者として出発

していった。

魯文が鈍亭の号を仮名垣に改めたのは、野崎左文によると、初代柳亭種彦の合巻『正本製』の三編「当歳積雪白表紙」の口絵にあった赤本入道仮名書という登場人物の顔が当時の魯文にそっくりであることを、笠亭仙果から指摘されたことによるという（『かな反古』）。

展示の冒頭に当たる本セクションでは、魯文の面貌を様々な著作の中から窺ってみたい。

（谷川）

1-1 名聞面赤本

中本一冊。嘉永二年（己酉、一八四九）刊。国文学研究資料館蔵 ナナ二

花笠魯介（文京）に入門して名乗った魯文という戯号を披露するために、先輩の戯作者や狂言作者などから貰った狂歌・狂句を集めて魯文が制作した配り本。十八世紀の末の安永から寛政年間にかけて隆盛した黄表紙の体裁にならった表紙（画は溪斎英泉）をもつ。師である花笠文京の「門人魯文なるもの嘗て別号して和堂珍海とよび数種の稗史を編り／通用のよきこそ人の宝なれ銭といはずに筆をとるへし」に始まり、河竹新七・鶴屋南北・十返舎一九・為永春水・柳下亭種員・山東京山・曲亭馬琴などの狂歌・狂句を収め、最後に「僕がつきはきする狂文のはさみ仕事にふる着の趣向をあらひ張して戯作者の手前符牒をつけんとして／赤本の桃ならなくに我は又洗濯ものゝ名や流すらん」という魯文の狂歌で締めくくる。

『かな反古』によると、魯文がこの本のために勤め先の鳥羽屋に内緒で諸方から狂句・狂歌を貰って歩いたのは嘉永元年のことで、同年九月の父の死により刊行するための貯えが底を尽き、翌年に友人の援助によりなんとか百部を作って知己に配ったものだという。

赤本はお伽話を描いた子供向けの草双紙で、本書の五丁一冊という体裁もそれらにならっている。本書の表紙に描かれたのは桃太郎と鉢かつぎ。

冒頭にある魯文の序を次に掲げる。

夫子童謡をすてず。班固巻説をとるそれから思ひ机に寄。下手の畫きし人丸な

らで。天窓かく山涎くり。稗史を戯作の手習初に筆掛の初登山にのぼり。浪花

津の梅の花笠大人に寺入して。先読習ふ実語教人賞たるが故にたんと不書と。

京伝翁が秀句を思ひ。兼て書拔故事来歴。神釈無常口説の文句。彼丸本を六韜

三略。たらなき智恵を絞りてもくゞり枕は砕くによしなく。何でも四文の切抜

文作。まだ口嘴も黄表紙の。筋と画組は生どるとも芝居不知の野暮驚訛も多き

作者ぶりは。おこがま識者の笑をとれり。昔々あつた土佐絵の古風を慕ひ。金平本

を初めとして。世に流れたる桃太郎。人並に毛か三本たらぬ猿蟹合戦。舌切雀

のしたゝるき。作意ながらも板元から御宿はどこしやとお尋ありて。一番詠ひ

玉ひなば。月の兎の手柄にて夫こそ枯木に花咲爺鯛の味噌ずのなまくさ鍋。四方

のあかの他人ともなし玉はず。其評判を待かね山の郭公。何と童蒙衆合点かと

ひたすら願ふ商口。今年戯作に仲間入して。古き作者と諸共に同じく肩を並べ

んとは。大木の切口太い根じやふてらこい。赤本の口調に准ひて

嘉永二巳酉春 英 魯文 (谷川)

1-2 於歳玉毬唄絵解

中本一冊。安政三年(一八五六)刊。仮名垣魯文著、浮世庵国正画、金瓶浄書。江戸

公羽堂伊勢屋久助。国文学研究資料館蔵 ナ4-666

自序に続けて「てまりのもとうた 作者暗記」として手鞠歌を載せ、獵銃を担いだ長兵衛と、おなつ・おつる・いろはの娘三人の姿を描く。「このゑときほんものにくわし」とある如く、歌の内容を膨らませる形で物語が展開する。おなつに横恋慕する庄官調兵衛は、獵師長兵衛とおなつの恋路を破落戸蝶兵衛に邪魔させる。艱難を逃れる内、幼くして別れた三姉妹が奇遇にも巡り会い、それぞれに思い人と添い遂げ幸せに暮らすという「絵解」の筋書き。なお、「てまりのもとうた」の書き始め「ちやうべいゝが三人とほる(略)こゝのこむすめにちよとほれた」は、童唄の故実付き由来譚である『童唄 古実今物語』(清涼井蘇来著、宝暦十年(一七六〇)刊)巻一「松前長兵衛が事の始」が巻頭に掲げる童唄とほぼ同文であり、また「おらがあねさん三人ござる(略)したやいちばんだてしやでござる」は、『古実今物語』巻三「絹屋彦兵衛三人の娘の事」所引唄と同文。魯文の「暗記」か否かは疑わしい

ものの、巷間に流布した歌謡に材を取り合巻に仕立てたものであろう。

展示箇所 self序では、文机に向かい筆を手に座す魯文の姿が描かれ、その背後に

は「赤本」と書かれた本箱もみえる。「赤本作者」と自称していた魯文若年の肖像と

して貴重。絵師の国正については詳らかにしないが、浮世庵と号した歌川国直(一

七九五(一八五四)門下か。

(青田)

1-3 粹興奇人伝

中本一冊。文久三年(一八六三)序。仮名垣魯文編・山々亭有人編、春の屋幾久校、

一惠斎芳幾画。江戸 宝善堂丸屋徳蔵。国文学研究資料館蔵 ナ4-358

本書は、その書名が端的に示すように、三題噺の会として当時有数の粹狂連と興笑連の合作になる噺本で、「本朝の通客粹興の畸人」(魯文跋)とされる作者二十三人の小伝を併記する。見開き一丁を一人宛とし、右半丁の上部に小伝、下部に歌句を添えた肖像、左半丁には同人作の三題噺を載せる。魯文は、草紙に片肘ついて横様になり、誰か筆になるものか、思わせぶりに巻紙を読む姿で描かれている。二十三人中唯一、いかにも寛いだ肖像である点が目を引く。

「翻刻」

魯文ははじめ鈍亭と号して花笠文京秘蔵の門たり其昔富家につかへて丁稚たりしときある人相して此子僧長く商家にあるべきものならず文に遊ばゝ世に名をあげんといはれしがはたして行程もなく主家を退身し路通が昔ならねども処さためぬ旅路にさまよひそのほかしゆくゝのかんなんして終に妻乞に居をまうけてより次第に売名す素是幼少より商家に仕へ半途にして大に窮し物学ふいとまあらずといへどもそも八九才の頃よりして作道に志ふかく十四才の末謙吉と呼し頃より著述の書あり好こそ上手の理今戯作者中の才子也

仮名垣魯文

大海をしらぬ蛙も井のうちに居ながらよめる名処の歌

水滸伝。大女。涼船 仮名垣魯文作

宋孔といへる通客とほりものたいこもちの都林中講師燕青などを伴ひあつさを水の漣ほどりにさけん
とやなぎばしより船をうかべあちこちとこぎまはるに比くらしも五月廿八日川びらきの
夜の事にしてあがる花火の星くだりは百人の数にみちおのく佳興に入るをりしも
橋間やまたにつなぐ家形のへさきに身の丈ばつくんくにすくれし女たちいでてすゞみ居たる
にこなたの人々これを見て 宋「コウノ見さつシアノやかたぶねに立てゐるをん
なはがうぎにせいがかいかじやアねへかありやアどのばけものだ 林「モシだん
なあれをごんじなしかへこんどよこはまから来た肉まんぢうのこさんといふげい
しやサ 「ハ、アあれが名代の大をんなだのせいのたかさはいくらあらう七尺はた
つぷりだぜ 林「なに七尺できくものか八九尺はあるだらう 宋「イヤく八九尺
じやアきくめへぜ 青「まさかさうもごぜへすめへ 宋「さうでねへこ三女だから
一丈せいだらう

(青田)

1-4 春色恋廻しゆんしよくこいのそめわけ染分解

中本五編十五冊。初・二編万延元年(一八六〇)、三編文久元年(一八六一)、四編同
二年、五編慶応元年(一八六五)刊。山々亭有人著、歌川国富画・一惠斎芳幾画。江
戸 文鱗堂。禾口庵文庫蔵(三編四編)

近松の浄瑠璃『丹波與作待夜の小屋節』(宝永五年(一七〇八)初演)で知られる
與作・小萬の情話に抛り、伊達屋與四郎(俳名花雪)と芸者小萬の恋情、花雪の妻
お重の貞節、お重の養父欲右衛門の我欲と改心、お重に恋慕する忠六の奸計、伊達
屋の後家お柳に通じる番頭八蔵の悪巧み、花雪とお重の愛児三吉の可憐、芸者小全
とその情人彦三の挿話を織り交ぜ、善悪入り乱れての人間模様の果て、花雪がお重
・小萬の兩人を本妻となし琴瑟相和し繁栄する顛末を描いた人情本。

展示箇所の四編口絵には、パトロン細木香以を取り巻く形で、狂言作者の黙阿弥
河竹新七、筆耕の武田交来、そして魯文ら戯作界の諸先輩をはじめ、芳町布袋屋お
糸といった三題噺連中が描かれ、有人の処女作と目される本作に花を添えている。
ちなみに、五編にも同様に、本作の内容とは関連のない口絵が一丁半あり、「粹興兩
連梅の遊覧」として、福井扇夫・柳橋岡本屋お幸を従えた粹狂連の催主好文舎花兄
と、興笑連の才子冬の屋嘉遊と柳橋小春、その領袖春廻屋幾久、さらに柳花と布袋

屋お糸が描かれている。

(青田)

1-5 春色しゆんしよくさんだいはなし三題噺

二編六卷二冊。初編元治元年(一八六四)、二編慶応二年(一八六六)刊。春廻屋幾久
編、山々亭有人校、一惠斎芳幾・他画。江戸 文玉堂。酒田市立光丘文庫 1155(展
示箇所は、国文学研究資料館蔵マイクロフィルム 26341-1より紙焼き)

二編下巻の挿絵に、野遊びの遊興であろうか、芸者大幸(柳橋お幸カ)に迫いか
けられ臍を剥き出しにして逃げる粹狂連の扇夫・魯文が生き生きと描かれている。
この場面の絵師は一交斎梅恵。なお、山々亭有人による二編序に「粹興兩連一個
弄月亭有人識」と記されるように、本書は、粹狂連・興笑連中による三題噺の競演
作。書名に「春色」とあるが、艶めいた噺は全体の半数以下でしかない。魯文作の
小咄も、初編・二編に各一ずつみえる。

〔翻刻〕

姫はじめ 辻占 傘

仮名垣魯文作

ある人道のかたはらにてさやくやう「昨日は二日の姫はじめに。郭へ初買と出か
けやした 「そりやあすじだった。相変らず上出来でござへやしたらう 「所がと
んちんかんで極の不の字サ 「ハテね。ぬしにねへ世界だつけ 「ナニサ辻占がわ
るかつかからサ 「そりやあどういふ理屈だね 「聞玉へ目ざす楼へのぼらんと欲
すると仲の町の門飾りが。背中合せでその上降られる訳がありやす 「ナゼ 「傘
がさしてあつた

千手観音 遣り手 酔の物

仮名垣魯文作

ある端女郎いつでも物まへにさし支へ内証へそうくは借金も出来かね移り替に困
じ果遣手になげいて相談すれば やり手「ホンニくお前のやうに不働きの手のな
い女郎衆は珍らしいヨ。チト千手観音さまでも信心して新手を出して客人を呼で見
なとなぶり半分異見され流石に恥てや是よりはむせうに客を勤めるうちいつしか懐
妊して兎角酔の物ばかりを好むゆへ扱はと遣り手が心付「おまへはどうも只ならぬ

様子だが定めし月が留つたらうね 女郎「アイどうも面目ないんぎます やりて」そ

して客人は誰方だか覚へが有うね 女郎「イ、エどうもと云たばかりうちくとし
て居るゆへ やりて」さつぱり覚へがないのかえ。コリヤア無理はない根が手のな
いお前だからお腹のやゝ迄 女郎「なんぎます やりて」てゝなしと見へた

(青田)

1-9 くまなき影かげ

24.8×18.0cm 一冊。慶応三年(一八六七)刊。皎々舎梅唄編、落合芳幾画。個人蔵

波月亭花雪の三周忌に行われた追善の興画合わせの会に参加した人々の作品、お
よびその影絵と略伝を載せる。本書は仮名垣魯文旧蔵の配り本で六十八名を収録す
る。興画合わせは、幕末から明治初期にかけて江戸の市井で行われた遊びで、野崎
左文の『かな反古』に次のように説かれている。

此遊びは先づ会日を定め其前に兼題を配り置いて当日其趣向を持寄り衆議判に
て之が優劣を定め高点の部へは夫々賞品を配るといふ方法なりき其興画の認め
方は兼題の品物を画中にあらはさず故事又は古歌等の意を取り他の景物を描き
出して夫となく兼題を利かする趣向にて例へば寄月水という兼題の出たる時は
薄の原と富士の遠見のみを画きて武蔵野と見せ月と逃水とを隠して夫となく兼
題を利かせ又養在深閨人未識という詩の句を兼題に取りし時は室咲の梅を描き
て余意を示すがごとき趣向なり魯文も亦此遊び仲間に加はり時々興画を出品せ
しが是は三題晰の下手際なりしに引換へ毎度高点を取りて喝采を博せし事あり
波月亭花雪は、この遊びのパトロンである金座役人辻伝右衛門の長男で、興画合
わせの主催者だった。花雪追善の会には、魯文の他に芳幾・交来・其水・玄魚・有
人なども参加し、本書にその影絵と略伝が載る。編者の皎々舎梅唄は花雪の弟。本
書には、細木香以と有人の序、および魯文の跋が付されている。

本書に載る魯文の略伝は次の通り。

筆頭の疾事、風来を欺き、狂文に走れる事、三馬が才も遅かるべし。著述の稗
史愛翫を得ざるはなく、无学稿の引札滑稽至らぬ限もなければ、虚名を一時に
高うせり。唯□として、一日花街にいたらねば寢食を克せねど、あながち京伝
が昔を忍べるにもあらず。思ふに此子、西村主が志を継で、花街慢録の後篇を揖

ん腹稿あれば、夫等のゆゑならんかし。

(谷川)

【参考出陳】 くまなき影かげ

25.0×17.0cm 一冊。慶応三年(一八六七)刊。八十二名を収録した市販本。版行は、

羽扇の名で本書に影絵と略伝が載る地本草紙問屋の広岡幸助。毎日新聞社新屋文庫蔵

759

1-7 西洋道中膝栗毛せいようどうちゅうひざくりげ

展示箇所は、第九編(明治四年(一八七二)刊)より「稗史家の脚色」。国文学研究資
料館蔵 ハナ一 ※書誌事項は5-6参照

右端に「一惠斎芳幾写真」とあり、『西洋道中膝栗毛』創作の舞台裏を「写真」し
たという趣向である。本屋側の「西洋流行へ付け込んで」「目先の変わつた趣向」が
欲しいとの要望に対し、「せんせい」が「弥次北八が飛脚船で航海の旅歩きを西洋道
中膝栗毛とでもやらかして書いたら少しは売れるだろう」と述べている。右側にい
る人物が先生の仮名垣魯文、左側にいるのが万笈閣主人である。万笈閣主人は『西
洋道中膝栗毛』第十一編の「老実伏稟」にも登場している。

【翻刻】

「ときにせんせいこのせつの西洋ばやりへつけこんでなんぞ目さきのかはつたしゆ
こうはござりませんかお仕入がありますならおゆづりをねがひます」「そうさこれと
いふ仕入もないがれいの弥次北八がひきやくせんで航海のたびあるきを西ようだう
ちうひざくりげとでもやらかしてかいたらすこしはうれるだろう」「これやアめうで
ございますしかしせいようはさておみていつさいからむちうのわたくしゆゑとりつ
きどころがござりませんせいどうかすじがきをねがひます」「おらアそんなひま
はねへがふくぎはのたびあんないでおさきまつくらにこぎつけりやアどうなり稿成
地中海までのりこむだらうヨ

(青木)

1-8 牛店雑談 安愚楽鍋

明治五年（一八七二）刊。展示箇所之二編口絵に、芳幾の描く魯文の肖像を載せる。国文学研究資料館蔵 ハトト ※書誌事項は7-3参照

肖像に添えられた賛は次の通り。

魯文 名は魯、字は文造、一に氷狐堂、又は黒牡丹と号す 浅草 仮名垣文蔵
薙髪のをりに斯なんよめる

渋皮を纏ひなからに毬栗の笑む日をまつそ楽しかりける

「浅草」とあるのは「浅草諏訪町二戸ノ内三番の借家」（『河童相伝 胡瓜遣』目録）。

「散髪ノ儀ハ勝手次第タルヘキ旨」の布令が出されたのは明治五年四月で、この年の冬から魯文は横浜に住むことになるから、魯文が「薙髪」する（ザンギリ頭になる）のもこの頃のことと考えていいだろう。魯文と山々亭有人の両名が、「従来ノ作風ヲ一変シ乍恐教則三条ノ御趣意ニモトツキ著作可仕」と教部省へ届け出たことが報じられたのもこの年の七月であった（『新聞雑誌』第五二号）。「黒牡丹」は魯文が売っていた売菓の名で、野崎左文によると横浜の魯文の家の格子戸にもこの名を記した看板が掲げてあったという。『安愚楽鍋』初編の口絵にある看板に「牛の煉菓／氷湖道人／黒牡口／売弘」とある。魯文の自伝に「明治維新の際一人兩名不相成とて野崎文蔵を仮名垣魯文の通称に改む、其筋の内命なり」とあるのは（「仮名垣魯文翁の自伝」『私の見た明治文壇』）、魯文が仮名垣を正式の苗字としたことを指す。明治五年の正月に売り出された『倭国字西洋文庫』二編の自序において、魯文は「去歳より苗字も公然と通称の上に居へて 仮名垣文造紀魯」と自ら名乗った。

（谷川）

1-9 明治英名百人首

中本一冊。明治十四年（一八八一）四月刊。安井乙熊編、松斎吟光画。出版人平野伝吉、東京 錦松堂発兌。国文学研究資料館蔵 ハ2-38

藤原定家撰『百人一首』に対し、百人各一首形式で編まれた類書を「異種百人一首」と総称するが、本書もその一つ。「明治中興己来在廷の頭官明吏陸海軍諸將校をはじめ華族縉紳学士新聞記者に至るまで凡そ江湖に有名なる各位の詩歌を輯め」（編

者自序）、肖像と小伝を附したものの。「今上天皇」に始まる掲載人物中、新聞関係者が多数みえるのが本書の特色といえる。日報社福地源一郎・報知社栗本鋤雲・朝野新聞成島柳北・毎日新聞沼間守一・読売新聞高島藍泉・報知社藤田茂吉・曙新聞中村武雄・絵入新聞前田健次郎、そして「いろは新聞仮名垣魯文君」が百人中九十八人目に登場する。

〔翻刻〕

君は東京の人猫々道人と号す幼にして伶俐好んで稗史小説を綴る曾て横浜に在るの日、横浜毎日新聞の記者となる幾く許もなく東京に皈り一の仮名新聞を出版す之をかなよみ新聞といふ明治十二年の冬いろは新聞の社長となり新聞中殊に猫洒落誌の一欄を設け府下校書社会の景況を具に穿ち一々之を新聞上に報ず之れ猫々道人の号ある所以か

いろは新聞仮名垣魯文君

お見南枝よき日にひらく花曆梅か香そえて配り始めけん

（青田）

【参考出陳】 明治英名百人首（銅版・改修後印本）

極小本一冊。明治十五年（一八八二）五月別製本御届。安井乙熊編。出版人平野伝吉、東京 錦松堂発兌。国文学研究資料館蔵 ラ6-41

木版刷り（1-9参照）を銅版にて翻刻したもの。前者の見返しにあった松斎吟光画図の文字は、本書にはない。全体的に稚拙な模刻となっており、魯文の面影からも明らかであろう。ただ、木版本の売れ行きを反映してか、十七肆であった売捌所が、銅版本では東北から九州・沖縄に及ぶ百五十肆に及んでいることは注目される。

（青田）

二 江戸の残照

2 切附本

切附本1

鈍亭時代の魯文は、その生業としての著作を切附本というジャンルから開始した。切附本は草双紙風摺付表紙を備えた中本型読本の末流で、安政期以降に粗製濫造された大衆読み物。その最大のコンセプトは、既存の実録や読本等の抄録(ダイジェスト)という一点に存する。魯文はこの切附本の代表的な担い手であった。以下、魯文の切附本を用いて、切附本の各部分を具体的に示そう。

- 2-1 表紙『輪廻応報四谷怪談』中本一冊。安政三年(一八五六)。鈍亭魯文、国周画。江戸 新庄堂。国文学研究資料館蔵 ナ4-660)
- 2-2 見返・序文『浪花男団七黒兵衛』中本一冊。安政二年(一八五五)。鈍亭魯文、芳員画。江戸 新庄堂。国文学研究資料館蔵 ナ4-679)
- 2-3 本文冒頭『安達原黒塚物語』中本一冊。安政二年(一八五五)。鈍亭魯文、芳員画。東京 新庄堂。国文学研究資料館蔵 ナ4-661)
- 2-4 挿絵『小夜中山夜啼碑』中本一冊。安政二年(一八五五)。鈍亭魯文、芳員画。江戸 新庄堂。国文学研究資料館蔵 ナ4-678)
- 2-5 刊記『蝦夷錦源氏直垂 後編』中本一冊。安政三年(一八五六)。鈍亭魯文、芳員画。江戸 公羽堂。国文学研究資料館蔵 ナ4-497)

切附本の中には同様の中味を持ちながら短冊形文字題簽を持つ物もあり、これを「袋入本」と呼んでいる。

- 2-6 表紙『国姓爺一代記』中本一冊。安政元年(一八五四)。鈍亭魯文、国周画。国文学研究資料館蔵 ナ4-698)
- 2-7 見返・序文『依藤太龍宮屋話』中本一冊。安政七年(一八六〇)。鈍亭魯文、芳員画。江戸 錦森堂。国文学研究資料館蔵 ナ4-667)
- 2-8 本文冒頭『氷神月横櫛』中本三冊。安政七年(一八六〇)。鈍亭魯文、芳員画。江戸 錦森堂。高木元蔵)

また、明治期になってからの後印本も存する。

- 2-9 後印本の見返・序文『西国巡礼娘敵討』中本一冊。明治期刊。鈍亭魯文、芳員画。東京 金松堂。国文学研究資料館蔵 ナ4-251)

切附本2

『英名八犬士』(中本八巻八冊。安政二〜三年(一八五五〜六)。鈍亭魯文、直政・芳員画。江戸 公羽堂。国文学研究資料館蔵 ナ4-680-1)は、曲亭馬琴作『南総里見八犬伝』の抄録本であるが、挿絵を加えた上で、本文のほとんどは原文の切り貼りで作られている。展示作品2-10〜17は摺付表紙。全八巻揃いは珍しい。併せて、二編の見返・序文(2-18)、三編の本文冒頭(2-19)、初編の挿絵(2-20)、三編の刊記(2-21)を示した。

後印改竄本は袋入本で、外題「里見八犬伝 一(〜八)」、口絵を削り、内題下に「曲亭馬琴作」と入木してある。五編の表紙(2-22)、八編の見返と改刻された口絵(2-23) 2-18〜23は高木元蔵本。

(高木)

3 幕末時事もの

安政二年十月二日(太陽暦一八五五年十一月一日)、江戸はマグニチュード6.9の直下型地震に見舞われる。火災・津波も発生、死者は町人武士合わせて六千人に及んだという(『安政江戸地震災害誌』東京都総務局行政部 昭和四十八年)。

当時から出しの戯作者として、湯島妻恋町に「談笑諷諫滑稽道場 御詠案文認所 江戸作者 鈍亭魯文」の看板をかかげ、「切附本」などに糊口を凌いでいた魯文も罹災するのだが、たくましくも魯文は、河鍋暁斎などと組んで絵画といわれる地震を題材とした瓦版を多く書いたという。『安政見聞誌』もその地震に取材したものである。その著作の経緯を野崎左文は、魯文自記の『新旧総代記』を引用し「書肆三河屋鉄五郎より安政見聞誌と題する際物の著作三冊の注文あり、即金の手附を遁さじと二三日の猶予を乞ひ堅く約して三鉄帰る。書肆去りてつらく、惟ふに杜撰疎漏の書と雖も数枚

の草稿争でか結局の完きを成さん、誰か助筆者を備はんと思案にくれ方、故人溪齋英泉の門人英寿独身食客お気楽者、かゝる大地震にも頓着なく偶然おのれが敗れ家に訪ひ来たりしを、是れ幸ひと雇ひ込み、纔か三昼夜にして安政見聞誌三冊の稿を脱す、潤筆の折半翌日五両足らずの潤筆料を得たり」(『私の見た明治文壇』昭和二年)と伝えてくれている。しかし、左文はこの引用文に続けて、燕栗園千寿(両国の書肆文会堂の主で狂歌師)の作という説を紹介しているが、左文は魯文の自記を尊重し魯文作としている。むろんこの手の出版物は当時御法度であり、同書も無届け出版であった。それゆえ作者名等は記されていない(ただし一部の挿絵には絵師の名が見える)。ちなみに魯文の名は、質屋の丁稚が雲の様子から地震を予知していたという逸話の、その質屋の主の友人として出てくるのみである。おそらくは、『安政見聞誌』は魯文一人の手になった著作と言うより、魯文がさまざまな情報提供者の文章、瓦版等の先行の刷り物をまとめ編集したものと考えるであろう。何れにせよ、短期間の内に情報をかき集め一冊の本に仕立てたその手際には、明治になり新聞記者として活躍する魯文の面目躍如たる姿が先取りされている、と言つてよい。

内容的には江戸の各地における震災後のルポルタージュである。町の罹災の状況に加え罹災者のエピソードが豊富に書かれている。また挿絵には本文と別途に解説が加えられている。さらに、被害者救済のお救い小屋に寄附をした人の名とその寄附の高、余震の回数とその揺れ具合の記録等「客観的」な記述や、当時多く出され、後絶版にされた一枚刷りの刷り物や小本の写しなどがあり、現在、資料的価値の高いものとなっている。またかなりの部数が売れたようで、商業的にも成功したようである。

地震の傷跡も癒えぬ安政三年(一八五六)八月二十五日、江戸は台風の被害に見舞われる。夜から翌朝まで、約六時間にわたり暴風雨に見舞われる。築地本願寺の本堂が潰れ、永代橋には舟が激突し流されてしまうと言った大災害となった。『安政風聞集』はその災害のルポルタージュである。『安政見聞誌』と同様に本書も無届け出版だったので、著者名は「金屯道人」として、魯文名は伏されている。ただし、金屯は当時の亭号鈍亭の鈍の字のへんとつくりを分けたものである。しかし、魯文は依然としてかけ出しであることに変わらぬ、金屯といつても魯文その人であることは、大方には分からなかったであろうとおもわれ、いわば知る人ぞ知るといった「楽屋落ち」に属する署名であったと思われる。しかしそれでもその署名があることは、魯文の役割が『安政見聞誌』に比しより中心的なものであったことを窺わせてくれる。刊行は、序文に

付された年号から推して、十月以降であったと考えられるが、『安政見聞誌』と比べると著述に時間をかけることができたものと思われ、所収文章に統一感があり、魯文の編集者としての統括があつたことを想像させられる。また、その挿絵は手間暇のかかつた、豪華なものになっている。内容的には、駿河を西限として東海道、そして江戸府内の各地域の災害状況を記述、またその各地での「逸話」が書き込まれている。江戸府内記述は他の地域より詳しいものとなっている。また、下は種切れのせい、か、台風とは関係のないものを含め逸話の占める割合が多くなっている。

安政年間には、多難な年であった。安政に先立つ嘉永七年(一八五三)にはペリーが来航し、幕府はそれ以後諸外国との応接にいとまがなくなる。安政五年(一八五八)のコレラ禍は、そういった外国との接触がもたらした「副産物」であった。その年の六月(太陽暦七月)に上海地方で流行していたコレラがアメリカ蒸気船ミシシッピ号によって持ち込まれる、各地で猛威を振るい、約一ヶ月後江戸でもコレラは猖獗を極める。死者は三万から四万人に及んだとされる(山本俊一『日本コレラ史』昭和五十七年)。「安政午秋頃流行記」は、その時のルポルタージュ。長崎での流行、その時オランダ海軍軍医ポンペの長崎奉行所宛の報告書、奉行所の触書など記實的な叙述には始まり、江戸での流行、死者の実数など、『安政見聞誌』や『安政風聞集』に比して記録面が多くなっている。しかし、病勢が過激なコレラになすところなくとまどう江戸士民のありよう、また、コレラにまつわる迷信、更に死者の蘇生などといった逸話もまた多い。

(中丸)

3-1 安政見聞誌

半紙本三冊。安政二年(一八五五)刊(推定)。鈍亭(仮名垣)魯文著、一勇齋国芳・一登齋芳綱・一筆庵英寿他画。国文学研究資料館蔵 Y 1422-8

安政二年十月に江戸を襲った安政大地震後のルポルタージュ。

(中丸)

3-2 安政風聞集

半紙本三冊。安政三年（一八五六）序。金屯道人（仮名垣魯文）著、画工不明。此君亭蔵。国文学研究資料館蔵 ヤ3-19

安政三年八月に江戸を襲った台風の被災後のルポルタージュ。

（中丸）

3-3 安政午秋 頃痢流行記

半紙本一冊。安政五年（一八五八）刊。金屯道人（仮名垣魯文）著。天寿堂蔵梓。国文学研究資料館蔵 ヤ7-78

安政五年七月に江戸を襲ったコレラ禍のルポルタージュ。

（中丸）

4 合巻

合巻は挿絵をふんだんに配した大衆小説、草双紙の最終形態であり、作者は文章を書くのみならず、挿絵の構図（下絵）も指示するのが一般的である。魯文の合巻処女作は『清談青砥刃味』（弘化四年刊）であった。この作品には魯文の改号前の戯号と本名が記されている。通説では魯文は天保十四年（一八四三）に花笠魯介（文京）に入門、和堂珍海と名乗り、弘化元年に英魯文と改めて草双紙『政談青砥碑』を著したとされるが、『清談青砥刃味』には文京が関わった形跡がなく、入門時期天保十四年よりもさらに下る可能性がある。

魯文の合巻の特色として、音曲や講談に基づく作品が多いこと、自らと交流のあった人々（戯作者仲間や芸人、パトロン）を挿絵の中に登場させていることがあげられる。『薄緑娘白波』は講談ものの作品の一つであり、『梅春霞引始』は清元「梅の春」に取材した作品である。『梅春霞引始』の挿絵を見ると、筋立てと無関係なところに文人や浮世絵師が顔を出し、魯文自身も積極的に関わった納札（千社札交換会）の中心人物、徳力屋の千社札なども描かれている。こうした形で知人・友人を登場させるこ

とで、作品を仲間うちで楽しんでいたのであろう。『全盛玉菊譚』には豪商細木香以が序を寄せている。香以が当時の戯作者や芸人のパトロンであったことは、森鷗外『細木香以』などにも記されるところである。ほかにも多くの合巻に、魯文を取り巻く人々の姿が描きこまれている。当時の戯作者たちをめぐる人間関係を知る資料としても格好のものである。

幕末には読本を抄録した長編合巻が多く出版された。魯文も『南総里見八犬伝』を抄録した『仮名読八犬伝』などに携わっている。前の作者から引き継いでの嗣作だが、原典がある分、作りやすいところもあつたであろう。明治期に入ると、『松飾徳若譚』のように徳川家の歴史に取材した作品をいちはやく著し、時勢に鋭敏なことをうかがわせる。『松の栄千代田の神徳』のように上演された歌舞伎を紙上に引き写した正本写合巻の作もある。この歌舞伎は新富座開業にあわせて上演されたもので、魯文はこの歌舞伎の作者二代目河竹新七とも交流があつた。

（佐藤）

4-1 清談青砥刃味

中本二冊。弘化四年（一八四七）刊。和堂珍海作、松治郎画（表紙・見返しは歌川国芳画）。版元不明。個人蔵

本作は仮名垣魯文の処女作であり、伝存のきわめて少ない稀覯書である。作者名は上冊見返しに「和堂珍海」、巻末に「兼吉」とあるが、これは魯文の改号前の戯号と本名である。内容は弘化三年七月二十七日から江戸市村座で上演された歌舞伎「青砥稿」の正本写（上演された歌舞伎を再現した草双紙）である。ただし天保改革の影響を受け、役者の似顔絵は使われず、舞台機構の描写も行われていない。

魯文の処女作については、天保十四年に花笠魯介（文京）に入門、和堂珍海と名乗り、弘化元年に英魯文と改めて草双紙『政談青砥碑』を著したという説が野崎左文『かな反古』（一八九五年刊）に記され、通説となってきた。本作の刊年・書名はこの説と異なっているが、作者名が一致することから、本作と『政談青砥碑』は同一書である可能性がある。野崎左文が本書を実見せずに『かな反古』を記したため、類似した書名を持つ別の作品と混同したものであろうか。また、本書には花笠文京

が関わった形跡が見いだせない。『かな反古』には天保十四年に入門とあるが、魯文が文京に入門した時期はさらに下る可能性がある。画工松治郎は歌川国芳とは別人で、未詳。版元名の記載もない。後ろ表紙見返しに東花堂（化粧品店）の広告があるが、作中に関連する記述はなく、東花堂によつて出版された確証は得られない。

（佐藤）

4-2 梅春霞うめのはるかすみのひきぞめ 引始

中本三編六冊。初編は文久二年（一八六二）刊、二編・三編は文久三年（一八六三）刊。仮名垣魯文作、歌川国周（初編）・歌川国孝（三編）・三代目歌川豊国（初編表紙）画。江戸 金松堂辻岡屋文助版。国文学研究資料館蔵 ナ466・ナ457

魯文は音曲に取材した合巻をいくつか著しており、本作はその一つ。初編3ウには魯文の肖像が描かれており、顔は魯文の印の一つ「菱文」になっている。同4オには清元「梅の春」の歌詞「四方にめぐる 扇巴やふぐるまの ゆるしのいろもきのふけふ こゝろばかりは春霞 ひくもはづかし爪じるし 雪の梅の門ほんのりと 匂ふ朝日は赤間なる…」が掲げられている。題名の下に「清元延寿太夫直伝 作者四方歌垣真顔述」とあるが、正しくは長府の大名毛利元義の作である。

毛利元義（天明五年生、天保十四年没）は四方歌垣（鹿都部真顔）に入門して狂歌を学び、四方真門の名で狂歌判者となった。「梅の春」はそのことを披露したもので、狂歌仲間の四方連の判者の一人となったが（「四方にめぐる 扇巴やふぐるまの ゆるしのいろもきのふけふ」）添削するのも恥ずかしい次第である（「ひくもはづかし爪じるし」という謙遜の意がこめられている）。

本作は隅田川周辺を舞台に、宝刀紛失をめぐる千葉家中の騒動と恋愛模様を綴った作品。登場人物の名前は「梅の春」の歌詞にちなむ（遠山霞之丞、扇巴屋の遊女文車、赤間硯藏など）。挿絵には魯文と交流のあった文人関根只誠や浮世絵師歌川芳虎など実在の人物が顔を見せているほか、当時流行していた納札（千社札交換会）の中心人物であった徳力屋の千社札「十九かつ」が描かれるなど、魯文の交友圏を知るうえでも興味深い作品である。

展示品は各編が合綴一冊に改装され、さらに初・二編が一冊に合綴されている。

（佐藤）

4-3 全盛玉菊ぜんせいたまぎくものがたり 譚

中本四編八冊。初編・二編は安政五年（一八五八）刊、三編は安政六年（一八五九）刊、四編は万延二年（一八六一）刊。鈍亭魯文作、歌川国綱画（表紙・口絵は三代目歌川豊国画）。江戸 文慶堂大国屋金治郎版。佐藤至子氏蔵。

江戸新吉原では、七月、中万字屋の遊女玉菊追善のために茶屋の軒先に灯籠を飾る「玉菊灯籠」の行事が行われた。その実像がはつきりしない玉菊をめぐるのは、多くの考証がなされ、様々な物語が作られた。本作もその一つで、玉菊を主人公にした合巻。演劇・小説でよく知られていた盗賊暁星五郎も登場する。

色彩鮮やかな摺付表紙、薄墨摺を施した口絵は『修紫田舎源氏』の挿絵で有名な三代目豊国によるもの。国綱の挿絵には役者似顔絵が用いられている。見返しは梅素玄魚や落合芳幾が筆を執り、多色摺が施されている。玄魚と芳幾は三題噺や興面合の会で魯文と交流があった人物。二編には魯文ら戯作者のパトロンであった細木香以が序を寄せ、「鈍亭の筆才玉菊の一話、意表に出て趣向凡ならず、聞捨になさん事の本意なく、為にすゝめて織心耕筆の苦辛せしむ」と書かれている。安政五年、魯文は三十歳。初期の作品であるが、なかなか力の入った作りである。

展示箇所は蝙蝠の化け物に星五郎が妖術を授けられる場面（初編）である。

（福井）

4-4 仮名読八犬伝かなよみはつげんでん

中本三十一編六十二冊。弘化五年（一八四八）〜明治元年（一八六八）刊。二代目為永春水（初編）十六編）・曲亭琴童（十七編）二十七編）・仮名垣魯文（二十八編）三十一編）抄録、歌川国芳（初編）二十七編）・一恵斎芳幾（二十八編）三十一編）画。江戸 文溪堂丁子屋平兵衛（初編）二十七編）・菊寿堂広岡屋幸助（二十八編）三十一編）版。国文学研究資料館蔵 ナ410

曲亭馬琴の読本『南総里見八犬伝』の抄録合巻。原典の要所を抜き出し文章を平易に改め、挿絵を増やしたもので、読本の挿絵に基づく挿絵もある。丁子屋平兵衛は『八犬伝』の版元でもある。本作は『八犬伝』のもう一つの抄録合巻『雪梅芳譚』

犬の草紙』（笠亭仙果作）が葛屋吉蔵から刊行されたことに対抗して企画・刊行されたもので、二作の競合は読本を読まない人々にも『八犬伝』の世界を浸透させる結果となった。嘉永五年には江戸市村座で歌舞伎「里見八犬伝」が上演されている。

二十八編（慶応元年五月以降刊）から広岡屋の刊行となり、この編から三十一編までが魯文による抄録である。三十一編は読本の第九輯第九十九回・第百回にあたる。魯文は安政二年（一八五五）・同三年（一八五六）に切附本『英名八犬士』全八編を著し、『八犬伝』を抄録した経験があった。『英名八犬士』の口絵・挿絵に本作の挿絵に準じたものが少なくないことは高木元氏によって指摘されている。

本作は安政五年（一八五八）に二十七編が刊行された後、版木の一部が焼失した。広岡屋は焼失部分を覆刻または補修し、二十八編の刊行に合わせて初編〜二十七編を再版している。展示品は再版本で、版木を継いで補修した跡が見て取れる。

（佐藤）

【参考出陳】 南総里見八犬伝（第九輯卷之二・第九十四回）

天保六年（一八三五）刊。曲亭馬琴作、二代目柳川重信画。江戸 丁字屋平兵衛ほか。国文学研究資料館蔵 ナ4705

4-5 薄緑娘 白波

中本八編十六冊。慶応四年（一八六八）〜明治四年（一八七一）刊。仮名垣魯文著、歌川芳幾（初編〜四編）・歌川芳虎（五編〜八編）画。江戸 青盛堂加賀屋吉兵衛版。国文学研究資料館蔵 ナ4705

幕末の合巻として典型的な体裁を備えた作品で、「鬼神のお松」の世界に、「柿木金助（禁輔）」などの盗賊や義賊が登場させた白浪物。「鬼神のお松」の物語は、文化文政期にちよんがれとして流布し、以降歌舞伎・合巻・読本等の俗文芸に取り入れられた。幕末には講師松林伯円によって口演されており、本作の執筆にもこの講談の人氣が意識されていたことが初編の自序から窺える。「鬼神のお松」もの眼目は、女盗賊お松が道中の武士を騙し、背に追わせて谷川を渡る途中で刺し殺す場面である。ちよんがれ『奥州笠松峠 女盗賊くどき』（鬼神のお松）の表紙と本作初編の挿絵を比べると、本作は一種のやつしを加えてこの場面を仕組んでいることが

わかる。なお、初編は序の年記から慶応四年刊としたが、改印は元治二年（一八六四）のものである。

（神林）

【参考出陳】（ちよんがれ） 奥州笠松峠 女盗賊くどき
禾口庵文庫蔵

4-6 松飾徳若譚

中本六編十二冊。初編〜四編は明治四年（一八七一）刊、五編は明治五年刊、六編は明治七年刊。仮名垣魯文作、錦朝楼芳虎画。初編・二編・五編は筆耕武田交来。東京 青盛堂加賀屋吉兵衛刊。国文学研究資料館蔵 ハ449・ハ4250

四編序に「余が当稗史を著述する起原は。年来花主の青盛主人。観音参詣の帰路足。弁天山の定席にて。南龍ぬしが軍談の。切を聴たる張扇。それが乗地の種本を。其俤生捕注文なりし」と講釈種であることをほのめかすが、厳密には『改正三河後風土記』巻四「有親君・親氏君諸国御経歴の事」から巻六「竹千代君人質の事」までの本文を参照。内容も、三河松平徳川氏祖、新田有親の代から、徳若丸（竹千代）こと徳川家康の幼き頃に及ぶ徳川累代記となっており、明治期に徳川氏の祖のことを詳細に描いたものとしてはかなり早い部類に属する。袋・見返しの凶案は、題名に相応しく、多く「松飾り」に関わる意匠から成る。

（山本）

4-7 松の栄千代田の神徳

中本三冊。明治十一年（一八七八）六月五日出版御届。仮名垣熊太郎録、久保田彦作序（明治十一年五月）、蜂須賀国明画。東京 錦栄堂大倉孫兵衛刊。国文学研究資料館蔵 ハ424

『仮名読新聞』広告によれば、売出しは明治十一年六月十五日。明治十一年六月十日から七月二十一日まで上演の芝居「松栄千代田神徳」は、二代目河竹新七（後の黙阿弥）が新富座開場式のために執筆した狂言だが、その正本写が本書。著者の

仮名垣熊太郎は魯文の息。この芝居は、三河後風土記の世界で、億川家泰を市川團十郎、秀吉を尾上菊五郎、光秀を市川左団次が演じた。口絵「新富座劇場開業式ノ図」では、六月七日に執行された新富座開業式の様子を描き、座元守田勘弥以下、洋服着用し、團十郎が祝文を朗読するところを描く。

(山本)

5 道中記

魯文が戯作者もしくは滑稽本作者としての名声を確立したのは万延元年(一八六〇)から翌年にかけて刊行された『滑稽富士詣』の成功による。その成功の地ならし役として最も大きな貢献をしたのは十返舎一九の膝栗毛物を模した一連の作品であった。安政二年(一八五五)刊の『栗毛弥次馬』は十返舎一九『東海道中膝栗毛』の抄録本であり、安政三年(一八五六)から翌年にかけて刊行された『成田道中膝栗毛』『おおよまどうちゆうひざくりげ』『大山道中膝栗毛』『甲州道中膝栗毛』『両国八景荏土久里毛』『日光道中膝栗毛』などは、一九の膝栗毛物で活躍した弥次北の子供たちを主人公とする趣向であった。同時期の魯文作『新板滑稽三太郎ばなし』が感和亭鬼武『旧観帖』の焼き直しであることも、十返舎一九に『旧観帖』発端としての『奥州道中記』執筆があることを考えれば、興味深い連鎖であろう。

明治期に入ると、孫の世代の弥次北が活躍する『西洋道中膝栗毛』(初編は明治三年(一八七〇)刊)が登場する。本屋側の「西洋流行へ付け込んで」「目先の変わった趣向」が欲しいとの要望に呼応して「弥次北八が飛脚船で航海の旅歩きを西洋道中膝栗毛とでもやらかして書いた」(第九編「稗史家の脚色」)ものである。魯文の執筆は明治五年(一八七二)刊の第十一編までで、その後を総生寛が書き継いで第十五編(明治九年刊)で完結ということになる。本当のところはよくわからないが、その引き継ぎの理由が「無益の戯作」をやめて「御国益にも相成るべき小冊を著述」(万笈閣「老実伏稟」)したためだというのは、一つの時代の終わりを告げたものといえよう。明治十六年(一八八三)に『滑稽富士詣』の改題後印本である『滑稽道中膝栗毛』が出版される。本文の異同はほとんどないが、自序を新たに書き下ろし、口絵・内題等

の一部を改刻して、『滑稽富士詣』の痕跡を消そうとしている。最後のあだ花といえなくもない。

(青木)

5-1 栗毛弥次馬

中本。元々は上下巻の二冊本だが、国文学研究資料館蔵のナ4731は合綴一冊本。国文学研究資料館蔵のナ4735は下巻のみ残存。鈍亭魯文作、一盛斎芳直画。

安政二年(一八五五)刊。巻末に「十返舎一九原稿」とあることからわかるように、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』を原作とする滑稽本。上巻は日本橋から掛川、下巻は袋井から京都までの抄録である。

(青木)

5-2 大山道中膝栗毛

中本一冊。安政四年(一八五七)春刊。鈍亭魯文作、一松斎芳宗画。新庄堂刊。国文学研究資料館蔵 ナ4736

大森、品川、川崎、神奈川、戸塚、藤沢を経て大山(相模国 現在の神奈川県)詣に赴く弥次郎兵衛と喜多八の話。冒頭の「ちうごしながら一寸口上」に「おやうだいにしてやれのめしおへそで おちやをわがかりも つひにあたまがやくわんとばけやきがまはつて 十万おくどめいどのたび」とある。本文二十三丁裏には「作者いまださんけいしたことがなく どんなことをかいてよいやらいつかう ふあんないゆる画工にまかせて ふんはほんのおまけ」との言もある。

(青木)

5-3 成田道中膝栗毛

中本一冊。安政三年(一八五六)夏刊。鈍亭魯文作、一松斎芳宗・一登斎芳綱画。新庄堂刊。国文学研究資料館蔵 ナ4734

板面屋弥二郎兵衛と喜多人を主人公とする「十返舎主人が尻馬に乗」(自序) った作品。安政三年には深川永代寺八幡宮社内で成田村新勝寺の出開帳があり、「ナントきた八や ことしはなりたのごかいてうがあるそうだから おむかひがてらになりたへでかけやう」という趣向である。

(青木)

5-4 滑稽富士詣

中本二十冊。万延元年(一八六〇)〜文久元年(一八六一)刊。仮名垣魯文戯作、一孟齋芳虎画。芙蓉堂刊。国文学研究資料館蔵 ナ4-749・ナ4-750

万延元年、庚申の年が「開闢より三十七度目。二千二百余年」の「御縁年に当るものから」四月より八月迄。女人の登山を許す(自序) ことをあてこんだもの。江戸から富士山へ行き、三島から箱根七湯、小田原から横浜經由で江戸に帰る道中記。膝栗毛物での弥次北八のような全編を一貫する存在はなく、群像劇のスタイルをとっている。なお、古典文庫の興津要氏解題に本作より「それ以前の鈍亭の号を仮名垣とあらためた」とある(『日本古典文学大辞典』の小池正胤氏も同様に述べる)が、実際には、前年の『傀儡太平記』で既に仮名垣魯文と称している。

(青木)

5-5 滑稽道中膝車

中本十冊。明治十六年(一八八三)二月十四日改題御届、明治十六年三月刊。仮名垣魯文作、一孟齋芳虎画。江島万笈閣椀屋喜兵衛刊。『滑稽富士詣』の改題後印本。各編上下二冊を一冊に合本している。定価一円二十五銭。国文学研究資料館蔵 ハ4-230

「初編自叙」以外は『滑稽富士詣』に付載されていたものに若干の手を加えたもの。初編の「富士山開闢起原概略」は最後の一丁分を「(以下略)」とし、「滑稽道中膝車三編叙」の「万延元庚申仲夏 梅素亭玄魚記」を「明治癸未初春 凹凸亭主人記」とする等の改変がある。「彼弥次喜多の膝栗毛。雪を導く菅仲の。老馬が旧きを新しく。製冊替たる膝車。迂闊な旅の因循風が。即ち遊山の表目と。開化に疎き流

行遅れ。昔日の操觚も見ぬ世の人を。友とするがの富士の雪。解く頃の笑談滑稽。お臍でお茶の目覚し種に。読ませ給はゞ幸甚々々」(初編自叙) とある。

(青木)

5-6 西洋道中膝栗毛(版本)

中本三十冊。魯文作は初編上〜十一編下の二十二冊。明治三年(一八七〇)〜明治九年(一八七六)刊、十一編は明治五年(一八七二)刊。各編に自序もしくは他序、凡例附言などがある。仮名垣魯文作、落合芳幾・歌川広重画。十二編以降は総生寛作、河鍋暁斎画。万笈閣刊。国文学研究資料館蔵 ハ4-1

「弥次北八の三世の孫等外国廻りの滑稽をもて此稗史の大意とす」(初編凡例) のもの。福沢諭吉『西洋旅案内』に依存する割合が高く、他に典拠として福沢諭吉『西洋衣食住』、内田正雄『輿地誌略』、渋沢栄一『航西日記』が指摘できる。「八編凡例附言」に「発行毎部千に下らず」とある。

(青木)

5-7 西洋道中膝栗毛版下草稿

19.3 × 27.2cm 十六枚。『西洋道中膝栗毛』の各場面を版本の口絵もしくは挿画を模した一葉と簡略化した本文により構成した一枚物の集成。朱筆で記された版本そのままといつてよい画をさらに修正しており、出版準備は進んでいたかのように思えるが、おそらくは未刊。十五、十六と十八から三十一が残存。国文学研究資料館蔵 ユ1-23

十五は第三編上、三十一は第五編上に該当する部分である。なお、立命館大学アート・リサーチセンターに三十五(第六編上に該当) から五十一(第七編下に該当) が所蔵されている。ただ、同センター所蔵分の画は朱筆で記された版本そのままといつてよいもののみで、国文学研究資料館蔵分に見られる修正はない。修正作業が何らかの理由でストップし、出版に到らなかったと考えるのが至当であろう。

(青木)

5-8 西洋道中膝栗毛(ボール表紙活版本)

17.6 × 12.7cm 一冊。滑稽本。明治二十二年（一八八九）九月七日印刷、明治二十二年九月十日再版発行。定価金一円。仮名垣魯文作、一松齋芳宗画。漫遊会（翻刻兼発行者は中川米作）刊。国文学研究資料館蔵 ヒ4777

各編にある序の類の大半を省略し、初編の河丈紀「西洋道中膝栗毛序」、三編の「西洋道中膝栗毛自序」、七編の「仮名違片言附 訛言雑字俗用集」などを残すのみだが、十五編までの本文をほぼそのまま収載する。『西洋道中膝栗毛』の高い人気を背景として、明治十七年（一八八四）以降、数多く出版されたボール表紙活版本の一つである。

（青木）

【参考出陳】 西洋旅案内^{せいようたびあんない}

半紙本一冊。慶応三年（一八六七）刊。福沢諭吉著。国文学研究資料館蔵 ヤ6211

三 開化の寵児

6 西洋人もの

開国後、大量に流入する西洋の情報は、幕末の人々の心を強くとらえることになる。それは必ずしも組織立った情報ばかりではなく、西洋の地理・政治・経済・科学・言語などの実学的な情報に、風俗や伝記の情報が加わり、それらが交ぜになった雑ばくなかたちで人々の好奇心に応えていた。

魯文はこのような「際物」としての西洋情報の有力な発信者の一人だった。幕末には開港地や西洋の風景・西洋人の風俗を描いた、いわゆる「横浜絵」が流行したが、そのような中、新興書肆山田屋は、まだ駆け出しの戯作者だった魯文と提携し、西洋人の略伝を画像と共に集めた『万国人物図絵』や、ワシントン伝『童絵解万国噺』を刊行する。『童絵解万国噺』の前半は伝記とは無関係な西洋各国の地理・歴史・風俗の概説であった。この記述がさらに山田屋の横浜絵シリーズ『万国名勝尽競』に「万国

噺の作者」という名乗りとともに載り、その後も魯文は多くの横浜絵にその名を見せている。

西洋人を題材とした戯作を仮に「西洋人もの」と呼ぶとすると、『童絵解万国噺』の「西洋人もの」としての要素はむしろ後半のワシントン伝にあるが、これはアメリカ独立時の歴代大統領たちが繰り広げる水滸伝まがいの伝奇小説であり、伝記的事実はほとんど顧みられることがなかった。これは娯楽の小説としての合巻というジャンルに沿ったものだといえ、『西国立志編』などの、伝記的事実に拠って立身出世の教訓とした明治啓蒙期の西洋人伝とは大きく異なっている。やがて、明治五年（一八七二）の「三条の教憲」以降、戯作者もまた実用と教訓をその著作の旨としなければならなくなつた時、魯文は、娯楽小説の作者としての立場と、啓蒙者としての立場を、その一身に体現せざるを得なくなる。明治五、六年に書かれた二つのナポレオン伝『倭国字西洋文庫』『通俗那波烈翁伝』のうち、前者は『釈迦八相倭文庫』的な伝奇小説であり、後者は翻訳文に読みやすく筆を加えるという間接的な関与ではあつたが、ナポレオンの少年時代のほぼ正確な伝記であつた。

魯文が最後に「西洋人もの」を手がけたのは、明治十二年（一八七九）の前アメリカ大統領グラント来日に当て込んで刊行された『格蘭氏伝倭文賞』であつた。これは魯文と関係の深い新富座でグラントが観劇したことにちなんだ、多分に宣伝的要素の強い「際物」であつた。しかし、内容はかつての荒唐無稽な小説ではなく、先行書と『歌舞伎新報』掲載の情報を用いて見所を継ぎ合わせた、まがりなりにも事実即した伝記であつた。すでに、合巻であつても、また西洋人という新奇な題材であつても、「西洋人もの」に荒唐無稽な伝奇的想像力の翼を伸ばすことは許されなくなつていたのである。

（木戸）

6-1 万国人物図絵^{ばんこくじんぶつずえ}

中本二編四冊。文久元年（一八一）刊。仮名垣魯文著、一猛齋芳虎画。江戸 錦橋 堂山田屋庄次郎版。国文学研究資料館蔵 ヤ7-76

各国の英雄の略伝を画像と共に紹介したもの。二編からは時節に合わせ、アヘン

戦争の英雄を多く採録している。

(木戸)

6-2 童絵解万国噺^{おさなえときばんこくばなし}

中本四編八冊。万延二年(一八六一)刊。仮名垣魯文著。江戸 錦橋堂山田屋庄次郎版。国文学研究資料館蔵 ナ4-687

米国初代大統領ワシントン^{ワシントン}を題材にした合巻。初編二編は欧米各国の紹介や伝記など「万国噺」の名にふさわしいものだが、後半の三編四編はワシントン・フランクリン・アダムスら米国独立の英雄たちの水滸伝ばりの出会いや、大蛇退治など伝奇性が濃厚になる。未完。本書はいわゆる「横浜絵」の流行に便乗したものとす。平田由美氏の指摘があり、また版元山田屋は「万国噺の作者」などと銘打った魯文の填詞を持つ横浜絵『万国名勝尽競』(芳虎画)を板行している。佐々木亨氏は、魯文が、山東京山・万亭応賀などの著作を手がけていた新興書肆山田屋と提携した作であり、切附本作者から合巻作者へとステップアップする最初の作と位置づけている。

(木戸)

6-3 倭国字西洋文庫^{やまとがなせいようぶんこ}

中本三編六冊。明治五年(一八七二)序。仮名垣魯文著、錦朝楼芳虎画。東京 紅木堂木屋宗次郎版。国文学研究資料館蔵 ハ4-233

貧しい漁師の子「なぼれをん」がコルシカ島で悪徳役人や鰐鮫を退治する物語。三編巻末の記述から、四編以降も継続する予定だったと見られるが未完。書名からもわかるように『釈迦八相倭文庫』の趣向を随所に用いて伝奇性が濃く、実際のナポレオンの伝記に拠っている部分はほとんどない。校正を河丈紀(岡丈紀)、版下書きを武田交来が担当している。

(木戸)

半紙本一巻一冊。明治六年(一八七三)序。長沼熊太郎訳、神奈垣(仮名垣)魯文和解。斎藤実堯蔵版。国文学研究資料館蔵 ハ4-281

啓蒙書として刊行されたと思われるナポレオン伝。ナポレオンの少年時代の事跡が中心。魯文が訳文に手を加えているものと思われる。未完。長沼は南部盛岡藩出身の大蔵省官員で、明治初期の三大英学塾の一つ、共慣義塾で教鞭をとる藩内屈指の英学者でもあった。明治六年刊『通俗和聖東伝』(為永春水和解)の訳者でもあり、その序で南部藩英学との関わりのもとで刊行された。ともに啓蒙書の文体形成に戯作者が動員された例として興味深い。長沼は後に官を辞し、自由民権運動に身を投じた。現在、宮内庁書陵部に本文訂正の紙を貼付した本、国会図書館に訂正後の本文をルビ無し活版にした本があり、当館のものを含めて三本しか確認されていない。当館の本は訂正前の本文であり、三本の中では最も早い。

(木戸)

6-5 格蘭氏伝倭文賞^{ぐらんどのしでんやまとぶんしょう}

中本三編九冊。明治十二年(一八七九)刊。仮名垣魯文著、鮮齋永濯画(初編・二編)・梅堂国政画(三編)。東京 金松堂辻岡屋文助版。国文学研究資料館蔵 ハ4-234

明治十二年七月の米国第十五代大統領グラント来日を当て込み、その伝記に來日までの旅、および来日後の歓待の様を交えた合巻。谷川恵一氏の指摘によると、内容は、明治十二年六月十日の奥付刊記を持つ『米国前大統領 グラント君の伝』(岸田吟香・山田享次編)に多く拠っており、挿画も同書のものを利用して描かれている箇所がある。また、三編の新富座舞台の様は、明治十二年七月十七日発行の『歌舞伎新報』第二五号の「グラント君饗応私会 新富座演劇脚色の聞書」をなぞっている。表紙や口絵に描かれている、米国旗をあしらった着物を着た芸者の物踊りは、グラントを招待した新富座観劇の大切りで行われた。

(木戸)

6-4 通俗那波烈翁伝^{つうぞくなばれおんでん}

6-6 「グラント氏接待夜会招待状」^{しせつたいやかいしようたいじしよう}

17.8 × 11.1cm 一枚。明治十二年（一八七九）七月。広岡幸助夫妻宛渋沢栄一・福地桜痴連名葉書。毎日新聞社新屋文庫蔵 371 (K-11)

グラント米国大使を歓迎した工部大学校での夜会の案内状で、日米両国の国旗が色刷りになっている。

〔翻刻〕

一筆啓上仕候然者本月八日虎門内工部大学校ニ於テ合衆国前大統領グランド君接待之為メ夜会相開候間同日午後九時ヨリ同校工御来会被下度此段申上候謹言

七月六日

東京接待委員総代 渋沢栄一 福地源一郎

広岡幸助様

同 御内室様

尚々当夜小礼服若ハ羽織袴御着用被下度且ツ諾否ノ御答ハ速ニ木挽町十丁目商法会議所ニ相設候接待委員局工御報道可被下候

(山本)

7 説教もの、滑稽本

魯文の、欧米事情を作品に取りこむ姿は幕末にはあつた。しかし明治維新を越えたところで、新時代の風俗と制度を即刻新作に反映させようと動いたのではない。明治元年（一八六八）に旧来の長編合巻を書き継ぎ、翌年秋には山々亭有人といっしょに山東京伝の机塚修理を名目に、大衆向けの大がかりなパフォーマンスを仕掛けるのに余念がなかった。

又明治二年九月、翁〔註・魯文〕ハ山々亭有人子と謀り、浅草寺境内人丸堂の傍らに埋もれありし故山東京伝の古机の碑を再興せんとて、両国橋万人楼上に書画の筵を開きしに、此会ハ収入意外に少くして、建碑の資を得るに至らざりしかバ、二年を経たる後ち其碑を掘起して周囲に柵を設け、僅かに素志を果すを得たりと

(野崎左文『かな反古』)

文字通り、江戸の遺棄物を掘り起こすところから魯文は近代の幕開けに立ち会った

のだが、やがて明治三年（一八七〇）に『西洋道中膝栗毛』初編を世に出し、際物的、趣向のリサイクルに巧みな戯作者の風貌を取り戻していった。いわゆる開化主義者としての姿が現れるのも、この直後のことで、『牛店雑談 安愚楽鍋』（明治四年（一八七一）初編刊）や『河童相伝 胡瓜遣』（明治五年（一八七二）刊）など欧化に沸く東京風俗を滑稽にパロディー化したもの、そして五年後半期以降には『首書絵入 世界都路』『三則教の捷径』で代表されるまじめな啓蒙書が出版した。自ら『世界都路』の序文で言うように、「文運の期と雖、窮民子に学ばせざるの親あり」といった時代状況を鋭く察知しながら、まずは福沢諭吉の驥尾に付す格好で、いわば教育市場に身を置く段階へと歩を進めていった。ゼロ年代の後半から『仮名読新聞』主筆をつとめ、小新聞ジャーナリズムの雄へと転身する素地も、この数年の間に用意されたものと言えるのであろう。

(キャンベル)

7-1 首書絵入 世界都路

半紙本七巻七冊。明治五年（一八七二）刊。仮名垣魯文著、惺々暁斎（河鍋暁斎）画、沢菱潭板下。東京 万笈閣江島喜兵衛版、回春楼蔵版。国文学研究資料館蔵 ヤ9-207

本書は本来、第三巻までが初編でそれ以下第七巻までを後編とするが、出陳本は全巻が出そろった段階で出版者・江島喜兵衛が一編を通した形で刷り直したものだ。見比べてすぐ分かるように、形も内容も明治二年に福沢諭吉が刊行させた『頭書大全 世界国尽』六巻を模倣したもので、福沢啓蒙書の華々しい売れ行きにあやかるうという目論見が見てとれる。タイトルの「都路」も、幕末に全国で流布した『都路往来』（別題『東海道往来』他）のそれを響かせ、本書を買って子供へ与えるという親や祖父母世代への目配りを怠っていない。展示箇所は、『安愚楽鍋』以来魯文が頻繁に依頼する河鍋暁斎の「地球上五人種」と題した口絵。日本を体現する遊女らしき女が、（日本人を含まない）世界五人種を向こうに回して、真っ赤な朝日を浴びながら彼らを威圧する。

内容は『世界国尽』に似て、世界地理をリズムミカルな文章に乗せて往来物に仕立てた本文と、上欄には各地の景色風俗を図解配置している。構成は、亜細亞洲（巻

一・二）・欧羅巴洲（卷三）・亞弗利加洲（卷四）・北亞墨利加洲（卷五）・南亞米利加洲（卷六）・澳地利亞洲（「あうすたらりあ」、卷七）からなる。

本書の魅力の一つは、第一巻の仮名垣魯文自序（明治五年六月執筆）の中で、作者自らが「文明開化」への歩みをつぶさに書き記したところにある。幕末少年時代の生活苦と学問への憧れ、通俗小説との出会い、そして維新後には啓蒙への傾斜。また文末に、本書のモデルが『世界国尽』で、その著者福沢先生を名指して誉め称えてはいるが、これとて幕末以来、しきりに版權侵犯と戦ってきた熱血出版者・福沢諭吉に対する一種の自衛策と言えよう。魯文は明治三年刊『娼妓評判記』初編のなかで、すでに「福棹魯吉」をして『国尽』の名文をからかわせていたが、後述するように、この年教導職の導入と相まつて、彼の筆法は大まじめである。長文だが、開化戯作者・仮名垣魯文を考えるうえで重要な証言なので、自序を抜粋して掲げることしよう（左訓は略す）。

僕薄命にして卑賤の蝸廬に産れ。年齒九歳初めて市街の筆堂に登り。其楷模を習ふこと纒に半年。漸くにして仮名四十七字及び。自国都路の紀行。一章を学べり。猶従事せまく欲するに。家極めて貧く。殊更同胞一妹二弟あり。父母子俱に六口。家父が一臂の薄業を以て。数口を糊するの窮困堪難きが故に。僕を商家の奴隷に仕さしむ。于時十歳奉仕の寸間。先師の書本を得て習ふと雖性来拙く。能書の域に至る事幾遠し。或人謂く。書ハ姓名を記すに足れり。不如文を学ぶに。僕此言を可として経籍を学ばんと欲するに。自由を得ず。然れども素懐止を得ず。新古の小説通俗の稗史。虚実諷諭を論ぜず。目に触る者悉く誦読するや。毎編夜を以て日に継ぐものから。至然勸懲の一端を知り略黑白を分別に至れり。然れどもこの間。架空の冊子に光陰を費し。正史に知識を弘むる能はず。星霜十年。奉仕の期限稍く満て。家に帰るを得と雖此期老父病床に臥して活計の道を断ち。復学ばんと為るに。財に乏しく閑を得ず。母ハ前に故有りて家に在らず。幾程もなく老父没せしより。愚妹を他に嫁し。二弟を他に奉仕令めて。其家を去り。親属に同居して。生産を営まんと欲するに。稗史の身心に膠固し。商法の思慮疎く。碌々として空乏たるより。遠く僻境に伶ひ。櫛風沐雨困難を極め。賤業羞恥を尽し。辛うじて東都に復り。知己の扶助を得。且其紹介に依り。書買某の需に応じ。偶然児戯の冊史を著するに。僥倖にして時好に協ひ。輒射の一滴飢雀の一粒の及ぼすなり。而して虚名都下に流布

し。將に初老の期に至れり。豈本来の面目ならんや。窮迫止を得ざればなり。方今進歩の秋に當り。文運の期と雖。窮民に学ばせざるの親あり。貧児の瞽者に類せる。閔然忍ぶ可からず。福沢先生茲に感ありて。前に世界国尽六巻を著されしより。纒に仮字を知る而已の兒童輩をして。概略地球上の景状を解説せしめ。大声里耳を穿つの功業。將に闇夜の一点と称すべし。就中僕が此編を作すや。原来諸訳書の糟粕にして。得意の俗文各地の名勝旧跡を修飾し。粗其国勢風俗を記載せる。敢て彼書に比較せんとの意に非ず。月ハ平原を照らすに宜しく。灯火ハ岐路を行に。便りならんが如きを欲すべなり。抑訳書に二体あり。一を甲とし一を乙とす。其訳文。漢字と片仮字を用ひ。傍訓に漢語と洋語を専ら兼用する者ハ甲人勤学の一助たる枢要の具にして。現今翻訳の体裁なり。其訳文。専ら俗字と国字を用ひ。傍訓に洋語俗語を以てする者ハ。「割註・西洋旅案内世界国尽ノ類」通俗訓蒙の老婆心に出て。則ち乙なり。其読者をして難易の別あるも。其益に於けるや。都て甲乙有べからず。

（キャンベル）

【参考出陳】頭書大全 世界国尽

半紙本五巻付録一卷六冊。明治二年（一八六九）刊。福沢諭吉著。東京 慶応義塾蔵版、岡田屋嘉七売弘。奥付に「禁偽版」とあり。国文学研究資料館蔵 ヤ6-210

7-2 河童相伝 胡瓜遣（初編）

中本二巻二冊。明治五年（一八七二）正月自序刊。仮名垣魯文著、惺々暁斎（河鍋暁斎）画。東京 万笈閣（椀屋江島喜兵衛）版。国文学研究資料館蔵 ハ4-22

本書も福沢諭吉のベストセラー『訓蒙 窮理図解』に当て込んだものではあるが、啓蒙ではなく、開化東京の風俗を軽快に風刺したパロディーである。第一章「運氣のこと」「窮理図解」では「温氣の事」、第二章「食氣の事」「窮理図解」では「空氣の事」などなど、福沢の教えを一々当世風俗に引きつけては反転させ、茶化している。ちなみに本来の「窮理」について、魯文はこのころの作品で触れていて、たとえば「肉食をすりやア、神仏ハ手が合わされねへの、ヤレ穢れるのと、わからねへ野暮をいふのは、窮理学を弁へねへからのことではス」というように、実用的な

欧風学問として理解したことを示していた『安愚楽鍋』初編「西洋好の聴取」)。展示箇所は「開運の身上話」の一場面、維新まで日本橋で天秤棒を担いでいた日雇い労務者が、土木ラッシュと金貸しで身代を築き、立派に身を立てるという話である。前年に初編が出た『安愚楽鍋』とは、いわば姉妹編として、維新直後の「金メッキ時代」を可笑しくそして暖かに諷刺している。

(キャンベル)

【参考出陳】 訓蒙 窮理図解

中本三卷三冊。明治元年版の明治九年(一八七六)後印(二月二日版權免許)。福沢諭吉著、画工不記。出版人福沢諭吉、慶應義塾蔵版。国文学研究資料館蔵 ヤ9-225

7-3 牛店雑談 安愚楽鍋

中本三編五卷五冊。仮名垣魯文著、一蕙斎芳幾(初・二編)・猩々暁斎(河鍋暁斎)(三編)画。初編(一卷)は明治四年(一八七一)四月自序刊、版元の明記がなく裏見返しに明治二年刊の他書から椀屋喜兵衛ほか八肆の発行書林一覽を流用。二編(上下二巻)は刊年不明記、東京 誠之堂(近江屋岩次郎)蔵版、口絵多色刷り。三編(上下二巻)は明治五年刊、誠之堂蔵版。取り合わせ本。国文学研究資料館蔵 ハ4-249

明治三年に刊行開始した長編『万国航海 西洋道中膝栗毛』(仮名垣魯文・総生寛作)を受け継ぐ形で、東京の開化風俗を人間の類型(「西洋好き」「墮落個」「鄙武士」等)を中心に描いた戯作である。式亭三馬の『浮世風呂』(初編文化六年(一八〇九))『浮世床』(初編文化九年)などを先行作として、当世風俗を定観測し、開化社会の軽薄さと凶太さとを存分に描き分けている。人物は日の出屋という流行の牛鍋屋に入れ替わり立ち替わり現れては、鍋をつつき、酒杯を傾け、生きる不安と自負をとりどりの口調で語り尽す。展示箇所は、初編口絵・日の出店頭、二編下「覆古の方今話」挿絵、三編上「藪医生の不養生」挿絵。

(キャンベル)

7-4 三則 教の捷徑

中本一巻一冊。明治六年(一八七三)刊。仮名垣魯文著、石亭画。中西源八蔵版。国

文学研究資料館蔵 ヤ5-220

明治五年三月、明治政府は教部省という新しい省庁を設け、国民教化運動をこれに担当させた。活動の中心は全国の神官・僧侶が中心で、「教導職」に任命された彼らは各地を巡って民衆を集め、国民教化の基本方針となる三条教憲(三条の教則)について分かりやすく説教する、というものである。三条とは、

- 第一条 敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事、
- 第二条 天理人道ヲ明ニスヘキ事、
- 第三条 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事

である。その後、西南戦争までをピークとして、文明開化に資すべき「説教」は新風俗となり大いに流行して、当時の出版メディアを賑わせるものとなった。早いところで魯文自身、『安愚楽鍋』三編下「新聞好の生鍋」の中では「…此節都鄙遠近となく説教がおひらきになつて、諸社諸宗の教導師が勉励するが、僕が此職を命ぜられりやア静岡の中村先生(中村正直のこと)が訳した自由の理を訳解てきかして、世の蒙昧を醒さしたい者だテマジ一盃…」というように、説教のことを題材化してみせている。ところが明治五年七月、よく知られるように魯文と條野有人(山々亭有人)が戯作者を代表して、教部省に対して「著作道書キ上げ」なる文書を答申し、今後自らの作風を「教則三条ノ御趣旨ニモトツキ著作可仕卜商議仕候」ことを吐露した。先に見た『世界都路』自序をしたためる翌月のことで、これ以降、魯文は出版物において教化を前面に出し、自ら神奈川県庁に雇われ、県内の学校を巡回して演説もした。

本書は耳で聴く説教ではなくして、「読む(または読み聞かせる)説教」として構想されている。本文は三条それぞれに一章を当て、幕末の心学道歌集のように七五調の句を上下に分けて配し、「説教」を畳みかけていく。序文では、商売に野良仕事に忙しく説教場など行く暇がない読者に、次のように呼びかけている。「…活業の繁く間なく説教場に臨むを得ざる徒ありと伝へ聞かからに、余(註・魯文のこと)幸ひに聴聞数度にして耳に止めたる三つの則を、我も人も能く口馴たる俗言もてかき列ね、教の捷徑と号け斯桜木に彫めてその道の枝折とハなせり」。このような言及は、後続の説教ダネ教訓書にもよく見かけるもので、たとえば「…説教を聴聞する暇なきものといへども、一度この書を披くときハ方今の御趣意、三大教の深意をも覚り

得て、忽ち文明の境に至るべきなり」(明治七年刊『開化自慢』初編下巻・巻末広告) といったスタイルである。説教が本来もつオラリテイーと場面性を、絵入版本が代替・補完するという触れ込みで製作されている。展示箇所は、神官の装束を身にまとった男の、「三則の旨を神社宝前に於て説教のところ」。

(キャンベル)

【参考出陳】 童蒙心得草(前集)

中本乾坤二冊。明治六年刊。瓜生政和著。展示箇所は、「説教心得艸」と書いた高札を見上げる男女と子供を描いた口絵。個人蔵

【参考出陳】 説教新誌

半紙本上下二冊。明治六年序。瓜生政和著。展示箇所は、国民として統合されない民衆の姿を、噛み合わない「手足の議論」に見立てた挿絵。個人蔵

【参考出陳】 文明開化(初編下巻)

半紙本一冊。明治六年刊。加藤祐一著。展示箇所は、神社に「敬神愛国」と書いた巨大な額を奉納する一行と、その前景に説教場へと急ぐ当世良家風の人々を描いた挿絵。個人蔵

【参考出陳】 童蒙 教則往来

22.8×15.8cm 一冊。鈴木五湖著。三条教憲の趣旨を往来モノに仕立てて解説したもの。個人蔵

7-5 大洋新話 蛸之入道魚説教(初編)

中本一巻一冊。明治五年(一八七二)序刊。仮名垣魯文著、暁斎(河鍋暁斎)画。存誠閣版、桃源斎蔵版・東京 蓑田精三郎売弘(奥付)。国文学研究資料館蔵 ハナハ

「魚説教」という題名の通り、本書は舞台を竜宮城に設け、魚たちが文明開化に進もうと水面下の改革にいそしむ寓意の物語に仕上がっている。ストーリーは戯作そのまま、平仮名交じりの文体は『安愚楽鍋』以下と打ってかわって、漢字を多

用し生硬なものになっている。口絵裏に明治五年六月発兌とあるから、先述「著作道書キ上げ」の提出の前月に刊行されたことが分かる。三条教憲の普及にとめるという際物作品の一種で、奥付に「二篇・三篇近刻」と予告するも、刊行された形跡はない。展示箇所は、翌年『三則教の捷徑』の口絵と同じ構図で、蛸が老若魚臣を集めては説教をしている。

(キャンベル)

四 報道する戯作者

8 報道もの、新聞雑誌

つねに時代の中で思考し、時代を写す小説家が、一面ですぐれたジャーナリストであることを、仮名垣魯文の生涯は教えてくれるだろう。幕末の自然災害や社会象にいち早く反応して、『安政見聞誌』『安政風聞集』『安政頃痢流行記』などの時事的出版を企てた魯文が、現在の出来事を表象するマスメディアが公認の媒体となった明治という時代に、当時の唯一のマスメディアであった新聞にその後半生を捧げたのは、必然的な道筋であったといえる。

明治五年、教部省へ提出した書面(著作道書き上げ)に署名した魯文は、それまでの「虚ヲ主トシ実ヲ客ト」する戯作の「作風ヲ一変」することを宣言した。それは、虚構としての小説から、事実に基づいた物語である実録へ、自らの執筆活動をシフトしたということであった。明治近代という時代を迎えた小説家たちは、虚構に遊ぶ戯作者から、報道する戯作者へという変化を体験したのである。唯一、万亭応賀を例外として。

そうした小説家たちにとって、新聞は恰好の活動拠点となった。なぜなら、雑報(社会面)では、市井の出来事をまとまりのある一つの話として提供していたからである。山々亭有人が『東京日日新聞』創刊に参加し、二世為永春水(染崎延房)が『東京絵入新聞』に入り、高島藍泉のように新聞から新たな作家も誕生したのである。そんな中で、『横浜毎日新聞』に入社した魯文は、自らの資質に適合した職場を見出したこと

になる。

魯文は、在社中に起こった大きな事件である「佐賀の乱」を、記者として入手した材料を編集して『佐賀電信録』を出版する。それはちやうど、松村春輔『復古夢物語』（明治六〇九年）、条野伝平（染崎延房）『近世紀聞』（明治七〇十五年）、村井静馬『明治太平記』（明治八〇十一年）など、幕末維新期の歴史実録が出版され始めた時期であり、魯文は現在の出来事を歴史の一場面として物語化しようとしたのである。そうした実録の方法は、明治九年の「神風連の乱」など一連の士族の反乱から翌年の西南戦争に際して流行現象となり、魯文も『西南鎮静録』を著すことになった。

一方で、日本初の風刺絵雑誌『繪新聞 日本地』を創刊していた。そうした先駆性は、仮名読新聞在社中に、自らの名前を冠した文学雑誌といえる『魯文珍報』を刊行し、『いろは新聞』や『今日新聞』でも新機軸を打ち出して、つねにジャーナリズムの先頭を歩み続けた姿にも見出せるだろう。まさに「際物」作家として、つねに現在の関心を失わずに活動した作家、それが魯文なのであった。

（山田）

8-1 佐賀電信録

半紙本上下二冊。神奈垣魯文編輯。明治七年（一八七四）刊。東京 名山閣版。国文学研究資料館蔵 フ160

明治七年二月、江藤新平らが起こした士族の反乱「佐賀の乱」のルポルタージュ。

『横浜毎日新聞』記者であった魯文が、臨時公開や電報、投書などの新聞記事の材料に、各種新聞を参照して事件の始終を編集したことが「小引」からわかる。なお、新聞は破損し易いために書籍に残したとし、記載の事項は「確証」があり、「公然歴史の一尾に附すとも虚飾作文の軍書に比すれば実に実録と唱するも更に又世界に恥ざる可し」としている。

（山田）

8-2 西南鎮静録

半紙本正統上下四冊。仮名垣魯文編輯、大蘇芳年（月岡芳年）画。明治十年（一八七

七）刊。東京 名山閣（牧野吉兵衛）版。横浜市中央図書館蔵 KY090

明治九年十月、熊本で起こった士族の反乱「神風連の乱」、および福岡の「秋月の乱」、前原一誠らによる山口の「萩の乱」のルポルタージュ。『佐賀電信録』を著した魯文が、「這回西南変動の挙に当つて諸府県下に異名同件の書冊陸續刊行発兌せる者に属したるは後雁の前雁に凌がるゝ悔あらん」（正編附言）と、『熊本伝報録』『西国戦争日誌』などに対抗した「際物」出版。続編附言では「目今戦争の確報」（西南戦争）についての「第三編」を予告しているが、刊行は確認できない。

（山田）

8-3 魯文珍報

17.3 × 10.5cm。明治十年（一八七七）十一月二十八日創刊。仮名読新聞社内の開珍社発行。ほぼ月二回発行。社主・仮名垣魯文。編輯人・仮名垣熊太郎。戯作雑誌。明治十二年二月廃刊、全三十四号。国文学研究資料館蔵 ロ28

魯文は、「土耳其通史」全十三回、「東京顕微鏡」全六回、「技芸名譽小伝」全十二回（河竹新七、山東京伝、港崎歌粹、鶴屋南北、佐瀬得所、曲亭馬琴）などを連載する。なお、八、九号は「百猫画譜」前後編、一、二号は「珍猫百覧会」を特集する。小説の連載は為永春江（初編五回分は為永喜蝶女稿、為永春江補綴）「春窓娘学校」全二十六回の連載がある。

（山田）

8-4 歌舞伎新報

22.5 × 15.0cm 半紙本サイズ。明治十二年（一八七九）二月三日創刊。歌舞伎新報社発行。創刊時は月三〜五回発行。東京歌舞伎各座の筋書き、脚本、随筆などを掲載。明治三十年三月廃刊、通巻一六六九号。国文学研究資料館蔵 カ536

魯文は、明治十三年一月の五二号から明治十六年四月の三〇一号まで補助に署名し、その間「仮文記珍報」欄に「劇場客物語」全五十二回、八代目団十郎伝「荒磯割烹鯉魚腸」全十四回、細木香以伝「再来紀文廓花街」全十七回、「鸚鵡石腹稿脚色」

全十一回、「新橋芸者歌舞伎」全二十八回などを連載。その後も「新編客者評判記」全十八回などを連載したが、明治二十五年には離れる。

(山田)

8-5 花たらし

16.8 × 12.0cm 中本サイズ。明治二十三年（一八九〇）二月創刊。艶文社発行。月二回発行。廃刊年月未詳。都々逸、俳句の投稿雑誌。主筆は霧垣夢文、魯文は補助に名を連ねる。国文学研究資料館蔵 ハ121

魯文は、二号から九号まで小説「笹の雪」（全七回、大尾の二回分は夢文筆か）を連載、情哇の撰者を担当する。三号（二十三年三月）には、名納会の告知を掲載、その後は仮名垣鈍阿彌、鈍阿彌魯文、鈍阿彌魯叟と号す。

(山田)

8-6 横浜毎日新聞

47.7 × 31.5cm。明治二年（一八七〇）十二月八日創刊。横浜毎日新聞会社発行の日本初の日刊新聞。明治十二年十一月、沼間守一に買収されて東京に移転、「東京横浜毎日新聞」と改題され、嚶鳴社の機関紙となる。十九年「毎日新聞」と改題、三十九年「東京毎日新聞」となり、昭和十五年廃刊。国文学研究資料館蔵 E52

明治六年に横浜弁天町に移転した魯文は、神奈川県雇いとなる一方で、横浜毎日新聞の文章方として入社、十月二十七日の奥付には編集者として「神奈垣魯文」と署名している。翌年六月には、日本初の風刺絵雑誌『絵新聞 日本地』を創刊し、八年七月二日から十二月二日まで「茶説」を八十五回連載する。『仮名読新聞』の創刊はその間の出来事だった。

(山田)

8-7 仮名読新聞

22.6 × 35.5cm。明治八（一八七五）年十一月一日創刊。横浜新聞会社発行。編輯兼印刷人・神奈垣魯文。創刊時は隔日刊。「読売と平仮名の両新聞の中間を行」く傍訓新聞。

明治十年三月東京京橋弥左衛門町に移転、翌年新橋出雲町に移り、十二年十一月魯文退社後、翌年十月二十九日廃刊。国文学研究資料館蔵 カ514

20

横浜毎日新聞在社中の魯文が編集を担当して創刊、俗談平話（口語体）、振り仮名付きで俗訓を多用し、「猫々奇聞」欄に芸娼妓の記事を掲載した。明治九年、野毛山に新聞縦覧所「窟蟻亭」を開設、八月には縦型紙面四頁建で日刊となり、「仮名垣魯文」に戻る。翌年東京に移転して、三月「かなよみ」と改題、十一年さらに新橋出雲町に移転したのにもない、魯文は新富町に仏骨庵を新築したが、十三年一月には退社する。

(山田)

8-8 いろは新聞

31.6 × 23.5cm。明治十二年（一八七九）十二月四日創刊。京文社発行。「安都満新聞」を改題した傍訓新聞。仮名垣熊太郎が編輯長に就任、魯文も入社して、翌年一月に社長となる。明治十七年十一月「勉強新聞」と改題する。

魯文は『かなよみ』の編集方針を踏襲して、「猫洒落誌」欄に芸娼妓の記事を掲載、読み物としての紙面の充実をはかった。明治十三年九月には「いろはポンチ」欄を新設して、小林清親が描く風刺画とともに戯文を掲載した。十月日本橋米沢町から京橋竹川町に移転、十五年十月魯文は社長を退いて長老となり、徐々に影響力を失い、十七年に退社。

(山田)

8-9 今日新聞

39.3 × 28.2cm。明治十七年（一八八四）九月二十五日創刊。毎夕社発行。「当日の新聞を当日に刊する」趣旨で夕刊紙として創刊された。十九年一月斎藤緑雨が「江東みどり」の筆名で続き物を連載、二十年二月朝刊紙となったがふるわず、翌年身売りして、十一月「みやこ新聞」となり、二十二年二月「都新聞」と改題され、黒岩涙香が主筆に迎えられた。

郵便報知新聞を退社した小西義敬を助け、魯文は主筆として諧謔と風刺の筆をふるった。三号から新設された「日本地」欄には風刺的な画文を掲載、十一月以降は「今々痴記」一名老狐通」欄の戯文などを執筆した。しかし、十九年五月には退社し、東京絵入新聞に入社する。小西も翌年には毎夕社を手放して、朝刊紙となる。

(山田)

9 高橋お伝

明治五年に戯作から足を洗い、ジャーナリストとして地位を築いてきた仮名垣魯文は、自前の新聞社を持つまでに至った。西南戦争の報道熱も終息に向かった明治十年十二月十日、『仮名読新聞』に「鳥追阿松の伝」の連載を開始し、ここに毒婦もの先鞭をつける一作が誕生した。連載は翌十一年一月十一日で中断され、単行本化によって完結をみた。西南戦争ものの刊行で息を吹き返しつつあった出版界にあつて、『鳥追阿松海上新話』（錦栄版）と題されたこの単行本は読者間の争奪戦を繰り広げるほどの大ヒットを記録した。草双紙の体裁と、各編上中下三冊にして各冊九丁という分量は以降の毒婦ものでも踏襲されることとなった。その翌年に魯文は久し振りに自作と銘打った戯作を送り出す。これが毒婦ものの記念碑的な一作となった『高橋阿伝夜又譚』（金松堂版）である。『鳥追阿松』は魯文が関という役割で、弟子筋の久保田彦作が著者として表紙に記載され、以降の草双紙でも魯文は関として名を見せるものが殆どである。

お伝は明治九年八月に殺人と強盗を働き間もなく捕縛された。魯文も既に同年九月十二日『仮名読新聞』において事件を報じていた。お伝は収監中供述を二転三転させ、係官を手こずらせた挙げ句、十二年一月末斬罪に処されたという。この複数の供述が、相異なるお伝の物語を増殖させることとなった。処刑の翌日より魯文は『仮名読』紙上にお伝の連載を開始するが、僅か二回で中絶し単行本に回してしまふ。初編のみ本文活版で、二編以降は木版印刷のスピードの限界に挑むかの如く、二ヶ月間で八編を重ねた。

この異常なまでの速度はライバル作の存在による。岡本起泉作『其名も高橋毒婦の

小伝東京奇聞』（鳥鮮堂版）は『東京新聞』に連載された「お伝の咄」を単行本化したものである。しかし場合によっては単行本の方が連載に先行する。また連載と単行本では本文の違いも多々確認できる。もう一人のお伝がいるかの如く『夜又譚』とは全く異なるストーリーを持つ。両作の競作の激烈さは夥しい後印によっても知れ、お伝の名を不朽のものとし、草双紙の底力を証明した。以降昭和期に至るまでお伝は様々な活字本によって繰り返し登場する。大正末刊行の明治文学名著全集『高橋阿伝夜又譚』にはお伝の肖像が掲げられ、また野崎左文の解説にもその容貌が伝えられている。魯文や起泉が創作したお伝によって文化的なブームを招来することとなり、例えば演劇界では河竹黙阿弥作「綴合於伝仮名書」が十二年五月に上演され、これ等に因んだ錦絵も夥しく送り出されている。歌謡としては『高橋おでんくどき』が刊行され『夜又譚』初編の摺付表紙を踏襲した表紙を備える。菊池三溪の『本朝虞初新誌』には「臙脂虎伝一名毒婦高橋男伝実録」なる一章があり、漢文小説にも及んでいる。

(佐々木)

9-1 鳥追阿松海上新話

中本三編九冊。仮名垣魯文関、久保田彦著作、歌川周延画。明治十一年（一八七八）刊。東京 錦栄堂大倉孫兵衛板。初出『かなよみ』第五四〇号（明治十年十二月十日）第五六二号（明治十一年一月十一日）。国文学研究資料館蔵 ハ4-18

美貌の鳥追いお松の罪の遍歴とその破滅までを綴った実録で、いわゆる「毒婦もの」の嚆矢とされる作品。当初は『かなよみ』の連載記事であったが、冗長になってきたせいか中断するところを、錦栄堂のもとめによって草双紙として、改めて刊行され大ヒットを記録した。

一編を上中下巻の三冊でまとめ、本文表記をルビ付漢字沢山にする体裁は、西南戦争に取材した草双紙の体裁を踏襲し、以後の「毒婦もの」にも受け継がれていく。版元の錦栄堂は、このうち正本写しの出版に力をいれ、お伝ブームに際しては『綴合於伝仮名書』を出している。

(小林)

9-2 其名も高橋毒婦のお伝 東京奇聞

中本七編二十一冊。芳川俊雄閱、岡本勘造著、桜齋房種画。明治十二年（一八七九）刊。東京 島鮮堂板。国文学研究資料館蔵 4-20

魯文の『高橋阿伝夜又譚』と競合した作品。新興版元である島鮮堂が新進作者の岡本勘造（起泉）と組んだこの企画にたいして、先輩格の金松堂と魯文が対抗意識を燃やして『夜又譚』は出版された。姉の仇討ちというお伝の嘘の供述を利用して、『夜又譚』よりも伝奇的なストーリーとなっている。

（小林）

9-3 高橋阿伝夜又譚

中本八編二十四冊。仮名垣魯文著、守川周重画（ただし一部表紙・口絵は梅堂国政画）。明治十二年（一八七九）刊。東京 金松堂辻岡文助板。国文学研究資料館蔵 4-137・4-163

当初は『かなよみ』紙上で連載が開始されたが、『東京奇聞』刊行に対抗して、草双紙としての出版に切り替えられた。新聞記事よりも文章は粉飾されているが、お伝の母親の来歴から説きおこす仕組みは、そのまま継承されている。魯文にとっては、明治になって初めての草双紙作品。初編のみ本文活版、二編以降は整版。

（小林）

9-4 高橋阿伝夜又譚（日吉堂版）

中本二卷二冊。仮名垣魯文著、探景画。伊東専三編輯、秋山清吉原板。明治十九年（一八八六）刊。東京 日吉堂菅谷与吉翻刻板。国文学研究資料館蔵 4-1167

明治十年代後半から二十年代初めにかけて多数刊行された翻刻本のひとつ。本文をすべて活字に改め、表紙絵、口絵、挿絵を独自に変更している。

（小林）

9-5 綴合於伝仮名書

中本一卷三冊。武田交来綴、梅堂国政画。明治十二年（一八七九）刊。東京 錦栄堂大倉孫兵衛板。国文学研究資料館蔵 4-66

同年五月二十九日から七月六日まで新富座で上演された同名芝居の正本写し。原作脚本は河竹黙阿弥。主な出演は尾上菊五郎（玉橋お伝、まだらの虎）、市川左団次（佐藤七蔵、田川吉太郎）、市川小団次（玉橋民之助）。表紙は、新富座の大切り「達競恋鞘当」を演じるはずだった市川団十郎（右）、尾上菊五郎（中）、岩井半四郎（左）によっている。

（小林）

9-6 「高橋於伝肖像」

石版画。明治十二年（一八七九）制作か。小林清親画。『明治文学名著全集第五篇 高橋阿伝夜又譚』（大正十五年（一九二六）刊、野崎左文・本間久雄校訂、東京堂国文学研究資料館蔵 4-1141）の口絵写真。

お伝の情夫小川市太郎が野崎左文に語ったところによると、「現今市中で売って居るお伝の写真は実物でなく、当人はもつと肉付豊かな美人だ」（本書一九一頁）という。

（小林）

9-7 東京各社選抜新聞「高橋阿伝」

錦絵大判一枚。明治十二年（一八七九）五月十日御届。三島焦窓画、彫栄。山本平吉版。毎日新聞社新屋文庫蔵 204 (F-37)

石井研堂『明治事物起源』に、「他の新聞紙中の好きたねだけを集めて、何々新聞と名付け、月に一、二回づつ出版せしもの数種あり。『新聞要録』五冊、『新聞摘要』二冊を始めとし、明治八年前後、他の新聞紙の三面だねを錦絵とし、一枚ものとして売り出せしものも、大小十種にあまる。」とあって、これはそうした「錦絵」のひとつ。もとより新聞でも、またその附録でもない。「各社選抜」と題するものの、記事の出所は不明である。

出版御届の日付は、新富座で「綴合於伝仮名書」が上演されている時期にあたる。

『歌舞伎新報』第一六号によると、お伝を演じた尾上菊五郎は役作りにあたって、じつさいにお伝を知る人々に取材して、「決して伝法肌な装りでなく何処までも一皮冠り一寸外見と士族の細君風」であったと聞いて、芝居のなかでも、そのように工夫を凝らして演じたという。この錦絵新聞は、そうした一見「毒婦」らしくないお伝の姿を伝える、珍しい図版である。

尚、お伝の辞世として伝えられている「しばらくも望みなき世にあらんより渡しいそげや三途の河守」という歌は『夜叉譚』にもみえるが、おそらく魯文の創作と思われる。彼女を処刑した八世山田朝右衛門の証言によれば、正しくは「子を思ふ親の心を汲む水に濡るゝ袂の干るひまもなし」だとされる（篠田鈺造『明治百話』）。

(小林)

9-8 「是は此頃東京市街に於まして……」(『仮名読新聞』第一六三号)

明治九年(一八七六)九月十二日。(明石書店刊『復刻 仮名読新聞』第一巻より)

同年八月二十九日、お伝は古着商・後藤吉蔵を殺害したかどで逮捕された。当初の取り調べにたいして彼女は、ありもしない姉の仇討ちであると供述している。挿絵は、街頭で記事を大声で読み歩く「新聞売り子」の姿を描いている。

(小林)

9-9 「毒婦おでんの話し」(『かなよみ』第八八〇号・八八一号)

明治十二年(一八七九)二月一日、同年同月二日。(明石書店刊『復刻 仮名読新聞』第六巻より)

お伝が東京市ヶ谷監獄内刑場で斬罪に処せられた翌日から、魯文主催の新聞『かなよみ』で連載開始されるが、急きよ草双紙『高橋阿伝夜叉譚』として刊行されることとなり、わずかに二回で中断する。連載二日目の『かなよみ』紙上に、その広告が掲載されている。『夜叉譚』の売り出しは、初編二月十三日、二編二月二十二日、三編三月二日、四編三月九日、五編三月十九日、六編三月二十九日、七編四月九日、八編四月二十二日。

(小林)

五 魯文の交友圈

10 交遊と売文

三題噺や興画合わせといった、パトロンたちを交えて行われた遊びの中で、魯文は幹事に匹敵する重要な役割を果たしている。三題噺を推進した粹狂連の主要メンバーとして、毎回その会に顔を出してはけっして上手ではない噺を語っていた魯文は、演者たちのプロフィールと作品を収めた『粹興奇人伝』(文久三年刊)を山々亭有人とともに編纂したし、その後流行した興画合わせにも加わって、いつも気の利いた答えを披露しては大向こうの喝采を博しただけでなく、『粹興奇人伝』の興画合わせ版ともいうべき『くまなき影』(慶応三年)を編むのにも大きく貢献した。機知と軽妙を競う遊びの中で培われたプロデューサーとしての能力は、明治になってからの『仮名読新聞』や『魯文珍報』の編輯において花を開くことになる。魯文が晩年に至るまで都々逸の撰者を好んで続けたのも、遊びをマネージメントすることを楽しむかれの姿勢のあらわれだろうし、金と引き換えに相手をプロデュースする引札においてすら、かれの遊び心は軽やかに弾んでいた。

(谷川)

10-1 「稿本」茶銘尽興画合簡端戯叙

17.2×24.8cm 五丁。明治二年(一八六九)の夏に行われた興画合わせを本にまとめて刊行するために魯文が書いた序の自筆稿本。末尾に明治二年六月一日の年記がある。国文学研究資料館蔵 ヤ8-256

興画合わせを主催した翠香は『くまなき影』を編んだ皎々舎梅唄の妹で、姉の素雪とともに『くまなき影』に次の略伝が載る。

素雪女史の妹なり未幼稚ふして画をこのみ俳諧にしたしみ姉妹其師をひとしう

す深窓に成長ども松風羅月の友におのづから四情を導れよく風雅の道にわたりて興画の趣向雅俗滑稽をかねたり

翠香の兄の波月亭花雪の命日は六月五日であり、『くまなき影』がその三回忌の追善として出されたことからすると、この興画合わせも花雪の命日に合わせて刊行される予定だったと推測できるが、実際に刊行されたかどうかは不明である。

魯文の序によると、この興画合わせには、山々亭有人や落葉舎染谷などが参加していたことがわかる。

〔翻刻〕

茶銘尽興画合簡端戲叙

撰者翠香君に代りて

仮名垣魯文述

陸羽盧全が唐古事は。茶器の煎杯に譲りて贅せず。栄西明恵の皇國譚は。世に岩上の言はでも知りなん。其徳其能を枚挙とも。梅の尾に附く茶瓶子の蠅。胡蝶の影を踏台に彼酒茶論の孫引なること。看官先刻承知なるべし。故に自園の要を摘。上政府の高位より。末広婢侍女の喜撰をえらはず。宇治も素性も祝の白。煎茶抹茶の別儀を論ぜず。濃茶薄茶も合拌て。觴の筆を茶筌に換。搔巡したる菓罐立。手前勝手のにぢり口。管見不学四疊半。口切夏茶の差別も分ぬ。向対みづ屋の棚おろし。台椅の題の銘に寄せて。序文の道具を並べて云はゞ。素人市の売立めき。披講の咽の渴きやすらん。任他高点の玉画数員を。讚美ずば画主に如何ぞと。お正客の撰者に代り。詰から口を切告条。嘸面らしく是を称さば。出所の銘ある言葉の花器。趣向は深き硯の水注子。各名案上手の指より。水を覆の洩さず余さず。隅から炭取透間なき。引書の穿鑿火箸も休はず。茶巾の幅の短きは。茶柄杓の柄の長きを嗣ぎ。塩瀬の紫朱を奪ふ。帛さばきの奪體換骨。古茶を新茶と壘かへすに。苦心の蓋置おく間はなからん。されば茶碗の号に称なる。名譽は斗々屋の魚涯連。龍王軒を始として。都て四個の催主役事。茶出し配冊開巻も。数寄こそ物の高手の大人達。是は此道の大名物。抑茶の会の起原に比して。茲に諸君子を論はゞ。北山東山の山山亭は。金閣銀閣の高点を望み。平常に古事の名記を輯めり。そが中に両国の。境を索し。駄茶の名家の汝を称は。二十五円の高金物。高麗渡来の陶器に。直打の見ゆる箱書附は。絵師と筆者の紹鷗利久。将千金に換る茂林寺釜は。菓研堀に名高く。万天に広

げし羽掃は棗の称ある。嵯峨町に知られたり。筆頭茶杓の貝先より尖きは。三伝彦の名詮自性。他の悪茶を世に布き松葉に。落葉舎の号空しからず。茶亭の入夫が後見の。茶配は行拔路次行燈。能き中立を待合の。椽の舌出し尻尾を巻て。怒等の音ばかりを聴耳引立。わんとも云はで蹲踞居たる。僕が偽筆に極札を出しては。古筆家の鑑定違ひ。自己濡衣歟濡鷲燈籠。小首傾げて考へても。元來道にくらまの踏石。業に青箬塵穴を。穿鑿に難き短才暗愚。古染附の交構に。加保留薫物それぞとは。嗅つけたれど鉢前の。水懸論は大人気なければ。暫時浮世をさる扉に隔て。連庭不参せず釣燈の。黑白判然を松風の。釜の沸湯に安閑と。行住坐臥と高上ぶれど。風雅でもなく茶の気もなく。実は閑暇の極不如意な拙案を見立て精撰の。序者に命令清々君は。余程捻つた茶人に在せり。下地は好なり御意は可と。会席箸の筆追採。急案口調は職分ながら。近頃久しく仕附ねば。胸に支ゆる全部の脚色。調理余れる要文珍珠は。残菜入の中に収めて。他日拙評の折に披かん

(谷川)

10-2 〔後藤昌文宛仮名垣魯文葉書〕

14.1 × 8.9cm 一枚。明治十九年（一八八六）五月五日消印。仮名垣魯文筆。国文学研究資料館蔵 ユ 1-35-2

本葉書の受取人後藤昌文は、明治四年（一八七一）日本初のハンセン病治療専門医院を設立し、その生涯をハンセン病の治療と啓蒙活動に捧げた人物。昌文の営む起廃病院では、専門以外にも奇数日の午前中に限り皮膚病一般の治療に着手（『読売新聞』明治十二年（一八七九）九月十六日）、のち、院内の混雑を避けるために「皮膚梅毒は勿論内外科一切の患者を診察」する後藤診察所を新設する運びとなったようだ（同上、明治十八年（一八八五）二月二十一日）。後藤診察所は、芝新堀町の起廃病院と同じ番地内にあり、昌文の子息で起廃病院副院長の昌直が診察を担当していたようだが（前掲記事）、魯文が葉書をしたためた当時、昌直はハワイ政府からの招聘によりハワイに渡航中であつた（明治十八〜二十年）。

魯文は、顔に出来た腫れ物の相談ないし治療を昌文に委ねていたらしく、文面は病状の経過報告で始まっている。宛書の浅草旅籠町一丁目十一番地は、芝新堀町の起廃病院にて調剤した薬の発売元、後藤薬舗の所在地であったことが、後藤昌文・昌直著『難病自療』（明治十五年（一八八二）六月、出版人後藤昌直）の奥付等より知れる。

〔翻刻〕

〈表〉

浅草旅籠町壱丁目

十一番地 仮名垣魯文拝

後藤昌文先生

御調合場諸生御中

〈消印〉

芝口 東京・一九・五・五・ル

〈裏〉

面部之 物稍快方ニ候処四五日前より

左眼尻ニ発表にて殆と左眼瞽者と

類候次第故御注文之義延引仕候本日は

出社仕候間明朝は早々浄書仕差出し

申候也誠ニ遅刻恐入候謹言

猶々藤園尊老之見台ニハ妙と存候

品手ニ入先頃之小机と取換差上度珍鳥

亭ニ預ケ置候間御立寄御一覽可被下候

（青田）

【参考出陳】 起廃病院医事雑誌（第一号）

18.2 × 12.1cm 一冊。明治十年（一八七七）六月刊。仮名垣魯文編。東京 仮名読新聞

社（印行発売所）。国文学研究資料館蔵 キ104

魯文を編輯人とする『起廃病院医事雑誌』第一号が明治十年六月二十九日に刊行

された由、翌日付けで『読売新聞』が報じている。第二号は半年後の十月二十九日頃発行されるも（『読売』十月二十日）、以降の出版は確認できない。明治十年末、魯文は『かなよみ』の記事執筆と運営業務に追われる傍ら、十一月二十八日に『魯文珍報』を創刊し、二足ならぬ三足の草鞋を履きあぐね困窮していた様子が、次の一文からも明らかである（『かなよみ』明治十年十二月九日）。

世の諺に二足の草鞋は穿勿れ（略）珍報錐の細尖の鎗を開珍「駒」のひらくびに引付群る雑誌中へ怖ず臆せず呑湖の酒蛙と顛れ出たる修羅場の混雑進めば背後の仮名読も気遣はしく退けば又起廃病院医事雑誌次号の責あり

青息吐息で第二号刊行に漕ぎ着けた『起廃病院医事雑誌』が、いわゆる「三号雑誌」に至らずして止んだことは想像に難くない。

国文学研究資料館所蔵の『起廃病院医事雑誌』第一号は、魯文による「後藤昌文先生小伝」を掲げ、次いで「仮名読社員述」として治療薬の送付方法等を示した後、本文は、病者と昌文院長との問答形式に拠ってハンセン病治療に関する種々の疑問に答えるという体裁になっている。ただし、東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵の一本と比較すると、起廃病院で撮った患者の写真（二見朝隈撮影。朝隈は魯文の知己で銀座初の写真館を開いた写真師）とその説明文を、「仮名読社員述」の一文に差し替え、本文も全文新たに活字を組み直していることがわかる。なお、発行元の仮名読新聞社所在地を出雲町四番地に改めているが、同社社屋が弥左衛門町から出雲町に移ったのは明治十一年（一八七八）二月一日のことである。従って、展示に供した『起廃病院医事雑誌』第一号は、初版の刊年月をそのまま用い、明治十一年二月以降に発行された後印本と考えられる。

本誌は二号にて止んだようだが、その第一号は広部精によって漢訳され、明治十三年（一八八〇）十二月十三日出版御届にて上梓（出版人後藤昌盛、売捌所愛善社）、その附録として『後藤昌文先生 甲府三井座演説大要』を刊行（起廃病院医員等筆記、編輯兼出版人後藤昌盛、売捌所愛善社）。起廃病院では、『起廃病院医事雑誌』を民間啓蒙に役立てると同時に、医療活動の広報誌的役割を担うものと位置づけていたと思われる。例えば、警視局への建言が容れられ本誌二十五部を警察分署に配布の旨、通達を受けた（『かなよみ』明治十年十二月六日）他、第一号の問答を増補する形で『起廃病院医事日誌』（明治十六年五月印刷、起廃病院発行）を出版している。なお、『起廃病院医事雑誌』第一号巻頭に「仮名垣魯文操觚」として掲げられた

昌文の小伝は、漢訳版では、同一タイトル・ほぼ同内容にて「鹿山広部精謹識」として載る。後者末尾に、広部自身は昌文と一面識もなく、昌文の弟昌綏の求めによって本誌を漢訳し小伝を成したとある。一方魯文は、単なる編輯出版の請負人ではなく、患者と医者との関係にも止まらない知友であったこと、展示番号10-2の後藤昌文宛葉書の文面からも窺い知れよう。

『起廃病院医事雑誌』の発行を契機として、魯文はハンセン病治療の啓蒙普及と患者の救済支援活動への取り組みを新聞雑誌上で展開する（山口順子「後藤昌文・昌直父子と起廃病院の事績について」『ハンセン病市民学会年報 2005』に詳しい）。不治の病として恐れられていたハンセン病（当時の呼称では「癩病」）を、加療・施薬により全治させるといふ強い意志のもと医療活動に邁進した後藤昌文、そして、彼を陰に日向に支えたジャーナリスト魯文の交友関係は、今後更なる解明が待たれるところである。

（青田）

10-3 高見山ぬしに代りて報義告条 おんれい

20.0 × 55.4cm 一枚。明治三年（一八七〇）十一月に本所回向院境内で催された東京相撲で前頭三枚目をつとめた高見山大五郎が、横浜の最負から贈られた化粧回しの御札とその披露のために配った摺り物。魯文の口上に梅素玄魚の画を添える。国文学研究資料館蔵 T 281

高見山大五郎は、天保九年（一八三八）上総国山辺郡東金生れ。慶応二年に姫路藩のお抱えとなり、明治二年の冬に入幕した新進の力士。後に改正組を率いて旧弊な東京相撲から脱退するが、明治十一年に和解。明治十六年より相撲会所取締となる。

明治二年の版籍奉還により姫路藩のお抱えを解かれた力士たちの中で、高見山ら四名は盟約を結び、姫路藩への忠義を全うすべく引き続き扶持なしで同藩との関係を継続したい旨を願ひ出たが、その内の一名が土佐の山内容堂に召し抱えられたために騒動となった。明治三年五月、裏切った力士を討ち果たして自害しようとした高見山だったが、相撲会所の年寄らが間に入り和解した。このいきさつを高見山が姫路藩に報告すると、その義気に感じた藩は再び彼らに扶持を与えて召し抱えること

にし、高見山に高砂浦五郎という名を与えた（上司延貴『相撲新書』、明治三十二年一月）。明治三年の冬場所は、高見山という名で出た最後の相撲。国輝が描いた錦絵でもこの化粧廻しをつけている。

魯文と高見山との交渉については知られていないが、明治十六年には後にたくさん出される高砂の伝記物語の最初のものである「四十八手角力古実 櫓太鼓音高砂」が孤蝶園若菜によって書かれている（『いろは新聞』に九月二十八日から十二月十四日まで四十二回にわたり連載。明治十七年一月四日、前後二冊で刊行）。

〔翻刻〕

高見山ぬしに代りて報義告条

仮名垣魯文述

大極両儀の土畫の形象を。開化の目今に鑑れば。地球の円きに髣髴たり。四本柱の四季方位。春は東洋青海原。白色は秋の西洋風。南は夏の赤道線。北極氷海の黒夷の地まで。強弱敵し難く。優劣相争ふをもて。定理と為せば。孰敷相撲を好望ざらむや。茲に御最負を力とし。愛恵を仰ぐ高見山看官のひと浪寄てば。支骸に蒸気の煙炭を發げ。四十八手の航海術に。未至極ねど前年。漸幕中に入艦の。碇綱より横浜御連の。手綱に縋る土俵入。各国有名の関取衆と。併番や秋の韓錦は。顔に紅葉の時雨月。青かりしなり御執立の。余りに過分し黄金の装り。化粧廻巾の比類なき。当賜物は外国へ。外聞俱に有難き。報義かたく新文に。記載て遠近知音に呈すは。彼伝信機の器械に似たらむ。伝へ云最負。其形象龜に似て。好て重きを負ふとかや。されば万代の末かけて。尽ぬ吉例の相撲の繁昌。旭に輝く南港の。栄を祈る幣帛の。清め浄むる力水。野見宿禰の神かけて。猶御取立を希ふ

うちよする浜辺の浪の朝日影
あほけは高み山もまはゆき

明治三龍集庚午冬

姫路藩 高見山大五郎

（谷川）

10-4 粹の枝折続篇出 版に付都々逸募集

16.6 × 19.9cm 一枚。『明治新調都々逸集 粹の枝折』（明治二十一年（一八八八）三月

刊行)の続篇刊行に向け都々逸を募る引札。正篇に引き続き魯文が選者をつとめることが予告されている。国文学研究資料館蔵 ㊦ 9-55

魯文は『明治新調都々逸集 粹の枝折』の正篇(中本一冊。明治二十一年三月刊。暁斎画。編纂兼発行者安間ヤス。本文二十一丁)の選者で、孤蝶園若菜とともに「金花猫翁魯文」の名で序を寄せるとともに、「男女校を異にすといへるこゝろを」という題で自作の「離れちやみれども学びの道は末のまとまるえんつゞき」という都々逸を載せる。同書の巻末には「桐葉舎主」の名で次のような「稟告」が載せられており、続篇が早くから計画されていたことが知れる。「本篇粹の枝折出版の爲め四方に秀吟を募り候処殊の外各位の賛成を得て玉詠山の如くに集り催主琴升は素より本舎の光栄不過之候尚また今回続篇を出版せんとす請ふ四方の各位本篇に倍するの賛成を賜はらんこと」。催主の琴升は孤蝶園序に「我が友垣」とあるが未詳。正篇の都々逸を募る広告は『東京絵入新聞』の一月五日及び同十三日に掲載されているが、内容は、末尾の月並会についてのくだりが「本舎には月並会有之候間紛れぬ爲め(葉へ)と御記載を乞」となっていることを除けば、この続篇の引札とほぼ同一である。続篇の引札は、文中の「改正出版条例」云々の記述が、明治二十年十二月に公布された新しい出版条例のことを指すと推定されることから、正篇の刊行(国立国会図書館蔵本の奥付は三月「十五日発行」を「十八日出版」と訂正)に合わせて配られたものと思われる。「桐葉舎」の所在地として記される「根岸金杉村三百七十五番地」は正篇の「編纂兼発行者」だった「安間ヤス」の居所と一致するが、「桐葉舎」および「安間ヤス」ともにこれ以外の出版物にからんだ形跡はなく、『粹の枝折』続篇の刊行についても不明。

『明治新調都々逸集 粹の枝折』は、前掲『東京絵入新聞』掲載広告に「明治都々逸の新風を世に伝へん」とうたわれているように、「つもる思ひを汽船にのせてアタランチツクに流したい」などという開化期からの基調の上に、「政治組織はなんでもよいが逢れる自由がわしやほしい」「自由党派を盛んに募り恋路の主張をして見たい」といった政治へ傾斜したものや、「主は女にノロマントンよ深さも知らずにはまり込む」(ノルマントン号事件)、「早く御主と条約結び自由に雑居をして見たひ」(条約改正)、「恋路に保安の条例立てゝ鳥に退去を命じたい」(保安条例)など、時事に取材したものを交えてバラエティーに富んでおり、また、「恋のい魯文ミヤ仮名垣ま

じり実と心を尽す筆」「タトヒ魯ろかなかながきとても情は深いよ恋の文」などという選者を意識した作品も見られる。

この時期、古川魁蕾と並んで「小説分任」という肩書きで『東京絵入新聞』に在社していた魯文は、弟子たちの連載小説の校正として名を出すほかは、早くから親しんでいた都々逸の選者として表に出るくらいになっていた。『粹の葉』の外、『東京絵入新聞』の大売弘所だった商弘所が募集した「猫妙会百々逸集」(『東京絵入新聞』四月二十一日掲載広告)、猫樂舎による「月並都々逸」(同、五月九日掲載広告)がいずれも選者として魯文の名を大きく掲げている。

「翻刻」

○粹の枝折続篇出版に付都々逸募集

題 何なりとも御随意

仮名垣魯文翁 撰

今度粹の枝折続篇編輯の爲め広く秀作を募り候間四方の粹君如山御投詠賜はらんことを希ふ

三月三十一日堅く〆切り早々撰評書家の題序を加へ至極美麗に製本し候投句の諸君へ一冊ツ、四月二十五日までに無洩配呈仕候

巻中最も秀作の者三吟を抜擢して三才となし左の景品を贈る

天の君へ 上等白縮緬壹反

地の君へ 上等半紙百帖

人の君へ 同 六十帖

三才に次く者十吟を撰ひ番外となし各新形手拭壹反ツ、を景物す

点料(郵便切手にても宜敷候) 御一名にて十句まで十八銭其上一句毎に壹銭ツ、増す事

但し東京市外は別に書籍の通送料四銭を添て願升

東京根岸金杉村三百七十五番地

玉句受附所 桐葉舎

○月並会の義は改正出版条例御発布已来休会罷在候口目下趣向考案中に付何れ近々御披露可仕候間其節は倍旧の御賛成を希上候 桐葉舎主敬白

(谷川)

10-5 第二番目 三題咄高座新作 和国ばし藤次 市川小団次 幸次郎 沢村訥
升 竹もんの虎 市村家橘 三題咄 粹狂連
大判錦絵。改印「戌二改」(文久三年(一八六三)二月)。一蕙齋芳幾画(落款「芳幾画」(芳桐)、彫師松島政吉(「松嶋彫政」)。江戸 海老屋林之助。役者は、二代目沢村訥升・四代目市川小団次・四代目市村家橘。禾口庵文庫蔵

文久三年二月江戸市村座上演歌舞伎『三題咄高座新作』(河竹黙阿弥作)に基づいた三枚続き役者絵。文久二、三年は、江戸中が三題嘶の大流行となった時である。三題嘶とは、兼題として与えられた三つの題を、一つの落とし嘶にするもの。最初は六〇年ほど前の文化初年、三笑亭可楽が孔雀茶屋にて行つて流行した。文久の流行は、山々亭有人が通人の金座役人高野某(俳名花兄、松花軒等)達の依頼で、柳亭左楽のために始めたもの。文久二年秋には、日本橋萬町の柏木亭にて、有人、梅素玄魚、仮名垣魯文、綾岡輝松、芳幾、山閑人交来、福井扇夫、瀬川如臯、河竹黙阿弥、左楽、三遊亭円朝、春風亭柳枝等で「粹狂連」が出来た。黙阿弥が三題嘶の会で、「国性爺、乳貰ひ、髪結」という兼題で口演したものが評判が良かったために、市川小団次が演じてみたいと言い、歌舞伎『三題嘶高座新作』通称『和国橋』となった。「和国橋の藤次」が和藤内、「竹もんの虎」も虎退治でどちらも『国性爺合戦』(近松門左衛門作)を仄めかす。折から隣町の中村座では、『国性爺合戦』を人気役者揃い(彦三郎・権十郎・田之助)で上演することになったので、市村座は世話の(江戸庶民生活にひきよせた)「国性爺」で勝負した。三題嘶の流行もあり趣向も優れていたために、市村座が大当たりとなり、粹狂連が作者黙阿弥に引き幕を贈った。『黙阿弥全集』には、引き幕が地模様となっている別の役者絵の写真が掲載されている。それも本図と同じ芳幾画であり、芳幾は粹狂連メンバーである。三題嘶の流行は、パトロンの金座役人高野氏等が、御一新の打撃を受けると同時に終焉した。

(高橋)

山々亭有人の序文にもある如く、三笑亭可楽を元祖とする三題嘶は文化初年以後の隆盛と衰退を経て、「粹興」両連によって再興される。その口火を切ったのが、「粹狂連の宋公」と目される好文舎花兄であり、次いで、粹狂連の三題嘶を愛好する余り「風交の友」を集い興笑連(狂笑連とも)を主催した春の屋幾久であった。展示箇所は、三題嘶の会の活況を描いた口絵。

(青田)

六 毎日新聞社新屋文庫蔵 魯文関連資料の紹介

11 新屋文庫

新屋文庫とは、大正から昭和初期にかけて、大阪毎日新聞記者として活躍、後に近衛文麿の秘書となった新屋茂樹氏(一八八六〜一九四六)の蒐集したもので、東京大学の明治新聞雑誌文庫、京都大学の上野文庫、早稲田大学の西垣文庫などに並ぶ幕末・明治期の新聞雑誌等の一大コレクションである。氏の死後、妻千代能氏をはじめ遺族が引き継ぎ守ってこられたが、昭和四十二年、毎日新聞社に寄贈。今日では一部社史編集室蔵であったものも加えた形で「新屋文庫」として大切に保管されている。原則非公開の資料であるが、今回の展覧にあたって、魯文関連報條を含め、日刊新聞黎明期の貴重な資料をお借りする次第となった。

以下、四つのパートに分けて紹介してみたい。

(山本)

① 魯文関連単行本

新屋文庫の現蔵書目の多くが新聞・錦絵新聞に特色があり、魯文に関わる単行本の点数はさほど多くない。その中で注目されるのは写本『春色柳桜筋』の存在であろう。幕末期の江戸で、魯文や山々亭有人、一蕙齋芳幾らは粹狂連や興画会などにつどい、遊びのネットワーク「連」を形成していた。「連」とは固定的な集いのことではなく、

10-6 粹興奇人伝

個人蔵 ※書誌事項は1-4参照

各々の興味に従った緩やかな繋がりでの謂いである。その一端は1-6で展示の『くまなき影』などにみることが出来る。後援者と戯作者―鶯亭金升「梅亭金鷲翁」(『文芸倶楽部』明治二十八年二月ほか)にある賞目当ての鰻の食い競べの逸話が示すように、時には卑屈なまでに後援者におもねらざるを得なかった戯作者たちであるが、その仲間内での心地よい遊びの様相も覗える資料となっている。

(山本)

11-1 横浜土産

中本二巻一冊(初編二編合綴)。万延元年(一八六〇)刊、改印「申閏三改」(初編)・「申四改」(二編)。仮名垣魯文叙、玉蘭齋貞秀画。江戸 鳳来堂梓(見返し)。毎日新聞社新屋文庫蔵 749

題簽には「横浜名所図会 初編 全」、見返しに「万延元 庚申夏」とある改題後印本。横浜開港当時の絵図を主とした彩色案内誌で、横浜絵で著名な橋本玉蘭齋貞秀が描く。魯文は初編序に次のように記している。

実地を踏で勝景を眺望は一本の枝にあり、居ながらにして名所を知ること一書の図会に不如、画工玉蘭齋主人遠く遊て山水を鑿ち近く机上に毫を走て並く眼に触し図を成こと爰に年あり、こたび南島を歴して繁昌の港を画き、号て横浜土産と称す、未だ見ぬ人の枝折にせんと例の婆心ならんかし

万延改元庚申夏 仮名垣魯文記

横浜のことを「南島」と呼んでいるなど、興味深い資料である。展覧には初編末尾二編冒頭の図を挙げている。当時の外国人の居留の様子が窺い知れよう。

(山本)

11-2 春色柳桜筋

中本初編上中二冊(下巻欠)。写本。慶応元年(一八六五)七月、二世種彦こと笠亭仙果序。仮名垣魯文著。なお一蕙斎芳幾画、梅素玄魚書と推定。松華園旧蔵。毎日新聞社新屋文庫蔵 761

柳亭左楽や仮名垣魯文など実在の人物達が登場する人情本。粹狂連のパトロンの

存在であった好文舎花兄こと高野粹桜軒を主人公にした内容で、「松華園」の印はその蔵書であったことを示し、仲間内で回覧されたか、花兄に呈されたものと目される。

(山本)

11-3 新橋芸妓評判記 初編

横本一冊。明治十四年(一八八二)九月二十五日御届。猫々道人魯文(仮名垣魯文)・柳々閑人・香雲楼芳雪序、猫敵道人識、呉園情史著、年雪画。東京 粹文社。定価十三銭。毎日新聞社新屋文庫蔵 794

『いろは新聞』広告によれば明治十四年十月二十一日発行。役者評判記の趣向に倣い、頭取・当込・ヒイキ・わる口等の評者を設け、新橋芸者三十七名の技芸・器量などを品評したもの。本書の評判は宜しかったようで、『いろは新聞』五七一号掲載『横浜芸妓評判記』広告に「目下世評の賛成を得し新橋芸妓評判記に倣ひ」と記される程であった。

(山本)

② 新聞というメディア

明治四・五年以降、政府の奨励もあつて新聞というメディアは著しく発展を遂げた。新聞のみならず、それを配達する人々までも、開化期を彩る職業として脚光をあびたのであった。多くの新聞が発刊していく中、内外の新聞を揃えた「新聞縦覧所」という施設も開設されていた。時流に敏感な魯文が、横浜野毛山に「諸新聞縦覧茶亭窟蝮蟻」を開設したのは明治九年七月のことである。新聞は人々の情報源である一方で、投書家という一群をも生み出していったのである。

(山本)

11-4 「郵便報知新聞創刊予告」

41×28cm 一枚摺引札。明治五年(一八七二)二月発行。駅通寮。毎日新聞社新屋文庫蔵 630 (L-1)

木版一枚刷の広告。駅通頭前島密の発案で刊行された『郵便報知新聞』の創刊は明治五年六月。当初は冊子型式の新聞で、明治六年六月から日刊紙となった。「本文の新聞駅通寮へ差出候節は其表書へ東京駅通寮御中と而已可認。然る時は何れの地よりも無賃にて運送可致事」と但し書きにあるが、東京駅通寮宛なら新聞原稿郵送料は無料という、駅通局の便宜を得ての発刊であった。「新聞原稿運送規則」が施行されたのは明治六年七月一日。それまでは『郵便報知新聞』のみに与えられた便宜であった。

(山本)

11-5 「平仮名絵入新聞ビラ」

19.7 × 51cm 一枚彩色摺ビラ。明治八年（一八七五）発行。東京 絵入新聞社。毎日新聞社新屋文庫蔵 631 (L-2)

『平仮名絵入新聞』は明治八年（一八七五）四月十七日に創刊。同年九月に「東京平仮名絵入新聞」とし、さらに翌九年三月「東京絵入新聞」と改めており、ビラは明治八年半ば頃のものと思われる。「玩弄の草種史に換て読むと御用の御方は」とあるが、一蕙斎芳幾が創刊当初から関わり挿絵を描いた本紙が、「小児に絵解の出来ぬ」ことをも配慮していたことが分かる。

(山本)

11-6 「東京絵入新聞引札」

20.5 × 27cm 活版一枚摺引札。明治九年（一八七六）発行。東京 絵入新聞社。毎日新聞社新屋文庫蔵 632 (L-3)

明治九年三月に「東京平仮名絵入新聞」から改題した際の広告。「東京絵入新聞」では題号のデザインに天使の像を用いているが、引札にみる天使像は、むしろ一蕙斎芳幾が多く手がけた錦絵新聞「東京日々新聞」の表題に由来する。支局として名を連ねる二十箇所から、関東を中心に全国へと広がっていることが判明する。

(山本)

11-7 開化廿四好新聞

錦絵大判一枚。明治十年（一八七七）一月二十九日御届。豊原国周画、彫工銀。東京武川清吉版。「開化二十四好」と題する連作の第十七番。毎日新聞社新屋文庫蔵 225 (G-31)

錦絵にある「御所之五郎蔵」とは元治元年（一八六四）市村座初演・河竹其水作「曾我綉俠御所染」に登場する配役だが、役に扮した尾上菊五郎の姿と新聞売り子の図の組み合わせとなっている。新聞がしばしば詩歌の主題になり錦絵の題材に選ばれたのも文明開化の促進に役に立つと期待されたためで、当時、新聞売り子は、開化の新職業としてもはやされていた。

(山本)

11-8 「新聞売り子の図」

錦絵（部分）一枚。明治初期か。毎日新聞社新屋文庫蔵 223 (G-29)

高崎駅中沢堂の半纏姿をした新聞売り子の図。「各社新聞」と標記のちりんちりん箱を担いで、呼び鈴を鳴らしながら売り歩いている姿であろう。明治初期の新聞売り子の姿を彷彿とさせる。

(山本)

11-9 東京開華名所図絵之内「新橋通煉瓦造」

錦絵大判一枚。明治十年（一八七七）前後。三代歌川広重画、彫多。版元熊谷庄七版。毎日新聞社新屋文庫蔵 224 (G-30)

揃物の一。刊行年代は明治十年（一八七七）前後。開化の風物である人力車や馬車の行き交う新橋のほとり、客が売り子から新聞を買っている。煉瓦造の「しげ松」では、南龍・貞朝・貞斎・貞山の講筵がなされ、三月からは松林伯円が出演する旨の広告が出ている。ちなみに明治十二年「講談浄瑠璃落語定席一覽表」に「しげ松」は見あたらない。「東京開華名所図絵」は、他に「しんばし鉄道寮」「新富座劇場の

図]「隅田堤花盛の群衆」「東叡山内東照宮」などを取り上げている。

(山本)

11-10 「お休みなながら新聞一読所・知新舎引札」
20.5 × 14.6cm。木版一枚摺引札。明治五年(一八七二)頃発行。東京 知新舎。毎日
新聞社新屋文庫蔵 633 (L-5)

浅草の新聞縦覧所の広告。「東京日々新聞」の間に挟まれていた引札で、「中、外、都、鄙の新聞を其他一見多益の書画類を集め」、廉価で閲覧させていた新聞縦覧所の様子が伺える。

〔翻刻〕

御休みなながら新聞一覽所 浅草奥山稻荷前通り 亀玉庵の向ふ 知新舎

方今種々新聞紙類日々発兌に相成候は人の知識を広め見聞を増し日新の域に進ませられんが為の御趣意なるべければ人々皆その新聞を見ずして可ならんや然れども日々発兌の所なれば是を継続して求見るに或は費の嵩むことあるべし故に浅草奥山に於て仮の茅屋を設け中、外、都、鄙の新聞紙其他一見多益の書画類を集め旧を去り新を採り以て諸人の見に供するなれば此地へ徘徊するの諸君此處に一休し右等の書類を見能く世上の実事奇談を知り給んことを望む

五月五日発舎 見料 御一人 五十文

(山本)

11-11 「新聞縦覧所広告・日新堂支局文象舎引札」
29.5 × 21.8cm 活版一枚摺引札。明治六年(一八七三)四月発行。東京 日新堂支局文
象社。毎日新聞社新屋文庫蔵 634 (L-6)

「各種内外ノ新聞紙ハ言フ待タス、新刻訳書ノ類モ亦同ク之ヲ備ヘ」とあり、この新聞縦覧所では、新聞雑誌の他に新版書籍も配備していたようである。一回の見料三銭、月券が十二銭五厘、午前七時から午後五時まで開場と、さながら私設図書館の様相を呈している。なお、明治六年四月発行『新聞雑誌』第九二号にも掲載さ

れており、本資料はその現物にあたる。

(山本)

【参考出陳】 諸新聞縦覧茶亭 窟螻蟻引札(宮武外骨『文明開化』掲載より)
国文学研究資料館蔵 フ 1-59

11-12 見立多以尽「洋行がしたい」

錦絵大判一枚。明治十一年(一八七八)一月四日御届。転々堂主人高島藍泉文、月岡芳年(米次郎)画。東京 井上茂兵衛版。定価二銭五厘。毎日新聞社新屋文庫蔵 221 (G-26)

美人画連作の一。和洋折衷の衣装を纏った令嬢が、椅子に腰掛けてテーブルの上で洋書を広げてももの思いに耽っている。填詞に「雨雪の中を厭ひなく勉強めば来る春に轉る声がせ千金の月給とりとよばる」とあるように、勉強によつての功名立身を思案しているのであろう。

〔翻刻〕

深窓に養はれて。掌の珠。挿の花。と雙親の寵愛ふかく。令弱と唱ふる婦女子の身にして。雷名を五大洲に轟かすものは。何ぞや。学問の功を。品行の正しきが故なり。好文木の香を慕ふ。野婦鶯も冬枯に。スペルリングの笹なきから。雨雪の中を厭ひなく。勉強めば来る春に。轉る声が千金の。月給とりとよばるゝも。聖經読鳥と尊まるゝも。唯この学びの。一番にある而已。

操觚者 転々堂主人述◇

(山本)

11-13 見立多以尽「とりけしたい」

錦絵大判一枚。明治十一年(一八七八)一月〇日御届。転々堂主人高島藍泉文、月岡芳年(米次郎)画。東京 井上茂兵衛版。定価二銭五厘。毎日新聞社新屋文庫蔵 221 (G-26)

美人画連作の一。芸妓とおぼしき女性が、『かなよみ新聞』を読み耽っている図。填詞に「恋中を嗅出されては最う仮名読の先生実に情ない」と記され、標題が「とりけしたい」とある。当時、『かなよみ新聞』には「猫々奇聞」と題し、魯文などの手によって芸妓の艶聞が書き記されていた。

〔翻刻〕

出て三日人なら如何に猫の恋。と故人もいひし早咲の。梅も盛のつく頃に。隅田の上流の夜泊は。足もと暗き朧月に。顔をそむけて忍びがへし。浮雲くわたる糸爪を。研や。遂ずや。挑まれつ争みつ狂ふ恋中を。嗅出されては最う仮名読の。先生実に情ないといはん

転々堂主人戯誌◇

(山本)

11-14 有喜世数語録

46.5 × 32cm 活版一枚刷。立齋広重画。明治十二年（一八七九）一月発行。東京 三益社。毎日新聞社新屋文庫蔵 588

新年を迎えると新聞各社は附録を發行するが、「有喜世新聞」二九六号附録（明治十二年一月四日）として、中坂まときや会田皆真など有名投書家の新年挨拶をすくろくに仕立てたものである。同紙三〇一号（明治十二年一月十一日）「寄書」欄に、「数より多きお花意は。日に増し。月に隆盛の。基礎かたき三益社。別段本年の初配達は。他社とは一層はしりの五趣向。投書家さん方の顔揃。」とある。数語録でも名を連ねる投書家杏村の発言だが、その評判の程が覗えよう。

(山本)

③ もう一つの戯作・引き札と戯作者たちの才智

魯文は引き札の名手でもあった。引き札は報条とも言う。「くぼり札」として、開店披露などを宣伝するため、一人一人に配った摺物であり、今日のチラシ広告やダイレクトメールにあたる。魯文が「談笑諷諭滑稽道場 御詠案文認所」の看板を掲げたのは嘉永年間のことであったが、「当時の作料は引札の文一枚作りて二朱貫へば上等の部

なれど出来星の作者なればと自ら卑下して魯文は一朱を以て其定額とし」という（野崎左文『かな反古』）。廉価で引き受けていたとはいえ、引札に宣伝文を書くことは、生活の糧として、大きな収入源に他ならなかった。しかしその記す宣伝文は人気を博した。「翁は引札ちらしの文を草するに巧みにして料理の開業、商家の売出し等多く翁の筆を煩はし一時は魯文の名にあらざれば引札の価値なきが如き有様」（明治文学名著全集解説・大正十五年五月）と野崎左文が回顧するように、短い宣伝文にその遊びの精神が端的にあらわれ、人々を惹きつけるところとなったのである。ものした引き札は「殆ど一萬に達せしならん」とされる。平賀源内・山東京伝・式亭三馬などの戯作者たちによって、引札はいわば読み物として楽しめるものとなっていたが、魯文もその系譜に連なっている。今回、魯文周辺の人々——山々亭有人や三遊亭円朝などの引き札も併せて幾点が展示した。

(山本)

11-15 和漢西洋 書肆貸本所報條

木版一枚摺。明治初年代。瀬川如阜・山々亭有人・仮名垣魯文・河竹其水合述。好文堂山城屋金太郎。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-01)

〔翻刻〕

和漢西洋 書肆貸本所 瀬川如阜 山々亭有人 仮名垣魯文 河竹其水合述
(如) 胸中八斗を儲へるの才士ハ。南京米の相場を知つて。葛飾早稲の価に渉らず。博学五車に富の儒先生ハ文車の迂遠くして馬車蒸気車の神速ならず。際限ある身に限りなき。書籍の概略時々流行。江湖学問を究理んこと。支那で所謂小説稗史(有) 読で皇国の軍談記録。傍訓附が目的の枝折。桑と茶の実を植付の。繁茂も東京の一種の名産。書肆貸本の開店に。小金の牧を開くとハ。方今形勢での辻占吉と。好の道から高手の活業。和漢西洋実録戯作。人情滑稽隨筆記。御所望次第蠶紙の糸を引出す続本類(魯) 翻譯演義物の本。長沓歩らす足曳のやまと貯ふ部数ハ横浜鍋の牛に汗し。居留地の棟に充。されば粹書の賃口繁きに。歌妓の戸籍倍たるも知られ。義経記を讀者多きハ。蝦夷開拓の吉兆なるべし。遮莫又賃の伝信機ハ。写真鏡の紙どりめきて。本屋の為の得意にあらず(其) 闕冊落書汚痕油点。手籠ハ御免を蝙蝠傘。風衣の翹が生。借手買手も大坂町。彼難波津の冬至梅。開店書肆と諸共に開化

し文華盛典の。期に当るの祝砲も。所謂周の正月詞。顔見勢頃の出店に。新舗披露の告条ハ。畑達ひの大根歌舞妓。戯作の道ハ志ら浪の、名も濁江の河竹其水(如)同流れをくみながら。流行疎き三世瀬川(有)深き趣向の影模。浅香山の井山々亭(魯)その山踏も初学び字性も覚つかない垣の(其)筆のさきざき諸君子へ主人の蔵入冀ふと(四人)ホ、敬白スになん

東京元大坂町

山城屋金太郎

(山本)

【参考出陳】〔貸本新舗好文堂報條〕

木版一枚摺。明治二年(一八六八)十一月。好文堂山城屋。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-02)

〔翻刻〕

貸籍標目

○国史記録有職律令雜史(日本書紀古事記文徳実録三代実録大日本史職原弘仁貞觀延喜式山槐記明月記百鍊抄三鏡栄花盛衰記平家物語東鑑太平記之類其余歴代治乱興亡之雜史等)

○物語草子日記記行(竹取うつば伊勢源氏狭衣枕の草子つれつれ草土佐日記かげろふ日記十六夜日記之類其余諸家道の記等)

○和歌集歌学文章(万葉二十一代集私撰家集歌合百首歌仙八雲御抄袖中抄袋草子枕詞之書等本朝文粹扶桑拾葉集之類)○狂歌俳書類

○諸名家随筆雜書地理名所之類○仮名物草紙類(西鶴八文字屋ものくさくさ)

○絵入読本中形人情滑稽類○浄瑠璃丸本雜劇正本類

○写本軍書諸家秘録忠孝仇討政談物類其余雜書クサ、

○漢土経伝歴史諸子百家叢書并小説通俗演義類○西洋翻訳書

右之外近世洒落本(虎の巻三教色錦の裏のるゝ)赤本黄表紙并京伝馬琴三馬種彦より当時に至る迄之合巻草双紙等も御求に随ひかしまゐらすべし

東京人形町通元大坂町 好文堂山城屋金太郎〔好文堂〕

明治二己巳年 十一月開店

貸本新舗
東京元大坂町第貳番 好文堂

(山本)

11-16 〔御膳新干海苔開店御披露・都会屋銀平報條〕

木版一枚摺。仮名垣魯文述。都会屋銀平。毎日新聞社新屋文庫 370 (K-13)

〔翻刻〕

御膳新干海苔 開店御披露

青海苔薫る春の旦。紫海苔の風味を尊み屠蘇に人気をとり肴。彼重詰の四角に折て下戸も上戸のあがり口札者の袖を引かすみ一寸一枚焼海苔の。馳走は別品淡薄清味此味ひにして物なしと。土地の老舗にはぐからず新海苔の名を開店の。ところ替れば品数多く仕入は大森本場を撰び。蒲田の梅が香をとめて薫り込たる極製品。馬喰町のひゞきにより駅路の鈴が森繁く昌り賑ふ御来駕を主人に代りて願ふになん

仮名垣魯文述◇

当十二月十七日見世開 当日亀景呈上

馬喰町式丁目横町 高しまやむかふ 都会屋銀平

(山本)

11-17 〔絹木綿唐糸 萬染糸類品々御披露・湊屋報條〕

木版一枚摺。文の仮名垣(仮名垣魯文)述。湊屋。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-15)

〔翻刻〕

絹木綿唐糸 萬染糸類品々 御披露

弾初唄ふ梅の春。家の抱妓の芸名に因む。万吉はら山谷の辺り。三筋霞の片手間に。是もえにしの糸類しなじな。貫六小かねも一坐の御披露。その初買をまつ葉の。針より細き利に拘はらず。花生の許より次棹なれば。根緒胴掛のかけ直なく。一際廉に差上ませば。お坐敷のおなじみさま方。ヤレそれそれへ御吹聴。御取はやしお求女を。四方に巡りて小手巻の糸よりかけて願ふらんひく手も繁く冀らん

ねへさんにかわりて 文の仮名垣述◇

浅草山谷吉野町河岸 湊屋(印)

(山本)

11-18 「隅田河四季の園・植木屋安五郎報條」

木版一枚摺。仮名垣魯文述。植木屋安五郎。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-33)

〔翻刻〕

隅田河四季の園

御披露

春は木の下の青葉にかくれ閑屋の里を打越へて。夏を知らずする郭公は。いざ言問んにやよるべし。されば豆腐屋酒やの行道。筑波根の遠く隔ど。月雪花のみつの詠めに。繹かゝぬ古そ樂しけれとて。年比爰に隅田河。樹造りなせる何某なる者。己が構への広やか成るを。四季の園と号つゝ。今より四ツ時を違へず草木の花を庭に培。風流人の眼を喜せんと。八ツ橋かけし詠めに似たる。皐月の色の花菖蒲。彼堀切の旧きにはぢらず。徳は孤ならず地続の梅隣亭の香を伝へ。彼所の調理を御賞味の。折ふし毎に訪はれ玉へと主人に代りて希ふ 応需 仮名垣魯文述(善悪)

来ル五月五日花びらき

寺寫梅隣亭地続

蓮華寺隣

植木屋安五郎

(山本)

11-19 「三陸産物御披露・荒木屋萬之助報條」

木版一枚摺。山々亭有人述。仙台平御袴地売捌所荒木屋萬之助。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-23)

〔翻刻〕

(三陸商社元会所 海栗) 三陸産物 御披露

竹に雀は品宜と。世に唄わるゝ三陸の。五十四郡の魁首たる。仙台領の物産は。其数さへも千松嶋。千賀の塩竈枚挙も尽ねど先第一を仙台平とて。御袴地に最上なる事。磐手の森の言でもながら。這度件の袴地を。男女の帯地となれる様。嶋柄をさへ工風なせしが。締のよきは京琥珀。筑前博多も及びなく。糸目は至て重けれど。価は軽く出精し。其他紙布や信夫摺追々新規發明の。織物類を差送れど。茲に一種の名品あり。里言に海栗と呼なして。難波の芦も浜荻の。所替れば名こそ替れ。物はいわゆる奥州雲丹。味わひ都而越前の。雲丹に異事もなく。風味は夫に尚倍し。

殊更酒毒を消化能あれば。二日酔する患ひなく。酒客は必ず金花山の黄金に換て珍重し。褒に緒絶の語も絶る。酒料に無比の良品なり。是のみならず三陸の。物産都て管轄ば。よし品切の事ありとも。末の松山並越し。海には蒸氣の便あり。陸には仕立の急便ありて。神速取寄調進いたせば。安積の沼の浅からず多少の御用を冀になん

主人に代りて 山々亭有人記〇

陸前産物 仙台平御袴地売捌所 東京 村松町 荒木屋萬之助

(山本)

11-20 醤油売初御披露製造地名尽し報條

木版一枚摺。山々亭有人述。大萬屋与惣治。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-38)

〔翻刻〕

醤油売初御披露 製造地名尽し

世の中を何にたとへん飛鳥川と。昨日は三味を鶏が啼く。東の京に聴えし名見寄。去方よりの御進めに今日は老実の醤油店。原流山の直積にて。茲は主人もいちか撥。流語りのカン処一番銚子を張あげて精いつぱいの大安売。味淋遣はず鯉節入らず。ハテナと思ふ別品は。所謂野田の一本生。最初ばかりの出精は直にあきはの愛想づかし。尔れは升目の切文や。銘に身代ある事なければ。唯小見川のおみすてなく。白藤ならで遠近の。御得意方の力を憑みよし買附はありぞとも。宝珠のはなのたまには。御遣競下さるやう。園生の前のまへもつて。鹿島にあらう事触をあるじに代りて告になん

山々亭有人記〇

(丸に萬) 壺樽二付 代金三分 一 大極上醤油 一升二付壺〆三百文

同半樽 代金一分二朱 一 同極上 同 壺〆文

(丸に喜) 一樽二付 代式分一朱

同半樽 代壺分ト三百四十八文 一 同上 同 八百文

本家(亀甲萬) 別樽割 一升二付一〆六百文 同一合 百六十四文

浅草平右エ門町 石切河岸

十月朔日売初 当日亀景呈上 大萬屋与惣治

(山本)

王子名産 御茶所 浅草並木町西側ろじ口二目じるし

小川菴

来十月 明日見せひらき 当日寸景呈上候

(山本)

11-21 開店御披露掛合告條

木版一枚摺。河竹其水・梅素玄魚述。新富町 稲の谷。毎日新聞社新屋文庫蔵 370

(K-04)

〔翻刻〕

開店御披露掛合告條 河竹其水○梅素玄魚◇

○新島原の蜃気楼も。新富町の演戯場と。道具替りの昼夜の差別。所作は男女と異れど。◇歌舞妓と花廓は鳴蛤。のがれぬ中ヨなツか中。言立めかす御披露も。名題は御ぞんじ極製屋○千里の藪のほとりに近き。虎にはあらで馬道から。御得意方の威を権て。当地へ開く御菓子所。砂糖は和唐の三盆撰。◇獅子が上餡蒸物干菓子。彩る黄河の紅梅餅の麗しく。甘輝と甘味の字義にも叶はん○稲の出来秋守田の実入◇案山子の弓箭よっひいて○当り芝居の初日と共に◇楼門ならぬ開店の○門口狭しと大入を◇主人に代りて○◇ホ、敬て冀ふになん

御菓子製処

浅草北馬道出張 新富町六丁目 稲の谷

九月廿六日開店 当日僉景呈上仕候

(山本)

11-22 「善哉みせ御ひろう・小川菴報條」

木版一枚摺。梅素亭玄魚述。浅草 小川庵。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-28)

〔翻刻〕

善哉みせ御ひろう

泰平しるこ 鍋ざうに みやく団子 御口取菓子品々

往昔は花の並木町に。今は軒並食類渡世。別てしるこの店多き。中にも味の佳あしは。御客様の口合に。商内冥利と御ひいき次第。尤しるこも三種ほど。鴨ざうにの鍋仕立に。一寸一杯お酎も附たり。御口取の甘味を専ら。両手に花の並木町。浅草寺の御下向に。先おこゝろみに御来駕被下様偏二願ふ主人に代りて 梅素亭記◇
御徳用向せん茶下直成差上候

浅草並木町西側ろじ口二目じるし

小川菴

来十月 明日見せひらき 当日寸景呈上候

(山本)

11-23 「茶店見世開披露・ひしや遊助報條」

木版一枚摺。三遊亭円朝述。浅草 ひしや遊助。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-17)

〔翻刻〕

茶店見世開披露

廬同が七碗は唐人の眼さまし草となり吾朝の明恵上人は梅尾に口切をなしてより宇治の馬場氏は名葉を摘て山吹きの黄金と替へ自閣の新茶は隠居の内職なれど茶祖父婆と二人くらは楽に暮され是も申ば片業元より多分の利を食ずたゞ茶品に撰をつくし香氣は品より高けれど御下直処を旨と致ば中は山茶と噂もあらんが見世の出ばなは骨折一斤袋角袋御みやけものには箱入の色香もふかき娘さん連鬼も七十八日御茶祀日には観世音へ御参詣の御帰道一寸目に付く◇の暖簾雷神門から半丁程元来酒は不用ば右側せまき新見世開思付僉景を差上ますれば其当日より御ひいきの跡を挽茶の粉になる程ちやちやむちやくちやに御貫を遊助に代りて願ふものは 三遊亭円朝述 并少々

九月 浅草なみ木 ひしや遊助

(山本)

11-24 「告條・氷月庵鶴屋彦七」

木版一枚摺。三遊亭円朝述、一蕙齋芳幾画、東屋理中書。浅草 氷月庵鶴屋彦七。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-20)

〔翻刻〕

よし幾筆

石焼どうふ椀盛附 御老人前 三匁 外二有合御着いろいろ
告條
眼に青葉奥山に啼郭公は。自由自在に聞ながら酒も豆腐も事欠ぬ。浅草寺の境内に

年頃老舗し水月亭の跡を請継家号さへ。其儘夫と燕子花。二度開く二番咲も。先代に劣らぬ色艶は。銭瓶池の泥水と。同じ濁りと夕栄や。花の街に御恵受し。鶴彦と云燈印を。知己に譲りて何かなと。思ふ折柄御進受。唱へはおなじ茶屋家業。煮たり焼たり割烹に。咸熟せしを人撰し。劇場帰りや朝帰りの。人力車より走りなる。松魚をはじめ洗ひ魚。昨夜機嫌の朝直し。湯どうふ代り文茶屋の平内ならぬ石焼も。御慮外ながら自負自賛。卯の花汁も時に遇ふ。店は裕の移転唯御手軽を専一に利も短夜の明安く。開店せる当日より。御遊興戻りの迎ひ酒。御昼寝かたがた御運びある様。主人に代りてねがふになん

三遊亭円朝記

東屋理中書〈中〉

浅草辨天山 水月庵 鶴屋彦七

四月明日開亭 当日龜景呈上仕候

(山本)

【参考出陳】〔西洋御料理・千里軒報條〕

木版一枚摺。明治期。東京 千里軒。毎日新聞社新屋文庫蔵 370 (K-6)

牛肉割烹で著名となつた数寄屋千里軒の開店報條。

〔翻刻〕

AN EATING HOUSE 各国渡産物 自生国産物 数品

西洋御料理 一ノ席 金六百疋 二ノ席 金三百疋 三ノ席 金百五十疋

但一ノ席定価ノ外以上モ出来 出前ノ義ハ前日ヨリ被仰付度候

口情

造化の花盛りて方今開化の時勢に及び。人に益ある西洋の食品。佳味調進の家室を設け。器械の調度に献立の各種。一寸御茶も一通り。都て御意に叶やう。鮮物を撰びて価は廉に記載申さば各物の。筵開る当日より地名に呼。数寄屋川岸の透もなく。彼の食台に御坐あるやう。千里の軒を各国まで。善き御高評を謹で冀ふ

東京数寄屋川岸

来ル九月六日より

千里軒

④ 開化期メディアにみる事件と新聞・報道・戯作・演劇

小新聞と呼ばれる大衆紙では、創刊もない時期から三面記事的事件を潤色し報道していた。市井の些細な事件を報ずるその姿勢は人々に受け入れられ、急速に部数を伸ばしていく。これに着目した錦絵の版元や本屋たちが、情報を提供しつつ絵も鑑賞できる娯楽性を兼ね備えた錦絵新聞などを売り出していく。その一方で明治八年六月二十八日に布告された讒謗律や新聞紙條約などの条例の与えた衝撃は大きい。報道と規制のせめぎ合う諸相は、今日にも通じるものがある。

11-25 かなよみ

錦絵大判三枚組。明治十二年(一八七九)三月三日御届。久保田彦作記、梅堂国政画。東京 辻岡文助版。毎日新聞社新屋文庫蔵 210 (G-12)

魯文が社長をつとめていた小新聞『かなよみ』八九九号(明治十二年二月二十五日発行)に掲載された記事をもとに、華族久留島家の騒動を描いた錦絵。久保田彦作による填詞「新聞第八百九十九号久留島家騒動の顛末」では、新聞記事にはない毒婦お豊を際立たせている。なお、斎藤昌三によれば『現代筆禍文献大年表』昭和七年十一月刊、粹古堂書店)、本錦絵は発禁扱いとなったという。

〔翻刻〕

新聞第八百九十九号久留島家騒動の顛末

時に明治十二年二月二十三日午後十一時過芝通り新町十四番地華族従五位久留島通靖君が平民吉浜文之助の為に横死を遂られたるは諸説紛々として其実を得難し然れども近隣の風聞によれば此文之助は同君が兼て愛せられし者にて父武助なる者は既に同地の差配を勤め文之助は生頗る実直にして能通靖君の為に仕ふる忠を以てするに先年雇入られたる妾冬本お豊は其出所も賤しく其始め鶴賀の一諷に辛くも三筋の糸に世を営なみしが一夕通靖君におもはれ終に妾となり枕席を共にして毒舌妻君の怨を訴へ同衾の期を待て家令が私を讒し之が為に一家親睦せず幾程もなく離縁となり家従尽く廃せらる後台義明を家扶とし内外の家政おとよが威権に帰す彼文之助

(山本)

これを深く憂ひ終に此挙動に至り通靖君おとよ義明を殺害し車夫新吉其他に傷を負せ自ら銃死す嗚呼聖叛の高きも一朝毒婦が鶯舌に迷はされ竹芝浦に風立て終に血蹟を新聞紙上に止むといふ 久保田彦作記

(山本)

【パネル】「大珍事く……」(『かなよみ』第八九九号)

明治十二年(一八七九)二月二十五日発行

11-26 おおかわばたはごころし はないおうめ りやくでん
大川端箱夫殺 花井阿梅の略 伝

錦絵大判三枚組。明治二十一年(一八八八)一月二十日出版。豊原国周画、彫弥六。東京 福田熊次郎(具足屋)版。毎日新聞社新屋文庫蔵 213 (G-15・16・17)

明治二十年六月九日夜、日本橋浜町河岸で、待合茶屋酔月楼の女将花井お梅が、元箱屋で雇人の峰吉を刺し殺した一件ならびに裁判の顛末を描く。「東京絵入新聞抜萃」とある活本文と、国周描く大川端箱屋殺しの錦絵とが組み合わされ珍しい。『東京絵入新聞』では、お梅の事件を「梅雨衣酔月情話」と題し、明治二十年六月二十五日より連載開始し、七月二十九日に第三拾駒で中断。これは「誹譏の法律に触れむより寧ろ判決の後詳細明瞭その事実全き局を結ぶべし」とし、新聞紙条例第三十三條違反を恐れたのであった。のち、十一月十九日より二十五日まで五回に渉り「花井お梅の公判」と題して同紙に公判傍聴筆記を掲載している。活本文に「東京絵入新聞抜萃」とあるため、「梅雨衣酔月情話」や公判傍聴筆記、裁判をめぐる後日報道などを継ぎ合わせ再構成したものと見まがうが、実際には、公判時の記録内容に大差ない。

本事件は、当時かなり評判であったらしく、様々な媒体が伝えたが、その一つ。

* * *

参考出品として、国文学研究資料館その他が所蔵する花井お梅関連のものは以下の通り。

(山本)

【パネル】「梅雨衣酔月情話」第拾貳齣(『東京絵入新聞』第三六二八号、第三面)

明治二十年(一八八七)七月八日発行

【パネル】「花井お梅の公判」(『東京絵入新聞』第三七四〇号、第二面)

明治二十年(一八八七)十一月十九日発行

11-27 きんせいじんぶつし やまと新聞附録第十一 「花井お梅」

大判一枚。明治二十年(一八八七)八月二十日発行。『やまと新聞』第二六三号附録。大蘇芳年画。東京 やまと新聞社。国文学研究資料館蔵 ㊦ 3-128

芳年の近世人物誌シリーズは、『やまと新聞』附録として月一回のペースで発行されている。この「花井お梅」は、公判開始以前の新聞附録であり、まだ事実関係がはっきりしていないためか、事件の原因についても二説の風聞を併記している点に特色がある。

【翻刻】

近世人物誌やまと新聞附録 第十一

今ハ酔月の女房お梅故は柳橋では小秀新橋では秀吉とて三筋の糸に総りを掛け三弾の何でも宜と気随気まぐれで鳴らした果五月の闇の暗き夜に以前ハ内箱今ハ食客の峯吉を殺せし事ハ普く人の知る所ながら彼を殺せしといふ原因に二様あり一は峯吉が平生よりお梅に懸想し言寄ることも数度なりしが流石に面恥かゝするも気の毒とて風の柳に受居りしを或る夜兇器をもつて情欲を遂んと迫りしより止を得ず之を切害せしといふにあり一ハ世にも人にも包むべき一大事を峯吉に洩せしに彼の同意をせざるより事の爰に及びしともいふ二者何れが是なるか公判の上ならでハ知るによしなし唯お梅は是迄も情夫の自己につれなかりしを憤り之を害さんと威したる事二度に及びされバ此度の峯吉殺しも想ふに種々入込たる事情もあらんか兎にかく凄き婦人なりかし

(山本)

11-28 はないおうめすいげつきばん
花井於梅酔月奇聞

活版上下二冊。明治二十年(一八八七)十二月御届。東京 栄泉堂(初版)。国文学研

『東京絵入新聞』掲載記事「梅雨衣酔月情話」ならびに同紙上の公判傍聴筆記「花井お梅の公判」を、挿絵もろともそっくり拝借して、明治二十年十二月御届で栄泉堂より刊行され、版を重ねた。上下二冊を和綴じにしたものやボール表紙本など数種が確認されている。表紙絵と口絵が異なるものもあるが、他はすべて共通。

(山本)

11-29 演劇脚本百番の内 月梅薫朧夜 上巻

河竹黙阿弥作。明治二十一年五月二十一日出版。正価二十銭。著作者吉村新七。発行者吉村いと、印刷者広岡幸助、発兌所歌舞伎新報社、売捌所綱嶋亀吉・栄泉社商店。禾口庵文庫蔵

『歌舞伎新報』「筋書」欄に、明治二十一年四月十五日(第八八八号)から五月二十日(第九〇一号)まで連載された河竹黙阿弥作の筋書を単行本化したもの。表紙見返しに「版權興行権所有」印が捺されている。

『歌舞伎新報』「雑報」欄(明治二十一年五月三十日・六月一日・六月六日)に「中村座略評」として、六二連・梅素薫らの高評が掲載されたが、その評中に次のような指摘がある。

○月梅薫朧夜(略)該座は今回の狂言は先頃中より市中大評判の箱屋殺しにて狂言ですれば(菊五郎)物だと世間の高評より未裁判中にも抱はらず(寺島)に当込で脚色しが何分にも判決にも成ぬ物は狂言に取脚色事相成ずとの事にて許可にならず一時は有来りの狂言に差換て興行すると迄立消に成しが彼是してゐる内に裁判落着に成しより再度もえ出し

公判の申し渡し以前に事件を上演することが禁じられていたため、「月梅薫朧夜」は正本の完成が報じられてからも、度重なる延期のあげくに一時は狂言の差し替えさえ噂された。「月梅薫朧夜」は明治二十一年四月二十八日、中村座で漸く初日を迎えたのである。『歌舞伎新報』「雑報」欄よりうかがうに、小道具の出入は、「音羽屋の好みで彼品は葎町に限る」との注文であったとか(四月二十一日記事)、「飽迄も真を写さん」ために「酔月」に七度も出掛けたとか(五月十日記事)、「今度のお梅の

狂言などは都て当時の事を即座に演るの故合方鳴物も皆新奇を競ひ長唄道になきもの」(五月二十六日記事)であったという。

その筋書本の発行者の吉村いととは黙阿弥の長女。上巻出版日時については、五月二十日付『歌舞伎新報』「雑報」に「河竹正本狂言尽新古演劇百番の内(大杯觴酒戦強者)此度板権興行権の許可を得て本日より売出し(月梅薫朧夜)は本月末に出版」とあり、興行の遅延と併せて出版も遅れたのであろう。ちなみに下巻の発行は七月二十一日、定価二十銭であった。

(山本)

七 その他

12 錦絵・自筆資料等

12-1 近世水滸傳 競力富五郎 中村芝翫

大判錦絵。改印「西六改」(文久元年(一八六一)六月)。三代目歌川豊国画(落款「豊国画」)、略伝史仮名垣魯文暗記、彫師松島政吉(「松嶋彫政」)。江戸 伊勢屋兼吉。役者は、四代目中村芝翫。国文学研究資料館蔵 ㊦ 3-989

幕末の利根川流域における博徒の抗争を題材とする講釈『天保水滸伝』(嘉永三年(一八五〇)宝井琴凌)では、元相撲取りの勢力富五郎は、笹川繁蔵の一の子分である。飯岡方に親分繁蔵を闇討ちされ、笹川一家の二代目として戦う。しかし関八州と繋がる飯岡方によって、金比羅山へ追い詰められ、ついには鉄砲で自殺する。官の捕り手と戦う侠客としてヒーロー化され、中国の『水滸伝』に擬えられた。浮世絵『近世水滸伝』の揃いものには、『天保水滸伝』中の人物が多く描かれている。似顔で描かれている四代目中村芝翫は、当時飛ぶ鳥を落とす勢いの歌舞伎役者であり、派手な演技が勢力富五郎役にぴったりだと見立てられたもの。この絵の作られた六年後に、歌舞伎『群清瀧鼻眞勢力』(河竹黙阿弥作)で、実際に芝翫は勢力役(神

力民五郎)を演じている。

(高橋)

12-2 近世水滸傳 篠崎の政吉 坂東彦三郎

大判錦絵。改印「戊七改」(文久二年(一八六二)七月)。三代目歌川豊国画(落款「喜翁豊国画」)、略伝史仮名垣魯文暗記、彫師小泉彫兼か(「彫工小金」)。江戸 伊勢屋兼吉。役者は、五代目坂東彦三郎。国文学研究資料館蔵 ㊦ 3-98-14

講釈『天保水滸伝』では、飯岡助五郎の一の子分、洲の崎政吉。飯岡一家が笹川

へ殴り込みをかけた天保一五年八月、通称「大利根河原の決闘」で、政吉は槍に刺されて瀕死の重傷を負い、帰りの船中にて死ぬ。故に魯文の略伝史に書かれるように、繁蔵横死の後に、勢力富五郎と戦うという場面はない。洲の崎政吉は、飯岡方が八州廻りの手先となったために悪く書かれがちの中で、唯一男気のある侠客として描かれる。天保一三年に、笹川繁蔵が花会(資金集めのための、親分ばかりの博打)を開いた時に、助五郎は若い繁蔵を軽んじて、名代に政吉を差し向けた。そこで政吉が国定忠治に面罵されたことが、繁蔵・助五郎の溝を決定的にした一つの原因とされる。似顔で描かれている五代目彦三郎は、当時中村芝翫と競い合う人気役者である。笹川一の子分勢力富五郎に見立てられた芝翫に対して、それに敵する飯岡一の子分政吉に見立てて描いたもの。

(高橋)

12-3 近世水滸傳 平手壹岐 市川小団次

大判錦絵。改印「戊七改」(文久二年(一八六二)七月)。三代目歌川豊国画(落款「喜翁豊国画」)、略伝史仮名垣魯文暗記、彫師未詳。江戸 伊勢屋兼吉。役者は、四代目市川小団次。国文学研究資料館蔵 ㊦ 3-98-13

講釈『天保水滸伝』では、北辰一刀流の達人平手造酒(平田深喜とも)。千葉周作

門下であったが、深酒で不身持ちのため、破門される。肺病を病み、笹川繁蔵に客分として迎えられ、剣道指南をしつつ、医師菅谷櫻居宅近くで療養していた。天保一五年八月の飯岡一家の殴り込みの際、繁蔵が襲撃されたとの急を聞いて駆けつけ、

繁蔵のそばで防戦し、多勢に囲まれ全身一カ所を斬られて死ぬ。魯文の略伝史には、諸国武者修行の折、高島剛太夫という侍と料理屋で争うとあるが、浪曲等では、既に繁蔵の用心棒になっていた造酒が、料理屋で助五郎の用心棒である剛太夫らに勝ち、大勢に斬りかかれところを富五郎に救われる。四代目市川小団次は、市村座の火縄売りの子として生まれたが、この当時は座頭も勤めるほどの人気と実力を持ち、特に下層階級の人物を写すことに優れていた。動作の敏捷な役者であったため、造酒役に見立てられたもの。剣豪にしてはいささか野卑な描かれ方は、小団次の芸風に引かれてのことか。

(高橋)

12-4 近世水滸傳 清瀧の佐七 市村羽左衛門

大判錦絵。改印「戊七改」(文久二年(一八六二)七月)。三代目歌川豊国画(落款「喜翁豊国画」)、略伝史仮名垣魯文暗記、彫師小泉彫兼か(「彫工小金」)。江戸 伊勢屋兼吉。役者は、一三代目市村羽左衛門。国文学研究資料館蔵 ㊦ 3-98-12

講釈『天保水滸伝』では、笹川繁蔵の子分、清瀧の佐七。下総銚子高野芝の醤油屋(造り酒屋とも)で奉公中に、女中のお常と通じ、主人の知るところとなって、二人は駆け落ちをする。上総芝山にいるのをつきとめられて、女は連れ戻され、佐吉は飯岡助五郎から手切れ金を渡されるが思い切れず、繁蔵に相談した。繁蔵は佐吉にお常のありかを捜し出させ、連れ戻して、お常の両親を口説いて佐吉と夫婦にしてやった。そのため、佐吉は繁蔵の無二の子分となった。繁蔵横死の後、勢力富五郎が笹川一家の二代目となったのが気に入らず、独自に助五郎を何度もねらったが、かえって助五郎の十手にかかって捕らえられ、嘉永二年(一八四九)五月に、江戸小塚原で獄門に処せられた。佐吉は『天保水滸伝』では珍しく恋愛譚と共に登場し、男っぷりも良く気っぷもよいという設定なので、市村羽左衛門(後の五代目尾上菊五郎)に見立てて描かれた。

(高橋)

12-5 英名二十八衆句 西門屋啓十郎 腸に秋かしみたる熟柿かな 支考

大判錦絵。改印「卯五改」(慶応三年(一八六七)五月)。一恵齋芳幾画(落款「一恵

齋芳幾画「(芳桐)」、愚山人仮名垣魯文題、彫師清水柳三(「柳三刀」)。江戸 佐野屋富五郎。国文学研究資料館蔵 T 3-75-24

合巻『新編金瓶梅』(曲亭馬琴作・歌川国貞画)第九集(天保一三年(一八四二)刊)で、西門屋啓十郎の妾お蓮は、啓十郎留守中に秘事松と密通し、露頭を恐れて啓十郎に毒酒を飲ませる。そのため、醜貌の廃人になった啓十郎は、西門屋が焼亡したために落ちぶれて、非人小屋に住んでいた。たまたま小屋に来たお蓮と、啓十郎はよりを戻す。そして啓十郎の瘡に感染したお蓮も醜貌となり、二人で瓜を盗んで捕まり、簀巻きにして河に沈められそうになった時、通りかかった尼陸水に救われる。そして陸水尼の薬と念力により、病は癒える。ところが二人は尼の金を盗もうと庵室に忍び込み、陸水尼と小坊主白水を殺す。立ち去ろうとする二人の前に、陸水尼と白水が現れ、自分は実は啓十郎の生母であるが、入水して人魚となって仙術を得たこと、白水は啓十郎の子であることを教える。啓十郎とお蓮は陸水尼に命じられ、出家して巡礼の旅に出るが、大金を手にしたことから、再びもとの極悪非道に戻り、ついにはお蓮の最初の夫武太郎(お蓮と啓十郎が殺害)の弟武二郎に敵討ちされる。合巻『新編金瓶梅』は、中国明代の小説『金瓶梅』の翻案であるが、この部分は『金瓶梅』にはなく、創作部分と思われる。

(高橋)

12-6 英名二十八衆句 姉妃の於百 何虫の這ふてや露の際つきぬ 曲翠
大判錦絵。改印「寅十一改」(慶応二年(一八六六)十一月)。月岡芳年(落款「一魁齋芳年画」(芳桐)」、前野狐庵主仮名垣魯文記、彫師清水柳三(「柳三刀」)。江戸 佐野屋富五郎。国文学研究資料館蔵 T 3-75-10

実録『増補秋田蔭』は、秋田藩佐竹家のお家騒動と、毒婦姉妃のお百と、盗賊赤峰重右衛門などを絡ませた内容である。佐竹家のお家騒動は、宝暦七年(一七五七)に継嗣問題で逆意ありと斬罪になった那河忠左衛門(采女)のことで、『秋田杉直物語』によると、その妻お百は聡明で美人、芸能も良くして、京の私娼から鴻池善右衛門の妾を皮切りに、四人ほどの男の妻妾となったとされる。『増補秋田蔭』では、佐竹の太守義澄の命で海坊主を斬った桑名屋徳蔵に祟りをなすために、お百に海坊

主の怪が乗り移り、最初の夫桑名屋徳兵衛(徳蔵の子)を破滅させて砂村十万坪で刺殺。それ以後もお百は、何人も人に殺させたり殺人するなど、毒婦としての性格を拡大させている。そのため殷の紂王の後、姉妃の名を冠せられ、講釈になった。歌舞伎化は慶応三年初演『善悪両面児手柏』で、本作品の後である。

(高橋)

12-7 「稿本」老菜子を鼓舞するの記
縦二十五字朱野原稿箋(0.9×1.4cm 柘目)二枚、毛筆二十三行。執筆年時不明(明治中期頃か)。仮名垣魯文自筆草稿。国文学研究資料館蔵 T 1-35-1

本資料は、表装を予定してか旧蔵者により余白が裁断されているものの、その本文内容から、最終行の詠歌を結語とした一篇の随感とみられる。魯文自らが朱筆で校正した跡があり、総ルビを施していることから新聞雑誌への寄稿を意図した文章と思われるが、初出紙誌・執筆年時ともに不詳。標題の「老菜子」は、隱逸の賢者として知られる中国春秋時代楚國の人。齢七十にして五彩の衣を身にまとい嬰兒の戯れをなし、以て親を楽しませ、老いをも忘れさせたという。老菜子を鼓舞する一文をしたためた魯文は、明治二十三年(一八九〇)に文壇を引退した後、古稀を待たずして明治二十七年十一月八日逝去、享年六十五歳であった。晩年を不遇とする見地が一般的であるが、市井の人としての魯文の老年は果たしてそうであったらうか。その一端を窺う縁としても、興味深い資料といえる。

面影の変らばとても年浪のよせては元に帰らざらめや
加齢に伴い面影が変わったとしても苦慮するには及ばない、浦波が寄せては必ず返すように、寄る年波も元に戻せないものではない。末尾の一首は、老年期にさしかかった魯文の、我と我が身への「鼓舞」ではなかったか。例えば、「陣張筵破り」(腎張り筵破り——精力旺盛な老人が女色に耽ること)と誹られようとも、「桃灯で餅を搗」(提灯で餅を搗く——萎びた老人の房事を嘲り言うことば)とは揶揄される可からずといった色事への訓戒。さらには、孔子の「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」を踏まえて、「且たに校堂に登り、夕べに命の卒業に至るといふ共、勉励寸間懈怠らざらんを」と述懐される学事に至るまで、「老菜子を鼓舞する」という標題の視座は、老楽の在り方をいかに求めるかといった趣旨となり全篇を通して語られてい

る。明治二十年代の魯文筆と推定。

〔翻刻〕

○老萊子を鼓舞するの記

仮名垣魯文

誠なき世と。きて栖山にまた鳥の名のうそも在り生涯紅塵の中に在深山幽谷頼む可からず多見蔵は旬の齢ひを保てども老萊子の舞跳ますく、壯なり三十振袖新造は芳原に絶たるも四十嶋田は未だ猫社会を脱せずおまへ百まで妾や九十熊手掃棄に對して嶋台の上に立とも奈何婚禮の花婿嫁に劣らんやと茶飲朋友の色氣を去らぬは其氣力最頼もし元山の前にとりえ（仮名違ひ誤免）はなければども後にすこしかみが在まさば円頂坊主となる事勿れ散髪の文明頭香油香水用ひて可也眼霞まば目鏡あり齒が抜たらば入齒せよ富て貧きを忘るゝなければ老樂の隠居欲するあらん箕山の月は庭にても望むべし五湖の水は市井に潭へ紫陌に隣らんとする時公園に遊ぶすべし大隱の市は度外に棄小隱の陵藪は千里に避昔を忍ぶ編笠の俄隱者に反して当世風の帽子を頂き公然として世に立巍然として壯年に併立し多淫ならざれば寒夜肉蒲団に座するも憚ることなけん国に事あらば鬢髻を墨すを要し無事の宴會太平を唄も可ならん譬へ陣張蕙破りの誹りを得るも必ずや桃灯で餅を搗勿れ度量過さゝれば冷水も飲に害なし老の学問習字六旬旦に校堂に登り夕べに命の卒業に至るといふ共勉勵寸間懈怠らざらんを

（青田）

12-8 〔自画賛・恵比寿像〕

111.0 × 34.0cm 掛軸一幅。紙本着色。年代不明（落款「かながきろぶん」）。仮名垣魯文自画賛。禾口庵文庫蔵

〔翻刻〕

笑ふにも気兼や娘の恵比寿講

魯鈍翁自画賛 〔印〕

12-9 珍猫百覽会開筵

23.2 × 30.0cm 一枚。楮紙。国文学研究資料館蔵 19-58

本資料は、明治十一年（一八七八）七月二十一日に魯文の「猫塚建立供養の志願」〔『かなよみ』第七一四号「珍猫百覽会出品記事」〕によって開催された「珍猫百覽会」告知の引札。

同会は東西国の中村楼において「江湖愛顧の諸君。過日より陸続たる六百余种」（同第七二四号「珍猫百覽会 并猫塚供養開筵本日の景況」）の古今東西の猫に関する様々な品物と、「本日来臨来客縦覧の人々。帳簿に止むると。其姓名を知らざる某々と。併せて二千八百余人。」（同）の人々を集めた大盛會であつた。

『かなよみ』紙上に断続的に掲載された「珍猫百覽会出品目録」（「珍猫百覽会出品目次」または「珍猫百覽会併猫塚供養寄附」とも）では、田島象二、萩原乙彦、末広鉄腸、尾上菊五郎などが出品者に名を連ね、また当日の「席上余興」の一つとして三遊亭円朝が新作「猫の草紙」を披露することが告知される（同・七二二号「珍猫百覽会の前触」。会の前日号）など、筆耕舌耕の著名人が多く参加していたことが盛會の一因であつたろう。但し、円朝の新作は、当日円朝が風邪を引いていたため披露されなかつたようだ（前出の七二四号の記事）。

当日の模様や主な出品物・出品者については、記事全てが会の事後報告である『魯文珍報』第二一号に詳しい。また、この会の収益を基に建立されたと思われる記念碑「猫塚之碑」が台東区谷中の永久寺に現存している。

〔翻刻〕

珍猫百覽会開筵 書画清楽祝辞演説

猫塚供養碑 碑銘 成島柳北先生

浄書 伊藤桂洲先生

猫容石工 木村藤兵衛 宮 龜年

出品各種類 金銀銅鉄石木竹土陶絹紙新古

書画幅油絵写真銅版石版都て

猫に附属する物品古鈴鮑貝等

七月二十一日不論風雨於東西國中

村楼陳列開筵候二付江湖好事

の諸君子縦覧あらんを冀望す

補助 東京各新聞編輯者

会主 猫々道人 仮名垣魯文

但し本日出品の奇品は来る二十日迄

に出雲町仮名読新聞社へ御届

被下度即證書引換大切ニ御預

申置候也

(柳)

13 デジタル展示

13-1 「スライドショー」西洋道中膝栗毛版下草稿

修正作業が施された版下草稿の挿画から、デジタル処理にて修正分を取り除き、元の挿画の復元を試みた。分離した両者の意匠を、スライドショーにて比較。

13-2 「スライドショー＋朗読」クライマックス「高橋阿伝夜刃譚」名場面 附・幕末明治、伝説の毒婦たち

「吉蔵殺し・捕縛・裁判・処刑・解剖」の場面を弁士の語り口調で朗読する。併せて、原本挿絵とテキストが同時に閲覧できるシステム。

13-3 「スライドショー」春色柳桜筋

毎日新聞社の御許可を得て当館が撮影した高精細デジタル画像を用い、全丁をデジタル展示する。

(13-1～3コンテンツ作成・北村、13-2朗読・間城

13-1および「特製はがき」画像処理・柳)

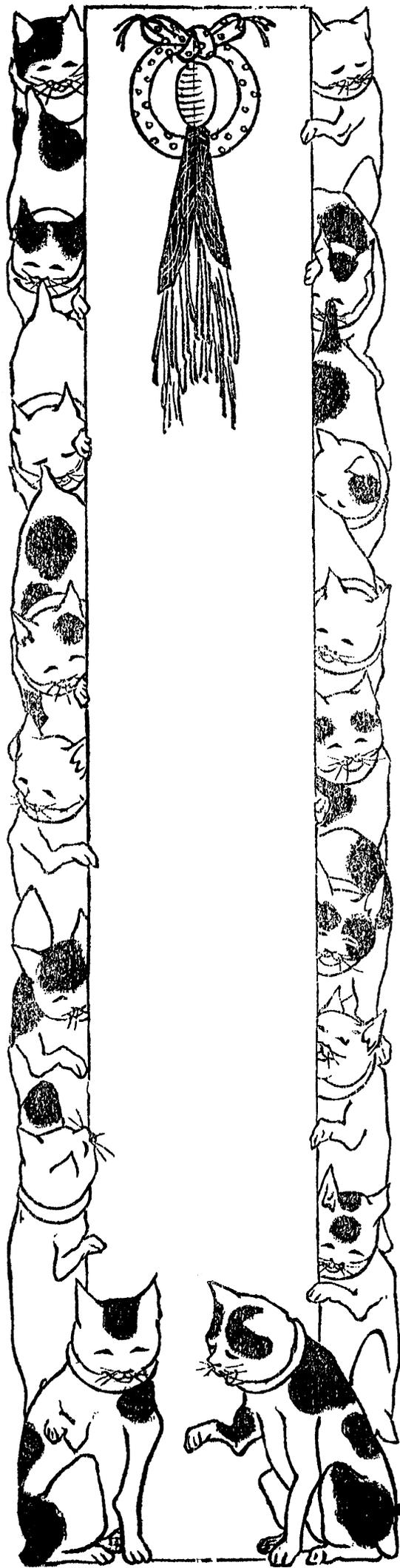
特製はがき 好評発売中

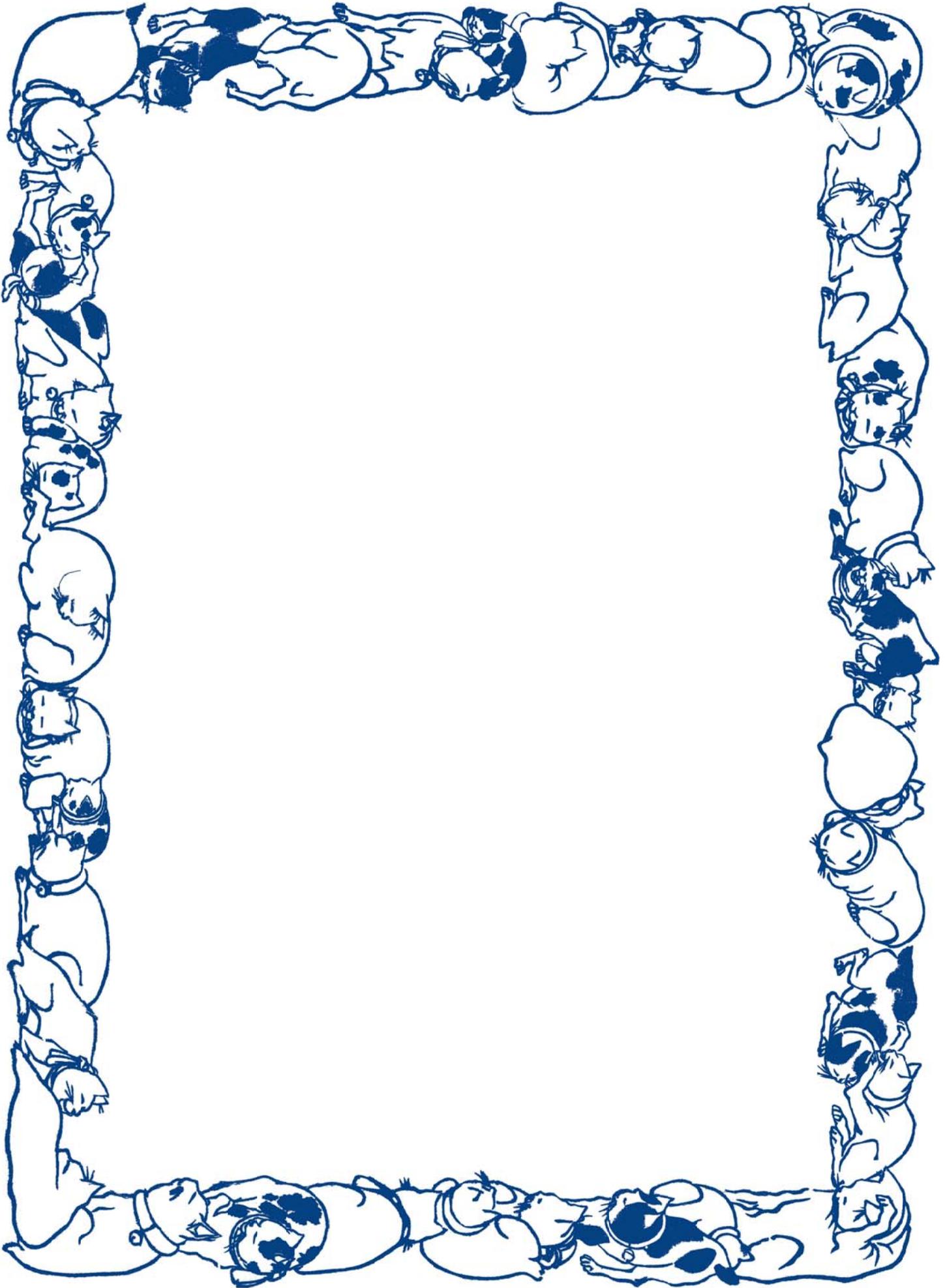
1セット5枚入り

¥250 (税込)

◇ セット内容 ◇

- ① 『高橋阿伝夜刃譚』初編上巻表紙 (吉蔵に向かって包丁をかざすお伝)
- ② 『格蘭氏伝倭文賞』三編中巻表紙 (グラント前アメリカ大統領歓迎で星条旗をかたどった着物で踊る新橋芸者達)
- ③ 「珍猫百覧会開筵」引札より、多数の猫で構成された枠部分
- ④ 『金鈴善悪譚』初編袋より、踊り猫2体
- ⑤ 『高橋阿伝夜刃譚』二編中巻冒頭の魯文口上より、猫にやつした魯文像 (顔が「魯」字をモチーフにしている)





© 開化期戯作の社会史研究

図書	OPAC	ユ9:58	珍猫百覽會開筵	12-9
図書	OPAC	ヤ9:433	通俗 究理話, 前編2巻 / 仮名垣魯文作 ; 猩々暁齋画 (萬笈閣)	
図書	OPAC	ハ4:281	通俗那波烈翁傳 / 長沼熊太郎翻訳 ; 神奈垣魯文和解 (齋藤実堯蔵版)	6-4
和古書	古典籍	ナ4:702	摘要漢楚軍談 / 鈍亭魯文[著]	
和古書	古典籍	ナ4:748	摘要漢楚軍談 / 鈍亭魯文標記 ([新庄堂])	
和古書	古典籍	ナ4:343	天下茶屋復仇美談 (品川屋久助)	
和古書	古典籍	ナ4:735	東海道中栗毛の弥次馬 / 仮名垣魯文著	5-1
雑誌	OPAC	ト00093	東京絵入新聞 (東京絵入新聞社)	
和古書	古典籍	ナ4:583	道中膝栗毛 (甘泉堂和泉屋市兵衛)	
和古書	古典籍	ユ2:60	虎見世物引札 / 仮名垣魯文演述 (菊屋市兵衛)	
図書	OPAC	ハ4:109	鳥追阿松海上新話 / 久保田彦作著 ; 仮名垣魯文閱 (大倉孫兵衛)	
図書	OPAC	ハ4:18	鳥追阿松海上新話 / 久保田彦作著 ; 仮名垣魯文閱 (大倉孫兵衛)	9-1
和古書	古典籍	ナ4:711	名聞面赤本 / 魯文作 ; 英泉画	1-1
和古書	古典籍	ナ4:679	浪花男団七黒兵衛 / 鈍亭魯文序	2-2
和古書	古典籍	ナ4:699	成田山靈驗記 / 鈍亭魯文謹述 (伊勢屋忠兵衛板)	
和古書	古典籍	ナ4:734	成田山道中膝栗毛 / 仮名垣魯文著 (新庄堂)	5-3
図書	OPAC	ヤ7:73	新瀉花かゞみ / 金子錦二著 (木村文三郎)	
図書	OPAC	ナ4:760	日蓮上人御一代記 / 鈍亭魯文謹訳 ; 一蘭齋國綱拝画 (吉田慶之介版)	
和古書	古典籍	ナ4:575	拔翠三国誌 / 鈍亭魯文序	
和古書	古典籍	ナ4:662	拔翠三国誌 (糸屋庄兵衛)	
図書	OPAC	ハ4:243	鋸山玉石異訓 / 猫々道人著 ; 岡丈紀編 (勸文堂)	
和古書	古典籍	ナ4:703	花軍嶋物語 / 鶴亭秀賀閱 ; 一梅齋芳春画	
和古書	古典籍	ナ4:394	花裘狐草紙 (小林鍊治郎)	
和古書	古典籍	ヤ7:76	萬國人物圖繪 / 仮名垣魯文作 ; 一猛齋芳虎画 (山田屋庄次郎板)	6-1
和古書	古典籍	ユ3:125	萬國名勝盡競之内 大清南京府市坊 / 芳虎画 ; 仮名垣魯文訳誌	
和古書	古典籍	ナ4:696	彦山権現誓仇討 / 十返舎一九鈔録 ; 鈍亭魯文校合 ; 国政画 (品川屋杉浦朝治郎)	
図書	OPAC	ハ4:204	冬兒立闇鴟 / 京文舎文京著 ; 仮名垣魯文閱 ; 守川周重画 ([青盛堂])	
図書	OPAC	ハ4:282	冬兒立闇鴟 / 京文舎文京著 ; 仮名垣魯文閱 ; 守川周重画 ([青盛堂])	
図書	OPAC	ハ4:68	冬兒立闇鴟 / 京文舎文京著 ; 仮名垣魯文閱 ; 守川周重画 ([青盛堂])	
図書	OPAC	ハ4:127	冬楓月夕榮, 3編 / 仮名垣魯文閱 ; 彩霞園柳香著 ; 梅堂國政画 (金松堂)	
図書	OPAC	ハ4:8	冬楓月夕榮, 3編 / 仮名垣魯文閱 ; 彩霞園柳香著 ; 梅堂國政画 (金松堂)	
図書	OPAC	ハ4:162	松飾徳若譚, 5編10巻 / 仮名垣魯文編 ; 錦朝樓芳虎画 (青盛堂)	
図書	OPAC	ハ4:250	松飾徳若譚, 5編10巻 / 仮名垣魯文編 ; 錦朝樓芳虎画 (青盛堂)	4-6
図書	OPAC	ハ4:252	松飾徳若譚, 5編10巻 / 仮名垣魯文編 ; 錦朝樓芳虎画 (青盛堂)	
図書	OPAC	ハ4:49	松飾徳若譚 / 仮名垣魯文編 ; 錦朝樓芳虎画 (青盛堂)	4-6
図書	OPAC	ハ4:54	松飾徳若譚, 5編10巻 / 仮名垣魯文編 ; 錦朝樓芳虎画 (青盛堂)	
図書	OPAC	ハ4:24	松の栄千代田の神徳 / 仮名垣熊太郎録 ; 蜂須賀国明画 (錦栄堂)	4-7
図書	OPAC	ハ4:254	松の栄千代田の神徳 / 仮名垣熊太郎綴 ; 蜂須賀国明画 (錦栄堂)	
和古書	古典籍	ナ4:664	水鏡山鳥奇譚 (辻岡屋文助)	
和古書	古典籍	ナ4:681	水鏡山鳥奇譚 (金松堂辻岡文助)	
和古書	古典籍	ヤ6:278	都名所画譜 / 朝香楼芳春画 ; 仮名垣魯文序 ([河内屋藤四郎ほか])	
和古書	古典籍	ナ4:574	漢土二十四孝伝 / 鈍亭魯文序	
図書	OPAC	ハ4:185	倭国字西洋文庫 / 仮名垣魯文著 ; 錦朝樓芳虎画 (紅木堂)	
図書	OPAC	ハ4:233	倭国字西洋文庫 那勃列翁一代記	
和古書	古典籍	ナ4:690	弓張月春乃霄栄 / 楽亭西馬, 仮名垣魯文作 (若林堂)	
和古書	古典籍	ナ4:7	弓張月春迺霄栄 (文昇堂熊谷)	
図書	OPAC	ヒ4:1116	夢物語高野實傳 / 仮名垣魯文著 (翠松堂)	
和古書	古典籍	ユ3:126	歐邏巴洲之内 佛蘭西國 / 一川芳員画 ; 仮名垣魯文記	
和古書	古典籍	ナ4:660	四家怪談 / 仮名垣魯文序 (糸屋庄兵衛)	2-1
和古書	古典籍	ナ4:340	読切青砥政談	
和古書	古典籍	ナ4:704	兩國八景荏土久里戯 / 鈍亭魯文作 ; 一光齋芳盛画 (糸屋福次郎)	
図書	OPAC	ユ1:35:1	老萊子を鼓舞するの記 / 仮名垣魯文[筆]	12-7
雑誌	OPAC	ロ00028	魯文珍報	8-3

和古書	古典籍	ユ3:98:5	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ユ3:98:6	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ユ3:98:7	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ユ3:98:8	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ユ3:98:9	近世水滸伝	12-1
和古書	古典籍	ナ4:391	金鈴善悪譚 (平野屋新蔵)	
和古書	古典籍	ナ4:787	金鈴善悪譚 / 仮名垣魯文作 ; 歌川芳虎画 ([平野屋新蔵])	
和古書	古典籍	ナ4:697	楠公一代記 / 鈍亭魯文著 (品川屋久助梓)	
和古書	古典籍	ユ3:123	蜘蛛錦白縫 義婦雄波 岩井紫若	
和古書	古典籍	ユ3:123	蜘蛛錦白縫 鳥山犬千代 中村芝翫 / 國周画 ; 仮名垣魯文抄録	
図書	OPAC	ハ4:229	格蘭氏伝倭文賞	
図書	OPAC	ハ4:234	格蘭氏伝倭文章 / 仮名垣魯文著 ; 鮮齋永濯, 梅堂国政画 (金松堂辻岡屋文助)	6-5
図書	OPAC	ハ4:283	格蘭氏傳倭文賞 / 仮名垣魯文和解 (辻岡屋文助)	
和古書	古典籍	ナ4:341	栗毛弥次馬	5-1
図書	OPAC	ハ3:124	藝妓三十六佳撰 / 雑賀豊太郎編輯 (鈴木八三郎)	
図書	OPAC	ヤ9:416	現今支那事情 / 神奈垣魯文鈔輯 (和泉屋吉兵衛[ほか])	
図書	OPAC	ヤ9:434	現今支那事情 / 神奈垣魯文鈔輯 (和泉屋吉兵衛[ほか])	
図書	OPAC	ハ4:85	恋相場花王夜嵐 / 猫々同人著 ; 梅堂国政画 (金松堂)	
図書	OPAC	ハ4:12	金花胡蝶幻 / 猫々道人原稿 ; 京文舎文京綴 ; 守川周重画 (堤吉兵衛)	
和古書	古典籍	ナ4:698	国姓爺一代記 / 仮名垣魯文編 ; 一鳳齋國明画 (河内屋茂兵衛[ほか])	2-6
図書	OPAC	ヤ9:397	子實習字章 : 文明捷徑 / 神奈垣魯文和解 ; 巻菱潭書 (名山閣)	
図書	OPAC	ハ4:232	滑稽三太郎話 / [鈍亭魯文戯作] ; [雲齋國久狂画] (石島八重)	
図書	OPAC	ハ4:230	滑稽道中膝車 / 仮名垣魯戯作 (萬笈閣)	5-5
和古書	古典籍	ナ4:749	滑稽富士詣 / 仮名垣魯文戯作 ([芙蓉堂蔵梓])	5-4
和古書	古典籍	ナ4:750	滑稽富士詣 / 仮名垣魯文戯作 ([芙蓉堂蔵梓])	5-4
図書	OPAC	ユ1:35:2	[後藤昌文宛仮名垣魯文葉書] / 仮名垣魯文筆 (仮名垣魯文)	10-2
和古書	古典籍	ナ4:695	金刀比羅利勝田宮坊太郎仇討 / 仮名垣魯文撰 (松阪屋梓)	
図書	OPAC	ハ4:251	西国巡礼娘敵討 / 仮名垣魯文 (金松堂)	2-9
図書	OPAC	フ1:60	佐賀電信録 / 神奈垣魯文編輯 (名山閣)	8-1
和古書	古典籍	ナ4:683	佐世身八開伝	
和古書	古典籍	ナ4:677	佐野志賀蔵一代記 (品川屋朝治郎)	
和古書	古典籍	ナ4:678	小夜中山夜啼碑 (糸屋庄兵衛)	2-4
図書	OPAC	ヤ5:220	三則教の捷徑 / 仮名垣魯文述 ([中西源八])	7-4
和古書	古典籍	ナ4:521	白石物語	
和古書	古典籍	ナ4:733	神稻黄金笠松 / 菊亭文里編 ; 一光齋芳盛画 (吉田屋文三郎)	
和古書	古典籍	ナ4:358	粹興奇人伝 (丸屋徳蔵)	1-3
図書	OPAC	ユ9:55	粹の枝折続篇出版に付都々逸募集	10-4
図書	OPAC	ハ4:285	誠忠義臣銘々伝 / 隅田了古訳 ; 仮名垣魯文補 ; 一壽齋芳虎画 (延壽堂蔵版)	
図書	OPAC	ハ4:1	西洋道中膝栗毛 / 仮名垣魯文戯著 ; 芳幾[ほか画] (萬笈堂(椀屋喜兵衛))	1-7, 5-6
図書	OPAC	ハ4:231	西洋道中膝栗毛 / 仮名垣魯文戯著 ; 芳幾[ほか画] (萬笈堂(椀屋喜兵衛))	
図書	OPAC	ヒ4:777	西洋道中膝栗毛 / 仮名垣魯文著 (漫遊会)	5-8
図書	OPAC	ユ1:23	西洋道中膝栗毛版下草稿	5-7
図書	OPAC	ヤ9:207	世界都路 / 仮名垣魯文著 (回春樓)	7-1
和古書	古典籍	ナ4:701	雙孝美談曾我物語 / 魯文抄録	
図書	OPAC	ハ4:137	高橋阿傳夜刃譚 / 仮名垣魯文著 ; 守川周重画 (金松堂)	
図書	OPAC	ハ4:163	高橋阿傳夜刃譚 / 仮名垣魯文著 ; 守川周重画 (金松堂)	
図書	OPAC	ヒ4:1141	高橋阿傳夜刃譚	
図書	OPAC	ヒ4:1167	高橋阿伝夜刃譚 / 仮名垣魯文[著] (日吉堂梓)	
図書	OPAC	ハ4:19	高橋阿傳夜刃譚 / 仮名垣魯文著 ; 守川周重画 (金松堂)	
図書	OPAC	ユ2:81	高見山ぬしに代わりて報義告条 / 仮名垣魯文述	10-3
図書	OPAC	ハ4:253	蛸入道魚説教 / 仮名垣魯文著 (存誠閣)	
図書	OPAC	ハ4:47	蛸入道魚説教 / 仮名垣魯文著 (存誠閣)	7-5
和古書	古典籍	ナ4:667	俵藤太竜宮蜃話 (森屋治兵衛)	2-7
図書	OPAC	ヤ8:256	茶銘 興画合簡端戯叙 仮名垣魯文自筆草稿	10-1

和古書	古典籍	ㄩ3:75:11	古手屋八郎兵衛(英名二十八衆句 ; [10]) / 式魁齋芳年[画] ; 山閑人交来[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:12	稲田九蔵新助(英名二十八衆句 ; [11]) / 式魁齋芳年[画] ; 可史山人[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:13	直助権兵衛(英名二十八衆句 ; [12]) / 式魁齋芳年[画] ; 可志好以[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:14	笠森於仙(英名二十八衆句 ; [13]) / 式魁齋芳年[画] ; 可志好以[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:15	由留木素玄(英名二十八衆句 ; [14]) / 式魁齋芳年[画] ; 瀬川如臯[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:16	十木傳七(英名二十八衆句 ; [15]) / 式惠齋芳幾[画] ; 一葉舎主人[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:17	遠城治左エ門(英名二十八衆句 ; [16]) / 式惠齋芳幾[画] ; 瀬川如臯[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:18	鬼神於松(英名二十八衆句 ; [17]) / 式惠齋芳幾[画] ; 松阿弥交来[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:19	げいしゃ美代吉(英名二十八衆句 ; [18]) / 式惠齋芳幾[画] ; 甘々坊[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:2	勝間源五兵衛(英名二十八衆句 ; [1]) / 式魁齋芳年[画] ; 河竹其水[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:20	佐野治郎左エ門(英名二十八衆句 ; [19]) / 式惠齋芳幾[画] ; 瀬川如臯[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:21	呂井長菴(英名二十八衆句 ; [20]) / 式惠齋芳幾[画] ; 河竹其水[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:22	天日坊法策(英名二十八衆句 ; [21]) / 式惠齋芳幾[画] ; 岳亭定岡[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:23	國澤周治(英名二十八衆句 ; [22]) / 式惠齋芳幾[画] ; 一葉舎甘阿[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:24	西門屋啓十郎(英名二十八衆句 ; [23]) / 式惠齋芳幾[画] ; 仮名垣魯文[略伝] (錦盛堂)	12-5
和古書	古典籍	ㄩ3:75:25	春藤治郎左エ門(英名二十八衆句 ; [24]) / 式惠齋芳幾[画] ; 爲永春水[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:26	鳥居又助(英名二十八衆句 ; [25]) / 式惠齋芳幾[画] ; 爲永春水[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:27	鞠ヶ瀬秋夜(英名二十八衆句 ; [26]) / 式惠齋芳幾[画] ; 山閑人交来[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:28	仁木直則(英名二十八衆句 ; [27]) / 式惠齋芳幾[画] ; 巴月菴紫玉[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:29	濱島正兵衛(英名二十八衆句 ; [28]) / 式惠齋芳幾[画] ; 井双笑魯[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:3	遠城喜八郎(英名二十八衆句 ; [2]) / 式魁齋芳年[画] ; 瀬川如臯[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:4	團七九郎兵衛(英名二十八衆句 ; [3]) / 式魁齋芳年[画] ; 一葉舎甘阿[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:5	御所五郎蔵(英名二十八衆句 ; [4]) / 式魁齋芳年[画] ; 河竹其水[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:6	因果小僧六之助(英名二十八衆句 ; [5]) / 式魁齋芳年[画] ; 山々亭有人[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:7	白井権八(英名二十八衆句 ; [6]) / 式魁齋芳年[画] ; 山々亭有人[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:8	福岡貢(英名二十八衆句 ; [7]) / 式魁齋芳年[画] ; 仮名垣魯文[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ㄩ3:75:9	高倉屋助七(英名二十八衆句 ; [8]) / 式魁齋芳年[画] ; 山々亭有人[略伝] (錦盛堂)	
和古書	古典籍	ナ4:680	英名八犬士 (品川屋久助)	2-10~17
和古書	古典籍	ナ4:497	蝦夷錦源氏直垂 / 仮名垣魯文著 ; 一燕齋芳鳥画 (伊勢屋久助)	2-5
和古書	古典籍	ナ4:659	東紫哇文庫 / 仮名垣魯文作 ; 芳幾, 錦朝楼芳虎画 (文昇堂)	
和古書	古典籍	ナ4:736	大山道中膝栗毛 / 仮名垣魯文著	5-2
和古書	古典籍	ナ4:737	小栗一代記全傳 / 鈍亭主人作 ; 芳年画 (品川屋杉浦朝治郎)	
和古書	古典籍	ナ4:676	童絵解万国噺 / 仮名垣魯文序 (山田屋庄次郎)	
和古書	古典籍	ナ4:687	童絵解万国噺 / 仮名垣魯文訳 ; 孟齋芳虎画 (錦橋堂壽梓)	6-2
和古書	古典籍	ナ4:723	男達吾妻花川戸 / 鈍亭魯文作 ; 一容齋直政画	
和古書	古典籍	ナ4:666	於歳玉毬唄絵解 (伊勢屋久助)	1-2
和古書	古典籍	ㄩ3:121	外国人物尽	
図書	OPAC	ㄩ3:122	仮名読新聞 第三百十一號 / 風也坊投書 ; 孟齋画 ([仮名読新聞社])	
和古書	古典籍	ナ4:10	仮名読八犬伝 (文溪堂)	4-4
和古書	古典籍	ナ4:755	仮枕浮名の仇浪 / 仮名垣魯文作 ; 歌川国貞二世画	
和古書	古典籍	ナ4:669	仮枕巽八景 (金松堂辻岡屋文助)	
雑誌	OPAC	キ00104	起廢病院醫事雑誌	10-2
図書	OPAC	ハ4:22	胡瓜遣 / 仮名垣魯文著 (椀屋喜兵衛)	7-2
図書	OPAC	ヤ8:254	暁齋鈍画 / 河鍋洞郁畫 (稲田源吉)	
和古書	古典籍	ㄩ3:98:1	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ㄩ3:98:10	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ㄩ3:98:11	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ㄩ3:98:12	近世水滸伝	12-4
和古書	古典籍	ㄩ3:98:13	近世水滸伝	12-3
和古書	古典籍	ㄩ3:98:14	近世水滸伝	12-2
和古書	古典籍	ㄩ3:98:15	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ㄩ3:98:2	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ㄩ3:98:3	近世水滸伝	
和古書	古典籍	ㄩ3:98:4	近世水滸伝	

国文学研究資料館蔵 仮名垣魯文著作リスト(暫定版)

○ 国文学研究資料館所蔵資料の目録は、概ね2つの収録基準で分かたれている。

1. 江戸時代以前成立の資料(多巻もの初刊を含む)

→ 古典籍総合目録(<http://base1.nijl.ac.jp/~koten/>)

マイクロ・和古書目録(<http://base1.nijl.ac.jp/~wakosho/>)

2. 上記以外の図書・雑誌

→ 国文学研究資料館 OPAC(<http://opac.nijl.ac.jp/>)

仮名垣魯文の著作は両目録にまたがって収録されており、通し検索が出来ない。今後の利用・調査の便を図るため、本展示の準備段階で確認した魯文著作および関係資料の一覧を作成し、暫定版リストとして掲載する。

○ 一覧表には、2006年10月時点で請求番号が付与されている資料について、書名の五十音順で配列した(整理未完のため、上掲した1および2の目録で検索できない資料を含む)。各項目に記した内容は以下の通り。

資料区分 : 和古書 / 図書 / 雑誌の別

目録区分 : 検索対象目録(古典籍 / OPAC)

請求番号 : 資料の請求番号(多巻ものは原則的に集合部分まで)

資料 : 書名 / 編著者名(出版者)

展示番号 : 展示目録の項番

○ 和古書の資料記述は、受入段階で作成した仮データがそのまま残存しているケースもある。

○ 多巻ものは原則として集合単位を示した。但し、展示目録内で冊単位の参照がある場合には、多巻もの全体を示した。

資料区分	目録区分	請求番号	資料	展示番号
和古書	古典籍	ナ4:722	嗚呼忠臣楠氏碑	
和古書	古典籍	ナ4:700	足利勲功記 / 鈍亭魯文作 ; 一壽齋芳員画(糸屋庄兵衛板)	
和古書	古典籍	ユ3:127	東錦浮世稿談 伊藤凌西(山城屋甚兵衛)	
和古書	古典籍	ユ3:127	三好屋魯山(東錦浮世稿談) / 一魁齋芳年筆 ; 仮名垣魯文填句	
和古書	古典籍	ナ4:661	安達原黒塚物語	2-3
和古書	古典籍	ナ4:744	當九字万倍曾我 / 仮名垣魯文作 ; 歌川国輝画(加賀屋吉兵衛)	
和古書	古典籍	ナ4:665	雨夜鐘四谷雑談(笑壽屋庄七)	
和古書	古典籍	ヤ7:78	安政午秋頃痢流行記 / [仮名垣魯文著](天壽堂蔵梓)	3-3
和古書	歴史	Y1422-8	安政見聞誌	3-1
和古書	古典籍	ヤ3:10	安政風聞集	
和古書	古典籍	ヤ3:19	安政風聞集	3-2
和古書	古典籍	ヤ3:23	安政風聞集	
和古書	古典籍	ヤ3:27	安政風聞集	
図書	OPAC	ハ4:244	稲葉猿雪灯新話 / 仮名垣魯文述 ; 孤蝶園若菜編(鈴木喜右衛門)	
図書	OPAC	ハ4:249	牛店雑談 安愚楽鍋	7-3
図書	OPAC	ハ4:4	牛店雑談 安愚楽鍋	1-8
図書	OPAC	ハ4:86	牛店雑談 安愚楽鍋 / 仮名垣魯文著(誠之堂)	
和古書	古典籍	ナ4:705	薄緑娘白波 / 仮名垣魯文著 ; 芳幾画(加賀屋吉兵衛板)	4-5
和古書	古典籍	ナ4:57	梅春霞引始(金松堂辻岡屋文助)	4-2
和古書	古典籍	ナ4:66	梅春霞引始(金松堂辻岡屋文助)	4-2
和古書	古典籍	ナ4:523	雲竜九郎偷盗伝(笑壽屋庄七)	
図書	OPAC	ユ3:76	英国商船	
和古書	古典籍	ユ3:75:1	目録(英名二十八衆句 ; [目録])(錦盛堂)	
和古書	古典籍	ユ3:75:10	姐妃の於百(英名二十八衆句 ; [9]) / 式魁齋芳年[画] ; 仮名垣魯文[略伝](錦盛堂)	12-6

執筆者等一覽

青木 稔弥

複合領域研究系客員教授・神戸松蔭女子学院大学教授

青田 寿美

複合領域研究系助教

神林 尚子

東京大学大学院生

北村 啓子

アーカイブズ研究系助手

木戸 雄一

複合領域研究系助手

ロバート キャンベル

東京大学大学院助教

小林 実

複合領域研究系プロジェクト研究員

佐々木 亨

徳島文理大学教授

佐藤 至子

嵯山学園大学助教

高木 元

千葉大学教授

高橋 (山下) 則子

文学形成研究系教授

谷川 恵一

複合領域研究系教授

中丸 宣明

山梨大学助教

福井 辰彦

京都女子大学非常勤講師

間城 美砂

管理部事業課学術情報係事務補佐員

柳 宗利

管理部事業課調査収集係技術補佐員

山田 俊治

横浜市立大学教授

山本 和明

相愛大学教授

ROBUN 仮名垣魯文百覧会 展示目録

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

国文学研究資料館

普及・連携活動事業部

〒一四二一八五八五 品川区豊町一六一〇
電話〇三(三七八五) 七一三一

<http://www.nijl.ac.jp/>

(平成一八年一月一日 三版)

© 人間文化研究機構
複写 断無 禁



